特別史跡特別名勝

鹿苑寺(金閣寺)庭園

防災防犯施設工事に伴う発掘調査報告書

1997

鹿　苑　寺

序

北山鹿苑寺は、俗称金閣寺と呼ばれているが、それは境内鏡湖周辺に建つ舎利殿に金箔が張られていて、金色燦然として輝いており、故にかく呼ばれるようになったのはすでに周知のことであろう。

鹿苑寺の山号は北山という二字である。これは左大文字と、衣笠山一帯が「北山」と呼ばれていて、かく名づけられたと思われる。この北山という地名は遠く平安時代初期までさかのぼる。当時このあたりには、霊厳寺・興隆寺・施無畏寺・法音寺などの寺々が建てられていた。この地は公卿たちの遊猟の地でもあったのだが、円融天皇・花山天皇・三条天皇・二条天皇などの陵墓をはじめ数多くの塚が示すように、火葬が盛んに行われていたところでもあった。故に寺院の建立も盛んに行われたのである。

この地がにわかに脚光を浴びたのは、時の太政大臣・正一位西園寺公経の所有に帰してからである。

西園寺公経は、後鳥羽上皇の鎌倉討幕計画をいち早く鎌倉方へ通報したことで、鎌倉幕府から京都朝廷のことを総てまかされることになり、絶大な権力を握る。その権力の絶頂にある時、北山の地を手に入れて、ここに氏寺西園寺の建立を思い立ったのである。

完成後の姿を知るには『増鏡』の「内野の雪」の記述に詳しい。広大な敷地には廣い池が掘られ、池にそそぐ四十五尺の瀧。滝のもとに不動堂、さらに本堂・功徳蔵院・五大堂・成就心院・法水院・無量光院、池のほとりに妙音堂等々が建ちならぶのである。

しかし、もともと西園寺家が権力を得たのは鎌倉幕府への協力が原因であった。幕府が続くかぎりその地位は安泰であったが、幕府が滅亡すると次第に権勢の座から遠ざかり、北山第も実俊の時代になると次第に荒廃して行く。『太平記』によると、康安２年（1362）に書かれているありさまは、「五柳先生ガ旧跡、七松居士カ幽栖モ角ヤト覚テ、物サビタリ…」とある。

五柳は陶淵明、七松居士は鄭薫のことで共に世捨て人。世捨て人の住まいのようになりはててしまったのである。

かつて地上の仙郷、壺中の天地と評された北山第もこのように荒廃してしまったのだが、やがて足利三代将軍義満公によって再び歴

史上に大きくクローズアップされることになる。

三代将軍義満公は、37 歳の応永 2 年 (1395)、突如として出家する。そして元服したばかりの、わずか 9 歳の義持に将軍職をゆずり隠居する。隠居し出家したからには当然その別邸が必要となってくる。そして選ばれたのがかつて栄華を誇った北山第であった。

応永 4 年 (1397) 正月、河内国の領地と交換して入手した北山第の大改修工事がはじめられ、翌年には 38 万貫、完成時には現在の百億円を優に超える巨額を投じた大工事であった。義満が特に力を入れたのが、鏡湖池辺に建てた「舎利殿」であった。特筆されるのは、その舎利殿の全部に金箔が張られたことで、「金閣」と呼ばれ、これが金閣寺の俗称となって今に至っている。

応永 15 年 (1408)5 月 6 日、51 歳で義満はその生涯を北山殿で終える。そして遺言により寺となり、「鹿苑院殿准三宮大相國天山道義大禅定門」から鹿苑寺と号され、幾多の変遷を経ながら今日に至っているのである。

此の度、境内の発掘調査が行われたのであるが、とても往時の全貌が判る由もないとしても、その一端でも伺う発端となれば幸いである。

この報告書作成にあたり、多くの方々の労をわずらわし、ここに完了し発行のはこびとなったことにたいし、関係各位に満腔の謝意を申し上げ擱筆する。

平成 8 年 11 月

鹿苑寺住職　有馬頼底

ごあいさつ

北山鹿苑寺は、足利義満の北山殿を改めて寺院とし義満の菩提を弔うために創建されていて、境内の池庭にかつての北山殿の名残を伝えています。池畔に立つ三層の殿閣金閣は著名であり、俗称金閣寺もこの殿閣の存在に由来しています。さらにさかのぼりますと鎌倉時代の西園寺家の菩提寺西園寺と北山殿が営まれた由緒ある境域でもありました。

現在、寺境内の大半を占める大池と中島そして池畔に並び立つ金閣・方丈・大書院・庫裏などの建築群などが一体になり優れた景観を生んでおり、それらの背景を作る裏山の上の池、安民沢や茶屋夕佳亭そして不動堂なども主要な景観要素を構成しています。これらの特別史跡特別名勝を特徴づける建築・庭園について防災防犯設備工事が文化庁・京都府教育委員会および鹿苑寺防災防犯設備委員会の指導のもとに実施されました。その工事と一連の事前の発掘調査が昭和 63 年 (1988) から平成 4 年 (1992) にかけて実施され、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託されて発掘を行いました。

この報告書は、5 次にわたり実施した発掘調査と立会調査のそれぞれについて調査経過と概要を記述し、検出しました遺構・遺物について個別に考察し、それらの総合的所見について考察を加え全文をしめくくっています。なお、京都市の文化財に指定されました修羅は、今回の調査の過程で検出したものであることを申し添えます。調査と本報告書の刊行につきましては多くの制約がありましたなかで、格別に配慮していただき初期の目的を達成することができました。ここに、ご住職をはじめ寺務所当局に方々に深く感謝いたします。また、調査にあたり指導・助言を賜りました文化庁・京都府教育委員会・鹿苑寺防災防犯設備整備委員会の各関係者各位に厚く感謝とお礼を申し上げます。

平成 8 年 11 月

財団法人京都市埋蔵文化財研究所
所　長　川 上　　貢

例　　言

1　本書は、昭和 63 年 (1988) 度から平成 6 年 (1994) 度にかけて、鹿苑寺境内において防災防犯設備設置工事に伴って実施した発掘調査の概要報告である。

2　事業は、文化庁、京都府教育委員会、鹿苑寺防災防犯設備整備委員会の指導のもとに実施し、発掘調査は財団法人京都市埋蔵文化財研究所が行った。

3　本書の執筆は、下記のように分担した。

第 1 章、第 2 章、第 3 章、第 4 章 1・4	前田義明
第 4 章 2	東　洋一
第 4 章 3	眞喜志悦子
付章	西村　康

4　発掘作業、整理作業、本書の作成作業には、上記執筆者のほか以下の者が参加した。
鈴木久男・磯部　勝・菅田　薫・網　伸也・岡田文男・清藤玲子・桜井みどり・辻　祐司
南　孝雄・百瀬正恒・山本雅和

5　写真は、牛嶋　茂 (現奈良国立文化財研究所)、村井伸也、幸明綾子が担当した。表紙カバーの写真は柴田秋介氏撮影。

6　編集については、前所長　杉山信三、所長　川上　貢の指導のもとに行った。

7　本書中で使用した方位と座標の数値は、平面直角座標系Ⅵによる。座標の数値はkm単位である。標高は T.P.(東京湾平均海面高度) による。

8　本書で使用した土色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帳』に準じた。

9　本文中の地図は、京都市長の承認を得て同市発行の京都市街図 (縮尺 1/25,000) を複製して調整した。

10　題字は、鹿苑寺執事長　江上泰山氏による。

11　付章は、奈良国立文化財研究所　西村　康氏にお願いした。感謝の意を表する。

目　　次

第１章　調査経過と概要 …… 1
1　はじめに …… 1
2　沿革 …… 2
3　調査の概要 …… 6
第１次調査 …… 6
第２次調査 …… 8
第３次調査 …… 9
第４次調査 …… 9
第５次調査 …… 10
立会調査 …… 10
安民沢の調査 …… 11
4　日誌抄 …… 13
第２章　遺　　構 …… 19
1　平安時代の遺構 …… 19
2　鎌倉時代の遺構 …… 19
3　室町時代の遺構 …… 24
4　江戸時代の遺構 …… 36
第３章　遺　　物 …… 37
1　瓦類 …… 37
2　土器類 …… 50
3　木製品 …… 54
4　その他 …… 69
第４章　考　　察 …… 71
1　検出遺構と造営 …… 71
2　北山殿創建平瓦・軒平瓦の製作技法 …… 77
3　木製祭祀具について …… 83
4　まとめ …… 89
付章　電気探査 …… 91

写　真　図　版

1　D区全景（北東から）

2　1　D区建物20検出状況（北東から）
　　2　D区建物20東半部（北から）
　　3　D区廊21礎石（北東から）
　　4　D区景石（北東から）

3　L区全景（南東から）

4　1　L区石列検出状況（南西から）
　　2　L区築地1（東から）
　　3　L区築地1暗渠（西から）

5　N区全景（北東から）

6　1　N区修羅（北西から）
　　2　N区修羅（西から）
　　3　N区修羅（東から）

7　1　N区修羅・石組30（南西から）
　　2　N区石組30（北東から）
　　3　N区冠水状況（北から）

8　O区全景（東から）

9　1　O区石列33（南東から）
　　2　O区石列33（南西から）

10　1　A区全景（東から）
　　2　A区全景（西から）
　　3　A区溝34（北西から）

11　1　B区全景（北東から）
　　2　B区建物18（北東から）
　　3　B区建物19（南東から）

12　1　E区全景（東から）
　　2　E区土壙46（南西から）
　　3　F区全景（東から）
　　4　F区溝48（北東から）

13　1　Ⅰ区景石（北東から）
　　2　Ⅰ区溝37（北西から）
　　3　Ⅰ区南半部（東から）

14　1　J区全景（北東から）
　　2　J区石組17（西から）
　　3　J区石組17（南西から）

15　1　P区全景（東から）
　　2　Q区全景（南東から）
　　3　R区全景（南東から）
　　4　T区全景（北から）

16　1　S区全景（北から）
　　2　S区石組31（北東から）

17　1　Y区第1面（北西から）
　　2　Y区第2面（南東から）

18　1　安民沢浚渫状況（西から）
　　2　安民沢浚渫状況（南から）

19　1　安民沢木樋16（西から）
　　2　安民沢木樋16水取り入れ口（南西から）
　　3　安民沢整備後（西から）

20　1　安民沢滝組4（西から）
　　2　安民沢滝組4整備後（南西から）

21　1　C区全景（東から）
　　2　G区全景（北西から）
　　3　H区全景（北から）
　　4　K区全景（北から）

22　1　N区修羅1細部（南西から）
　　2　N区修羅1細部（南西から）
　　3　N区修羅2細部（南西から）
　　4　N区遺物出土状況（北東から）

23　1　O区花崗岩石列33（東から）
　　2　O区花崗岩石列33刻印「二」（東から）
　　3　O区礎石（北から）
　　4　O区東半部全景（南西から）

24　1　S区溝39（南西から）
　　2　S区礎石（南から）

3　V区東半部全景（西から）
4　V区西半部全景（北西から）
25　1　W1区全景（東から）
2　W2区西半部全景（西から）
3　W2区東半部全景（北西から）
4　W2区中央部洲浜状遺構（北西から）
26　1　W3区全景（南西から）
2　W5区全景（南から）
3　W4区東半部全景（西から）
4　W4区東半部景石・瓦出土状況（西から）
27　1　W4区西半部全景（南西から）
2　W4区西半部集石（南西から）
3　W4区中央部建物23（南西から）
4　W4区西半部埋納遺構3（東から）
28　1　X区全景（東から）
2　X区土壙50断面（北から）
3　X区土壙50瓦出土状況（東から）
4　X区溝43（東から）
29　軒丸瓦(1)
30　軒丸瓦(2)
31　軒丸瓦(3)・鬼瓦
32　軒平瓦(1)
33　軒平瓦(2)
34　軒平瓦(3)
35　獅子口
36　軒丸瓦(4)・丸瓦
37　軒平瓦(4)・平瓦
38　土師器(1)
39　土師器(2)
40　土師器(3)・墨書土器・火鉢
41　輸入陶磁器
42　国産陶磁器(1)
43　国産陶磁器(2)
44　国産陶磁器(3)
45　国産陶磁器(4)・墨書陶磁器
46　木製品(1)
47　木製品(2)
48　木製品(3)
49　木製品(4)
50　木製品(5)
51　木製品(6)
52　木製品(7)
53　木製品(8)
54　木製品(9)
55　木製品(10)・布

挿　図　目　次

図 1　調査位置図 …… 1
図 2　調査区配置図 …… 7
図 3　埋納遺構 3 実測図 ……19
図 4　L 区遺構実測図……20
図 5　安民沢地形図 ……21
図 6　安民沢滝組 4 実測図 ……22
図 7　安民沢景石立面図 ……23
図 8　安民沢木樋 16 実測図 ……23
図 9　J 区石組 17 実測図 ……24
図 10　J 区北壁断面図……24
図 11　B・D・I・M・N・O 区遺構実測図 …25
図 12　D 区遺構実測図……26
図 13　D 区石組 29 実測図 ……27
図 14　N 区遺構実測図……27
図 15　O 区石列 33 実測図 ……28
図 16　S 区石組 31 実測図 ……29
図 17　I 区石組 32 実測図 ……29
図 18　X 区遺構実測図……30
図 19　E・F・G・H・K 区遺構実測図……30
図 20　Y 区遺構実測図……31
図 21　A・C 遺構実測図 ……32
図 22　P・Q・R・S・V 区遺構実測図……33
図 23　W 区遺構実測図……34
図 24　軒丸瓦拓影実測図 (1)……39
図 25　軒丸瓦拓影実測図 (2)……40
図 26　軒丸 (3)・軒平瓦拓影実測図 (1)…41
図 27　軒平瓦拓影実測図 (2) ……44
図 28　軒平瓦拓影実測図 (3) ……45
図 29　軒丸瓦実測図 ……47
図 30　丸瓦・平瓦実測図 ……48
図 31　獅子口復原図・獅子口拓影実測図 …49
図 32　N 区出土土師器実測図 ……51
図 33　J・O・V・W 区出土土師器実測図　53
図 34　D 区出土輸入陶磁器実測図 ……55
図 35　N 区出土火鉢実測図 ……55
図 36　N 区出土木製品実測図 (1) ……57
図 37　N 区出土木製品実測図 (2) ……59
図 38　N 区出土木製品実測図 (3) ……60
図 39　N 区出土木製品実測図 (4) ……61
図 40　N 区出土木製品実測図 (5) ……63
図 41　N 区出土木製品実測図 (6) ……65
図 42　N 区出土木製品実測図 (7) ……66
図 43　N 区出土木製品実測図 (8) ……67
図 44　N 区出土漆製品実測図 ……68
図 45　N 区出土墨書板実測図 ……68
図 46　S 区出土木製品実測図 ……69
図 47　銭貨拓影図、刀子・礎石実測図 …69
図 48　臨川寺出土平瓦 ……80
図 49　電気探査コンタ図 ……93
図 50　電気探査データ図 ……94

表　目　次

表 1　鹿苑寺関係略年表 …… 3
表 2　軒瓦計測表 ……95
表 3　軒丸瓦・丸瓦の技法 ……99
表 4　木製品観察表 ……100
表 5　北山殿で行われた宗教行事 ……103
表 6　隔蓂記年表 ……106

第１章　調査経過と概要

１　はじめに

鹿苑寺は臨済宗相国寺派の末寺にあたり、俗に「金閣寺」とも呼ばれ有名である。金閣は内外を金箔で飾った舎利殿の通称[註1]であり、室町時代の北山文化を象徴する建物としてよく知れている。また、特別史跡特別名勝に指定されている鹿苑寺庭園は池泉舟遊式（浄土式）庭園として金閣とよく調和し、多くの参拝客・観光客を集めている。創建当初は多くの建物が建ち並んでいたとされる。これらの建物のほとんどは足利義持による建物移築や、応仁の乱による戦火のために失われたが、金閣だけは破壊を免れ、美しい姿を残してきた。しかし、その金閣も昭和 25 年（1950）に焼失し、現金閣は昭和 30 年（1955）に再建されたものである。近年再建の金閣が風雨による痛みが進行し、昭和 62 年（1987）に漆や金箔の修理が実施された。これを機に現在ある老朽化した

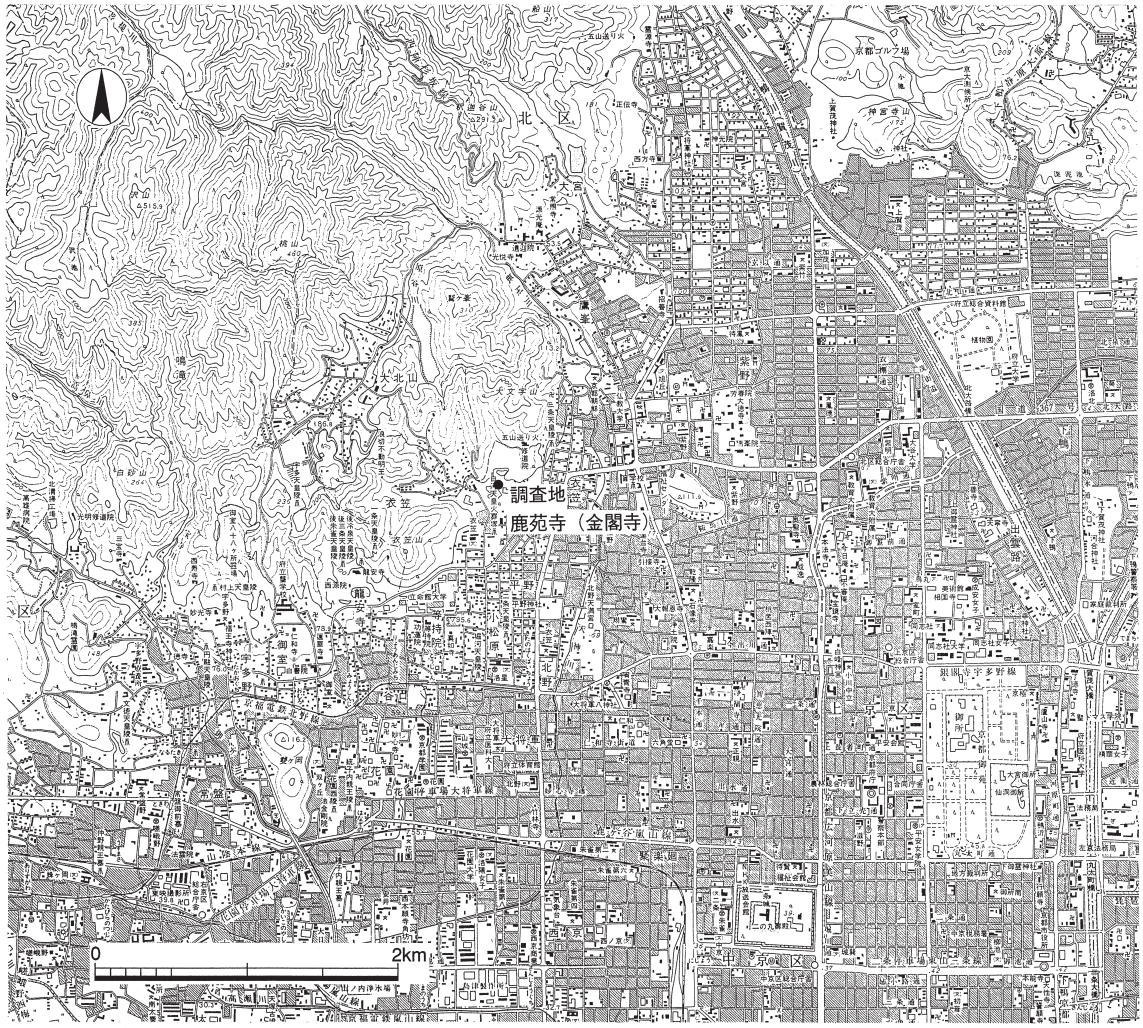


図１　調査位置図（1:50,000）

防災防犯設備の拡充新設が図られ、この工事に伴って事前の発掘調査が必要となった。

2　沿革

北山殿と鹿苑寺の歴史については赤松俊秀氏が「鹿苑寺史」（『鹿苑』鹿苑寺　昭和 30 年）に詳しく記述されているので、ここでは簡単に沿革を述べることにする。

金閣寺は京都盆地の北西衣笠山と大文字山の麓、北山に位置している。北山という地名は平安時代まで遡ることができ、いくつかの寺院があったとされているが詳細は不明である。平安時代中期から後期にかけては、墓所や火葬所[註2]が点在していた。最初に現在の金閣寺の寺域を所有していたことが判るのは伯家であるが、その内容については明らかではない。伯家は花山天皇の孫にあたる延信王が初代で、寛徳三年（1046）に神祇伯に任ぜられ、顯廣王の時から神祇伯を世襲することになった。

『増鏡』によると鎌倉時代になって、藤原公経がこの地を神祇伯家（伯三位仲資王）から尾張国枝庄と交換して手に入れ北山第[註3]の造営を開始した。元仁元年（1224）十二月二日[註4]に公経は北山堂を供養し、西園寺と号した。そして家名を西園寺家というようになった。『増鏡』[註5]によれば主な建物として西園寺（本堂）・善積院・功徳蔵院・妙音堂・不動堂・宝蔵・五大堂・成就心院・法水院・無量光院・寝殿などが建ち並び、栄華の象徴とされてきた藤原道長の法成寺を凌ぐとある。『新古今和歌集』で有名な藤原定家が元仁二年（1225）に北山第を訪れ、その景観を賞賛し[註6]、また元仁四年（1227）には連歌を泉屋で楽しんだことなどを『明月記』に記している。その他、化水院､釣殿などの建物があったとされている。西園寺公経は親幕府派公卿の筆頭で､それによって築き上げた大きな権勢と財を持って、このような大規模な造営が行えたのであろう。公経は源頼朝の姪を妻とし、幕府と密接な関係にあって、絶対的な権力を握っていたのである。弘安七年（1284）七月五日には後深草上皇と伏見天皇が北山第に行幸した[註7]。16 日間滞在し、舟遊びや月見などが催された。庭園には釣殿や池に中島が設けられ、松が植えられていた。後伏見上皇と花園上皇もたびたび北山第に行幸し[註8]、文保三年（1319）三月二十七日、元応元年（1319）十一月九日、元亨二年（1322）五月二十六日、元亨三年（1323）十一月二十六日に訪れている。元応元年と元亨三年には二階へ上がった記事がみられ、当時楼閣建築があったことを窺わせる。後醍醐天皇も元亨二年（1322）六月六日と元亨四年（1324）に行幸している。

しかしながら、栄華を誇った西園寺家も北条氏の滅亡と共に衰退を免れず、建武二年（1335）に西園寺公宗は北条氏と結び、謀反を図ったという理由で処刑された。その後、北山第はかなり荒廃していたと思われるが、後光厳天皇が内裏土御門殿の修理期間中、康安二年（1362）六月北山第に滞在した[註9]。

北山第は室町時代の応永年間に至って、足利義満が西園寺家から河内国の領地と引き替えに譲り受け、応永四年（1397）には北山殿の造営に着手している[註10]。足利義満は応安元年（1368）十二月三十日に三代将軍となり、応永元年（1394）十二月十七日義持に将軍職を譲った。この時武将として初めて太政大臣となり翌年六月に出家したが、依然として権勢を保持していた。北山殿造営

年　号	西暦	記　事	文　献　史　料
貞応年間	1222 1223	西園寺公経、神祇伯家（伯仲資）と尾張国松枝庄を交換し西園寺北山第を造り始める。	『増鏡』
元仁元年12月２日	1224	西園寺北山第の落慶供養。	『明月記』
元仁２年正月14日	1225	藤原定家、園地を称賛、45尺の瀑布あり	『明月記』
嘉禄元年10月23日	1225	不動堂と愛染堂が建てられる。	『明月記』
寛喜元年６月１日	1229	零石と噂された北隆石を牛17頭で運び入れる	『明月記』
寛元２年８月29日	1244	公経北山第で逝去、西園寺北山第の主要建築…本堂・善積院・功徳蔵院・妙音堂・不動堂・五大堂・成就心院・法水院・無量光院	『増鏡』『相国寺塔供養記』『中務内侍日記』
弘安７年７月５日	1284	後深草上皇、伏見天皇行幸。	『中務内侍日記』
康安２年６月	1362	後光厳天皇が北山第に滞在。	『太平記』
応安元年12月30日	1368	足利義満、３代将軍となる。	
応永元年12月17日	1394	義満、征夷大将軍を辞す。同月武将として初めて太政大臣となる。	『兼宣公記』
応永２年６月20日	1395	義満、出家する。	
応永４年４月16日	1397	義満、北山第を西園寺実永から譲り受け、北山殿造営に着手。西園寺家には河内の国に領地を与えられる。	『足利治乱記』『大乗院日記目録』
		北山殿の主要建築…護摩堂・懺法堂・紫宸殿（寝殿）・公卿間（天上間）・舎利殿・天鏡閣・泉殿・会所・看雪亭・法水院	『臥雲日件録』『看聞日記』『満済准后日記』『翰林葫蘆集』
応永９年９月５日	1402	義満、明使を迎える。	『満済准后日記』
応永11年４月３日	1404	七重大塔の立柱式。	『教言卿記』
応永13年３月８日	1406	寝殿の立柱式。	『教言卿記』
応永15年３月８日	1408	後小松天皇、北山殿に行幸。	『北山殿行幸記』
応永15年５月６日	1408	５月義満逝去。	『鹿苑院殿薨葬記』
応永16年２月10日	1409	義持､北山殿を使用。室町殿の小御所･対屋を北山殿に移築。	『教言卿記』
応永23年正月９日	1416	七重大塔、雷により焼失。	『看聞日記』
応永26年11月11日	1419	北山院（日野康子）逝去。	『看聞日記』
応永26年12月12日	1419	南北両第共に破壊されることになる。北山殿の建物移築（舎利殿・護摩堂・法水院以外）　懺法堂→等持寺宗鏡堂　紫宸殿（寝殿）→南禅院　公卿間（天上間）→建仁寺方丈　天鏡閣→南禅寺方丈閣	『看聞日記』『臥雲日件録』
		義満の院号により鹿苑寺と改める。	
応永35年正月18日	1428	義持、逝去。	『満済准后記』
寛正３年10月15日	1462	義政、鹿苑寺に参詣。	『蔭涼軒日録』
応仁元年６月22日	1467	応仁の乱で西軍が鹿苑寺に布陣。堂宇を破壊。	『大乗院寺社雑事記』
文明14年２月４日	1482	義政、東山山荘着工。	『御法興院政家記』
文明17年11月15日	1485	護摩堂焼亡。	『寛隆公記』
長享２年５月９日	1488	鹿苑寺客殿修理。	『蔭涼軒日録』
延徳４年４月27日	1492	納所寮・方丈・会所などの建物が整う。	『蔭涼軒日録』
明応８年４月30日	1499	小方丈の再建。	『鹿苑日録』
文亀４年２月26日	1504	庫裏の新築。	『鹿苑日録』
天文６年６月５日	1537	金閣修理。	『鹿苑日録』
寛永12年８月21日	1635	鳳林承章隔蓂記を書き始める。	『隔蓂記』

表１　鹿苑寺関係略年表（1）

年　号	西暦	記　事	文　献　史　料
寛永14年４月４日	1637	鳳林承章、滝の石組を置き直す。林中から掘り出した海石と川石を用いて蓮池を修理。	『隔蓂記』
寛永17年５月20日	1640	泉水の石組。	『隔蓂記』
寛永21年９月13日	1644	書院前の庭園の樹木を植え替え。	『隔蓂記』
正保２年10月12日	1645	石不動堂の庭園にある井戸の石組と植栽	『隔蓂記』
正保４年10月３日	1647	方丈の庭に岡松を植える。	『隔蓂記』
正保５年２月11日	1648	金閣に通じる道を篭木の内に作る。	『隔蓂記』
慶安２年正月18日	1649	金閣の修理。	『隔蓂記』
慶安３年４月24日	1650	書院の庭に飛び石を打ち芝を伏せる	『隔蓂記』
万治３年８月20日	1660	暴風雨で金閣破損。	『隔蓂記』
万治４年４月５日	1661	金閣修理。	『隔蓂記』
		江戸時代の主要建築…金閣・不動堂・方丈・書院・芳徳屋敷・茶屋	
明治７年	1874	夕佳亭を再建。	
明治26年	1893	拱北廊を再建。	
明治36年	1903	金閣解体修理。	
昭和25年７月２日	1950	金閣焼亡。	
昭和30年10月10日	1955	金閣再建、落慶供養。	
昭和62年	1987	金閣修理…金箔・漆など。	

表１　鹿苑寺関係略年表（2）

には諸大名が動員され、現在金閣寺の鏡湖池内にある細川石や赤松石と呼ばれている景石は、その名残であろう。『臥雲日件録抜尤』[註11]に記された当時の建築をみると護摩堂・懺法堂・紫宸殿（寝殿）・公卿の間（天上の間）・舎利殿（金閣）・天鏡閣・泉殿・会所・看雪亭・法水院などがある。このうち天鏡閣・護摩堂・懺法堂・宝蔵・泉殿などの建物は西園寺時代から残っていたとする赤松俊秀氏の考え方がある。

金閣のモデルは、西芳寺（苔寺）の二層楼閣であったとされる瑠璃殿・無縫閣と考えられている。現在、金閣は初層を法水院と呼び、船着き場と池に突出した漱清（釣殿）を持つ寝殿造りで二層を潮音洞と呼ぶ書院造り（住宅風）であり、三層の究竟頂が禅宗様（唐様）建築に習う特異な建築である。また上層への逓減も仏塔のような画一的なものでない複雑な形態である。『蔭涼軒日録』文明十七年（1485）十月十五日条によれば、二層には観音像、三層には阿弥陀三尊と二十五菩薩が安置されていたらしい。

義満は応永９年（1402）９月５日に明使を北山殿に迎えている[註12]。明使の引見はその後、応永十年二月十九日、十一年五月十六日、十二年五月一日、十三年六月十一日、十四年八月五日に行われた。明に対して義満は日本国王を名乗り国書を送っている。また太上天皇の尊号を得ようとし、義満の死後贈られることになったが結局中止された。

相国寺大塔が応永十年（1403）六月三日に焼失したが[註13]、北山殿で七重塔の再建が試みられ、応永十一年（1404）四月三日に七重大塔の立柱式が行われた[註14]。しかし応永二十三年（1416）一月九日には、この七重大塔は雷で焼失している[註15]。

寝殿は応永十三年（1406）三月八日に立柱式が行われているが、これ以前に寝殿があったこと

は『門葉記』などから明らかで、建て替えられたのであろう。そして応永十五年（1408）三月八日に後小松天皇の行幸が行われている。行幸は三月二十八日まで20日間という長期滞在であった。この時の記録『北山殿行幸記』[註16]には北山殿への順路が記されている。そして惣門・四脚門・中門・寝殿・小御所・常御所などの施設がみえる。三月十二日には北山院（南御所・日野康子の居所）と宗賢門院へ行幸があった。

応永十五年（1408）五月六日に義満が亡くなり[註17]、主を失った北山殿には4代将軍義持が一時移り住んだが、翌十六年十月に三条坊門万里小路の旧御所跡に新御所を造立して移住し本所とした[註18]。応永二十六年（1419）十一月に北山院が亡くなると、十二月には早くも北山殿の北御所寝殿などの建物が壊され、南禅寺や建仁寺に寄進されており、南御所の建物も同じく壊された[註19]。

鹿苑寺が創建された年時については「兼宣公記」の応永二十九年（1422）三月二十一日条に、この日義持が北山鹿苑寺に渡御したことがみえ、この頃より少し遡った頃に創建されたと推測される。16年後の永享十年（1438）六月に鹿苑寺を以て十万門徒になされていて、禅寺として公的に格付けされた。鹿苑寺は本来嵯峨門徒の門徒寺であったが、将軍義教が東福寺の門徒で五山を歴住した大愚性智を住持の請ずるために十万刹になされたようで、大愚の跡は元の門徒寺に戻された[註20]。

上記のように早い段階で取り壊しに着手されている北山殿の施設は『臥雲日件録抜尤』の文安五年（1448）八月十九日条から窺えるように、懺法堂は等持寺へ、寝殿は南禅寺に、殿上は建仁寺にそして舎利殿の北にあった天鏡閣（会所二階殿）は南禅寺へそれぞれ移築されている。また、山上の看雪亭もなくなってその本尊の七仏薬師像のみ法水院に移されて現存していたという様子が窺われ、わずかに残された護摩堂と舎利殿（金閣）が鹿苑寺へ引き継がれたのである。

長禄三年（1459）十月十五日に将軍義政が鹿苑寺へ参詣していて、仏殿（法水院）と三重殿閣（金閣）で焼香し、上階に上がり眺望している[註21]。この後、義政は毎年十月十五日に鹿苑寺に参拝し、金閣に上って四面の全山の紅葉を鑑賞するのが定例となった。この応仁の乱以前における『蔭涼軒日録』の義政の鹿苑寺御成記事から、山内の建物には法水院・鐘間・金閣・泉殿・不動堂・護摩堂を挙げることができる。

応仁の乱の間『大乗院寺社雑事記』や『実隆公記』には鹿苑寺の建物や庭園に大きい被害があったように記しているが、乱後に北山を訪ね山内を巡見した公卿は「乱中破壊以外也、山水相替わらず稀代之見物也」と記している[註22]。

文明十七年（1458）十月十五日、義政の鹿苑寺を訪ねた時、まず金閣で御斎接待があり、漱清亭で手水し、金閣に上り、二階潮音洞の観音像を拝しそして三階究境頂ではかつての阿弥陀三尊や二十五菩薩が失われた白雲だけを残すだけの状態にあり、池の中島や湖畔の楓樹も乱中に伐採されたことなどの説明を受けている[註23]。

その後、中世末までに長享二年（1488）に客殿を修理し[註24]、天文六年（1537）～七年には2年に分けて金閣の屋根を葺き替えている[註25]。

近世には慶長七年（1602）に方丈と庫裏が新造されており[註26]、寛永十三年（1636）に書院が新築さ

れ[註27]、6年後の寛永十九年（1642）に方丈の柱を根継ぎし、上台所を新築している[註28]。寛永二十一年（1644）には金閣の小修理があり[註29]、翌年には不動堂の屋根を葺き替え、柱の下がりを直している[註30]。正保四年（1647）に茶屋の下に寮舎が新築された[註31]。

慶安二年（1649）正月から金閣の修理に着手していて、義満の像や本尊像を客殿に移し、柱や桁の傾きを直し、屋根を葺き替え、銅樋を取り付け、小壁のゴフンを塗り替え、建具の金物を取り替えるなど半年後の六月二十一日に義満像を遷座させて修理を終えた[註32]。続いて承応三年（1654）に方丈の屋根を葺き替え、翌年四月に金閣の本尊三尊を修補し、九月に金閣二重目岩窟の内に安置する勢至像（大仏師左京作）ができている[註33]。

寛文元年（1661）九月二十九日に後水尾院が鹿苑寺に御幸され、金閣・滝・茶屋の順にご覧になり、山上から風景を眺められ、石不動へそして茶屋を経由して書院で休まれた後、金閣にて茶と酒を振る舞い接待されたことを『隔蓂記』に記録している。延宝九年二月五日に黒川道祐が鹿苑寺を訪ね、山内の状況を記事にしたが、寺の十境には金閣の初層法水院・二階潮音堂・三層究境頂・閣南の鏡湖池・閣北の竜門瀑・その下の岩下水・銀河泉・山上の池安民沢を名付けられていた。これらに鎮守の春日大明神と茶亭の夕佳亭が挙げられる[註34]。

近代における大きい変化は明治初年（1968）に夕佳亭と拱北楼が焼失し、明治7年（1874）に夕佳亭が同26年（1893）に拱北楼が再建されている。また、明治14年（1881）に内務省から下賜された保存資金を基金に、金閣や庭園の保存整備を目的とする金閣会が設立されている[註35]。そして、明治30年（1897）に金閣が特別保護建造物に指定されていて、同36年（1903）から39年（1906）にかけて金閣が修理され、後世の改変箇所の復原や屋根葺き替えなどが実施された。

昭和25年（1950）7月2日に金閣が焼失する痛ましい出来事があったが、昭和27年（1952）4月1日から金閣の再建に着手し、同30年（1955）9月30日に竣工していて、およそ創建当初の規模と形式に復原されて金閣が再現した。

3　調査の概要

第1次調査（1988年度）

調査区は当初金閣北側の園路（A区）、貯水槽・ポンプ室予定地（B区）に設定した。その後、庫裏東側の畑地（C区）、番所北側の防災センター予定地（D区）、放水銃予定地の三箇所を追加し調査を実施した。それぞれの調査区では検出遺構の状況に応じて適宜拡張を行った。園路（参道・A区）は多くの参拝者によって硬く踏み固められているため、ミニユンボを導入して、硬い砂利層を除去したのち、手掘りによって調査を行った。

今調査で検出した主要な遺構は、建物、溝、土壙などである。A区は金閣北側の東西方向で、幅1.5m、長さ42mの細長いトレンチである。地山層と思われる黄褐色砂礫層が中央部から西へと傾斜しており、その西側で南北方向の溝状遺構を検出した。また調査区東部では幅が120cm、高さが15cmを測る南北方向の土盛を検出した。黄褐色粘質土を盛り上げているが、調査面積が狭いため遺構の性格を明らかにすることはできなかった。

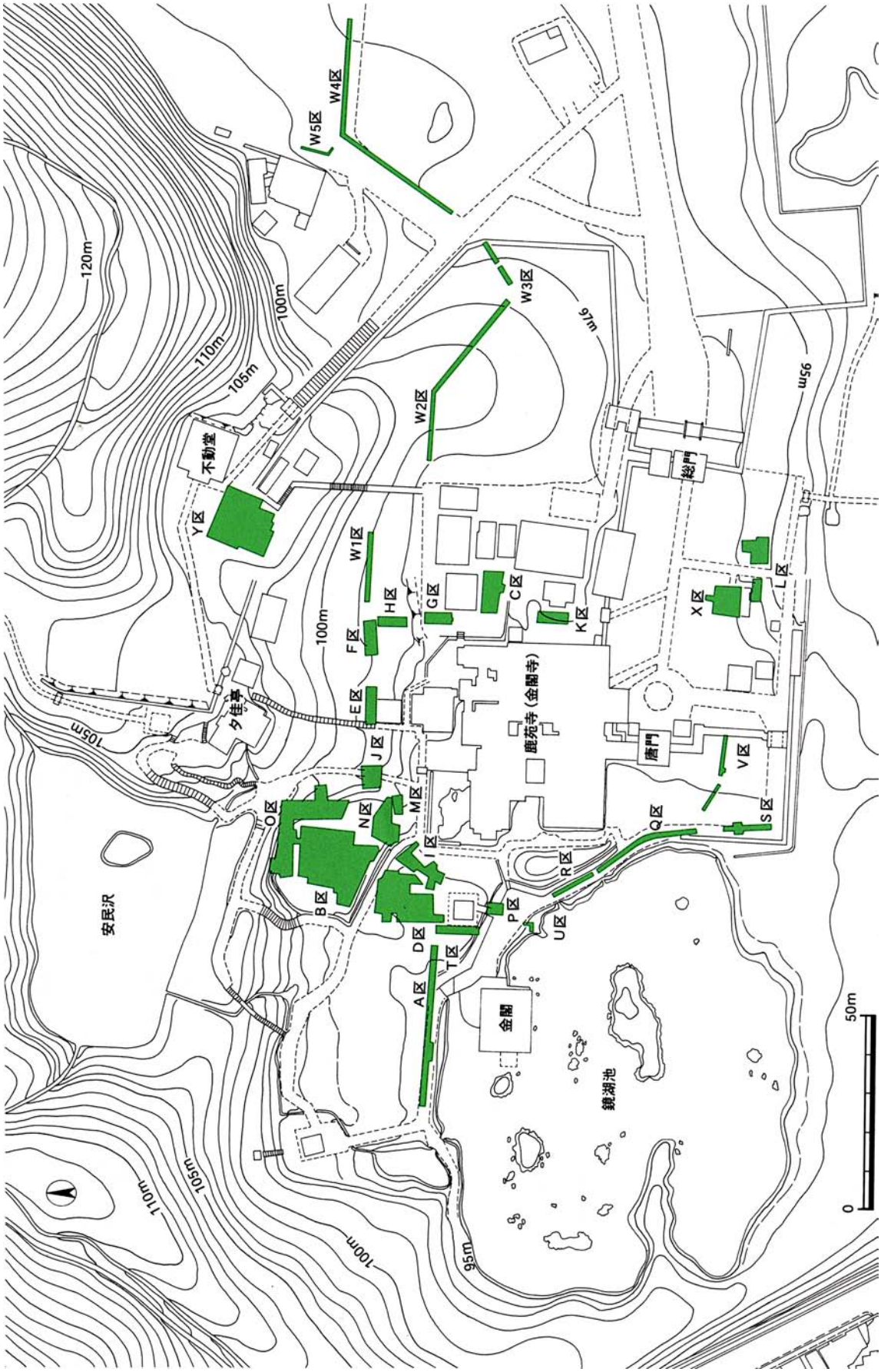


図２　調査区配置図（1:1,500）

B区では当初貯水槽の規模である8×15mの調査区を設定したが、建物遺構を検出したため、貯水槽の位置が変更となった。そのため調査区の拡張が必要となった。調査の結果は建物・溝・土壙などを検出した。

C区では現耕作土層を除去すると、直下が黄褐色混礫砂泥層の地山層となる。西側ほど地山面が高い。この地山面を掘り込んでいるピットを多数検出した。調査面積が狭いため、建物の平面形や規模を知るには至らなかった。

D区は番所の北側にあたり、A区とB区の中間である。地表面から15～20cmほどの深さで焼土層を確認し建物と溝を検出した。建物は梁行と桁行の柱間隔が共に2.3mの等間隔を測る礎石を検出したが、調査区南半は庭木を植えた穴によってかなり撹乱されている。東半部では庭石を検出し礫敷きもみられ、西側と様相がことなり、庭園を取り込んだ建物と思われる。

出土遺物は整理箱で43箱を数えるが、その大部分を瓦類が占め、その他に土師器や陶磁器が少量ある。瓦には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦がある。軒丸瓦には三巴文、軒平瓦には菊花唐草文を配し、いずれも小振りなものが多い。輸入陶磁器には二次焼成を受けたものがみられる。

第2次調査（1989年）

本年度の調査は貯水槽・ポンプ室からのびる共同溝予定地と消火栓および電線の配管工事に伴う発掘調査と立会調査を実施した。共同溝はポンプ室から東へのび庫裏の東を南へ向けて鐘楼の横までのルート（東ルート）と、金閣の番所（防災センター）に接続するルート（西ルート）がある。E区からO区までの調査を実施した。検出した主要な遺構には、石組遺構、景石、溝などがある。次に主な遺構遺物を検出した調査区について述べる。

共同溝の東ルートでは、E区より東は室町時代の明確な遺物は検出できなかったが、切り通しの西側斜面のJ区で、石組遺構を検出した。石組みは石を縦に組んだ状態でみつかっており滝組のようにもみえる。J区の西側N区では、修羅2基、景石2個、石組溝を検出した。修羅は縦に2基並べたような状況を呈し、多量の土器（土師器皿）と木製品を伴って出土した。西ルートのI区では現水路と重なっていること、予定地内に大きな庭木があることにより、調査区に制限を受けたが、D区で検出の石組遺構の続きと、現水路と重複して、同一方向の室町時代以降の溝を検出した。

貯水槽・ポンプ室予定地の北側と東斜面にあたるO区では、斜面の裾部で東西方向の石列を検出した。石列は西半がチャートの自然石、東半が花崗岩の切り石を並べている。石列は東側で途切れるが、その延長上で斜面の裾部に沿って石を切り取った溝を検出し、逆L字形に石列があったことから推測される。花崗岩の切り石は転用材と思われ、方形のホゾ穴や「二」の刻印が認められた。

鐘楼の南側で実施したL区は消火栓と電線の埋設工事に伴う立会調査で、石列遺構を確認し発掘調査に切り替えた。その結果、築地であることが判明した。遺構の残存状態は極めて良好である。時期は層序と出土遺物からみて平安時代後期に比定できる。

鏡湖池東側の園路の調査（P～U区）は、幅の狭い調査地区のため十分な成果は得られなかっ

たが、S 区で花崗岩の切り石を用いた礎石・景石・東西方向の溝（掘）などを検出した。礎石が据えられている面は硬く締まり、タタキ状となっている。S 区では礎石や景石を検出したため、部分的に断ち割りを実施したのみであるが、下層で鎌倉時代に遡る池状の堆積を認めた。西園寺北山第の園池の一部と思われる。

今調査でもっとも注目されている遺物としてはN 区池から出土した修羅である。修羅は 2 基出土し、同時に土器と木製品を多く伴っていた。修羅の樹種はクリとケヤキで、いずれも二股の木を利用して作っている。木製品は折敷と箸がもっとも多く、他に曲物、刀子の鞘、人形、陽物形などがある。土器は土師器皿が大半を占め、輸入陶磁器が少量みられる。

第 3 次調査（1990 年度）

今年度の調査は、東ルートの共同溝（本管）から寺域東部のバス駐車場へ向かってのびる消火栓の送水管と、防犯設備の電線埋設工事に先立って実施した発掘調査である。埋設管の工事幅のみを調査対象としたため、調査区の幅が狭く、延長距離の長い調査となった。調査は西側の共同溝に近いところから始めて、W1 区から W5 区までの五箇所の調査区を設定した。検出した遺構は、平安時代中期から室町時代まで及ぶが、調査区の幅が狭いため、遺構の規模や性格を明らかにし得なかったものが多い。

W2 区では調査区東半部で、池状遺構を検出した。池の西岸にあたると思われ、西から東へゆるやかに落ちる肩部に、玉石を敷いて洲浜を形成している玉石は石英の摩滅した白色の石を用いていた。池の底部には白色の粘土を貼っているが、池の堆積を示すような腐植土層はみられなかった。W2 区の東端部および W3 区と W4 区の西部では池の下層より、平安時代中期から後期のピットと包含層を検出した。ピットは堀立柱建物の柱穴を思わせるが、小面積のため建物になるかどうかは不明である。W2 区から続く池状遺構の東端は、堆積状況からみて W4 区の西半部にあたるが、肩部が現代溝に撹乱されている。W4 区の東半でも小規模な池状遺構を検出した。池は多量の瓦で埋められていた。

今調査で出土した遺物は整理箱で 53 箱を数える。平安時代中期と後期の遺物は少量で、室町時代の瓦が大半を占めている。軒瓦は第 1 次・第 2 次と同様な瓦当文様（巴文軒丸瓦・菊花唐草文軒平瓦）が出土している。これまでは小型瓦（甍棟瓦）がほとんどであったが、今回 W4 区の池状遺構から一般的なサイズの瓦が出土し、丸瓦・平瓦も多い。

第 4 次調査（1992 年度）

第 3 次調査までは防災工事に伴う調査であるが、第 4 次調査は鐘楼の建て替え工事に先だって鐘楼の石積み部分の痛みが激しくなって修理することとなり、工事に伴う発掘調査を実施した。鐘楼の範囲だけの調査のため、小面積である。

楼閣の基礎部分を除くと、下層より瓦や陶磁器の廃棄土壙を検出した。土壙には瓦が多量に投棄され、埋土は軟弱な堆積を示しており、その上に鐘楼の石積みが行われたため、石積みが緩んできたことが明らかとなった。鐘楼からは天保十年（1839）の棟札がみつかっているため、下層の土壙から出土した陶磁器の年代決定に参考となる。

土壙のために江戸時代以前の遺構は破壊される結果となったが、調査区の北辺で室町時代の東西溝を検出した。また土壙や溝に削平されていない箇所では、比較的浅いところで平安時代中期の土壙や包含層が検出できた。

第 5 次調査（1994 年度）

今調査は、鹿苑寺境内の北東部に位置する石不動に隣接した茶所である。茶所が老朽化し、南側の斜面に造られたバルコニーも危険な状態となったため、建て直すことになり、それに伴って発掘調査を実施する運びとなった。当初、茶所の建物部分は幅 2m の試掘トレンチを設定し、遺存状況を確認してから、建物全域を調査した。南側斜面は旧茶所のコンクリート製バルコニーの基礎が深く打ち込まれ、大規模に撹乱されていることが判明した。そのため斜面に沿って 2 本のトレンチを設けることにした。

江戸時代後期と江戸時代前期を第 1 面、桃山時代と室町時代の遺構を第 2 面で検出した。江戸時代後期の遺構には溝、落込、集石などがあり、前期の遺構としては調査区西端で検出した石組溝がある。桃山時代は南側の斜面を埋め立てた整地土である。

室町時代の遺構には柵列と柱穴列がある。柱穴列はピットの底部に石を敷いたもので、柱が沈まないようにしたものがあるため柱穴と考えた。柵列はこれらより掘形が小さくて根石がなく、また面的に対応するピットが認められない。

出土遺物は整理箱で 33 箱を数え、各時期のものがあるが、江戸時代以降が大半である。江戸時代前期には土師器、陶磁器、輸入陶磁器などで、桃山時代には土師器、陶器、焼締陶器、瓦などがある。なお、銭貨としては「寛永通寶」が出土している。

室町時代の遺物はピットからの出土で、土師器、輸入陶磁器、石製香炉、瓦、甎があり、そのうち石製香炉はあまり出土例をみないものである。軒瓦はこれまでの発掘調査で出土している瓦と同様な巴文軒丸瓦や唐草文軒平瓦である。

立会調査（1988 ～ 1990 年度）

鹿苑寺では防災防犯設備（グラスファイバーケーブルや電線など）の埋設工事が境内全域にわたって行われ、その工事の立会調査も実施した。掘削工事は幅が狭く、深度の浅いところに埋設されるため、土層の堆積状況を観察する程度であるが、石列や建物礎石を検出することができた。

安民沢北方では自然石と花崗岩の礎石状の石を検出し、その周辺では鎌倉時代の瓦片を採集した。現在安民沢の北側はうっそうとした杉林となっているが、地形を観察すると明らかに人工的な平坦地があり、それを囲うような土塁遺構がみられ、建物遺構が想定される箇所である。さらに斜面を登ったところでは平安時代中期の軒平瓦も採集した。不動堂の東方から斜面を登ったところでは平安時代中期の灰釉陶器壺が工事中に出土した。壺だけ単独に出土し、遺構は明らかではない。

鏡湖池の西から南にかけてほとんど成果がみられなかったが、庫裏の南東方向にある鐘楼の南側で石列を工事中に発見した。石列は工事幅にそって東西方向にのびていたが、きちんと並んでいるところと石列が崩壊しているところがみられた。しかしながら石列がどういう性格の遺構な

のかはこの部分だけでは判断ができなかった。そのため部分的に拡張して、発掘調査（L 区）に切り替えることになった。

安民沢の調査（1993 年度）

鹿苑寺境内には金閣南方に広がる鏡湖池と、北方の一段高くなったところに安民沢という二つの池がある。安民沢は東西約 80m、南北約 40m の大きさで東寄りに中島がある。中島には白蛇塚と呼ばれる五輪塔の笠を五段重ねた石塔が建つ。平成 5 年（1993）9 月頃から安民沢の浚渫工事が行われた。その結果、池内に堆積したヘドロに隠れていた景石が発見されることとなった。北岸に近接している 2 ～ 3 個の景石は工事前から頭部がわずかに露出していたが、今回、合計 11 個検出できた。そのため、安民沢全体と景石の実測を行うことになった。

安民沢は約 3,000 ㎡の面積を持つ広大な池のため、平成 5 年 11 月 30 日にヘリコプターによる写真測量を実施した。しかし、池の汀には全周にわたって木立が繁茂し、航空写真で撮影できない箇所があるため、汀部分は手測りで実測した。

安民沢には二箇所の排水路が存在するが、ヘドロをさらった後、南東の排水用水門付近の池底に木材が埋まっていることが判った。この木材を精査したところ木樋であることが判明した。木樋は現排水路へ向かってのびているが、現在の落とし口からは方向がややずれる。木樋は写真撮影と実測を行いそのまま上部を密閉して埋め戻した。

安民沢は大文字山から流れている小さな小川の水を、北西からと北東から取り入れている。浚渫工事の結果、北東部の注ぎ口で腐植土に埋もれていた小さな滝組が姿を表した。滝組は清掃後、写真撮影を行い、平面図と立面図の写真測量を実施した。現在は埋め戻さず、そのままの状態で保存されている。

註

1 『足利治乱記』上（大日本史料七ノ一）「金泥ヲ以テ悉クタミタレハ、京童トモ是レヲ金閣トソ申奉ル」

2 a 花山天皇を紙屋川上法音寺北に埋葬。『日本紀略』寛弘五年（1008）二月十七日条

b 一条天皇を北山長坂野に埋葬。「日本紀略」寛弘八年（1011）七月八日条

c 三条天皇を北山岩蔭の地に火葬。『帝王編年記』寛仁元年（1017）五月十二日条

d 白河法皇を衣笠山の地で火葬。『中右記』大治四年（1129）七月十五日条

3 文献史料では北山第と北山殿が区別なく使用されているが、本書では西園寺家の造営を西園寺北山第、足利家の造営を北山殿と呼ぶことにする。

4 『百練抄』元仁元年（1224）十二月二日条（国史大系）

5 『増鏡』（日本古典文学大系 87）「内野の雪」に北山第の様子が詳しい。

6 『明月記』元仁二年（1225）正月十四日「…四十五尺瀑布瀧碧、瑠璃池水…」

7 『中務内侍日記』（群書類従日記部 5）

8 『花園天皇宸記』（史料大成）文保三年（1319）三月二十七日条、元応元年（1319）十一月九日条、元亨二年（1322）五月二十六日条、元亨二年六月六日条、元亨三年（1323）十一月二十六日条、元亨四年（1324）二月二十一日条

9 『太平記』巻第 37

10 『足利治乱記』上（大日本史料七ノ一）「同（応永四年ノ春正月中旬ヨリ北山ノ麓ナル西園寺 ノ領地ヲ、前相国（足利）義満入道々義公御隠居トシテ、西園寺殿ニハ河内国ニテ多ノ領ヲ与ヘラ レテ、）」

11 『臥雲日件録抜尤』（大日本古記録）文安五年（1448）八月十九日条

12 『満済准后日記』（続群書類従）

13 『兼宣公記』応永十年（1403）六月三日条

14 『教言卿記』（大日本史料七ノ九）

15 『看聞日記』応永二十三年（1416）正月九日条

16 『北山殿行幸記』（群書類従帝王部）「御道は左衛門のぢん代より北へ、一条を西へ、大宮を北へ、きた小路よりたかはしを西へ、北山どのの惣門に門にいたるとぞきこえし。」

17 『翰林葫蘆文集』鹿苑院百年忌陞座散説

18 『教言卿記』応永十六年（1409）十月二十六日条

19 『看聞日記』応永二十六年（1419）十二月十二日条

20 『蔭涼軒日録』永享十年（1438）十月九日、『鹿苑日録』天文十二年（1543）八月十一日条

21 『蔭涼軒日録』寛正三年（1462）十月十五日条

22 『宣胤卿記』文明十二年（1480）二月二十四日条

23 『蔭涼軒日録』文明十七年（1485）十月十五日条

24 同上、長享二年（1488）五月二十六日条

25 『鹿苑日録』天文六年（1537）六月十九日、同七年六月十二日条

26 同上、慶長七年（1602）六月二十三日条

27 『隔蓂記』寛永十三年（1636）四月二十八日条

28 同上、寛永十九年（1642）三月十五日条

29 同上、寛永二十一年（1644）二月十六日条

30 同上、正保二年（1645）九月十三日条

31 同上、正保四年（1647）二月五日条

32 同上、慶安二年（1649）正月四日～六月二十一日条

33 同上、承応四年（1655）四月六日・明暦元年（1655）九月二十四日条

34 『東西暦覧記』

35 『京都府寺誌稿』

4　日誌抄

第1次調査（1988年度）

10.25　B区の調査開始。トレンチ設定し手掘で腐植土層除去。
10.26　盛土を掘り下げる。
10.27　盛土を掘り下げる。
10.28　盛土を掘り下げる。
10.29　第1層、第2層の掘り下げ。
10.31　東半部、第2層掘り下げ。二箇所で礎石検出。
11. 1　遺構検出実施。礎石と東西方向に石の抜き取り穴を検出。
11. 2　東半部で瓦と石を敷き詰めた箇所検出。
11. 4　第1面の全景写真および実測開始。
11. 7　第3層の掘り下げ開始。
11. 8　西半部遺構検出。東半部第3層掘り下げ。第1面平面実測。
11. 9　1×4間分の建物検出。
11.10　南西隅と北西隅を拡張する。
11.11　第2面の全景写真および実測開始。
11.12　平面と断面の実測。
11.14　C区の調査開始。耕作土を除去し溝を検出。
11.15　東と南に1m 拡張。土壙、溝、ピット検出。
11.16　全景写真。土壙より室町時代の瓦出土。
11.17　土壙を南に拡張。
11.18　全景写真。実測開始。
11.21　C区調査終了。
11.22　B区、南に拡張開始。
11.24　南に拡張。
11.25　ピットと溝を検出。
11.26　根石を持つピット検出。
11.28　全景写真。
11.29　実測開始。
11.30　A区の調査開始。盛土層を重機で除去。
12. 1　重機掘削。
12. 2　遺構検出実施。東端部で南北方向に幅1.5ｍの黄褐色土を盛り上げ両側に石を置いた遺構を検出。西半部では礫を集積した遺構を検出。
12. 5　溝34の写真撮影。土壙の検出と掘り下げ。
12. 6　西半部第2層掘り下げ。溝の検出。
12. 7　溝の掘り下げ。
12. 8　溝の掘り下げ。全面清掃。
12. 9　全景写真。
12.12　実測開始。
12.13　北壁の断面実測。文化庁調査官河原純之氏来訪。
12.14　B区北部拡張を開始。
12.15　北東隅で礎石検出。
12.16　B区、建物18南半部の拡張開始。
12.19　南拡張区掘り下げ。
12.20　南拡張区掘り下げ。撹乱掘り下げ。
12.21　南拡張区掘り下げ。溝3本検出。
12.22　東側柱筋の柱穴を南壁際で検出。北拡張区の掘り下げと遺構検出。
12.23　北拡張区東北部で礎石3個を検出。
12.24　全景写真。
12.26　B区拡張部の実測開始。
12.27　平面実測。北壁断面実測。
1．5　建物18の礎石を断ち割り、実測する。
1．6　溝の掘り下げ。室町期の土師器出土。建物18の立面図作成。
1．9　遺物洗浄。図面整理。
1.10　図面整理。調査前写真の撮影。
1.11　D区の調査開始。コケをはぎ取り松林に移植し盛土層を除去。
1.12　遺構検出開始。礎石を検出。黄褐色土層より土師器皿出土。
1.13　北部で石列を検出。
1.17　北東部で礎石検出。南端部で南に落ちる落込を掘り下げ。
1.18　落込掘り下げ。礎石列は南北2間、東西3間以上。柱間隔は2.3m 等間。
1.19　雨で遺物の洗浄。
1.20　雨で遺物の洗浄。委員会の資料作成。
1.23　雨で遺物の洗浄。委員会の資料作成。
1.24　礎石列を明確にするため東と西に拡張する。西拡張部で礎石を検出。
1.25　東拡張部と北側の実測開始。
1.26　平面実測。出土瓦の拓本。
1.27　拡張実施。西側、北側の礎石を検出。
1.28　遺物の洗浄。
1.30　D区平面実測。
1.31　委員会の現場視察。A区北側、溝34近辺

において電気探査を行う。
2．1　報道発表。
2．2　出土土器の接合。
2．3　全景写真。
2．6　ベルトコンベア 4 本搬入。遺物の洗浄。
2．7　B 区建物 18、A 区溝砂で埋め戻し。
2．8　B 区の盛土移動。
2．9　B 区拡張開始。
2.10　遺物の洗浄と土器の接合。
2.13　B 区の拡張。
2.14　B 区の拡張。2/3 ほど掘り下げ。
2.15　北側拡張。東から遺構面まで掘り下げ実施。
2.16　電気探査を行う。
2.17　遺物洗いと接合。
2.20　根石と礎石を検出。礎石は建物 19 に対応。
2.21　溝の掘り下げ。
2.22　ピット、溝、土壙を検出。A 区埋め戻し。
2.23　落込内に石散布。石を取り上げ溝検出。室町期の土師器皿出土。
2.27　全景写真。
2.28　実測開始。
3．1　平面実測（B 区北拡張部）。
3．2　D区拡張開始。礎石を検出。金閣北側の電気探査。
3．3　第 1 層の除去。B 区北半部を砂で埋め戻す。
3．4　遺構検出実施。
3．6　建物 20 北側に東西方向の石列を検出。石列と建物柱列の間に礎石と庭石を検出。
3．7　東半部、北側と南側を拡張する。北東隅で斜め方向の石列を検出。庭石を検出。
3．8　庭石周辺に玉石を敷いた状況がみられ、その北側に焼土層が広がることを確認。
3．9　南西部拡張する。落込の南肩を検出し東西方向の溝となる。瓦、土師器皿が出土する。
3.10　南東部拡張する。礎石と庭石を検出。
3.13　建物 20 東半部の石敷きを清掃。
3.14　北東部の石敷き清掃。
3.15　全景写真。
3.16　実測開始。
3.17　A 区放水銃予定地トレンチ、西壁に沿って断ち割り。断面写真・実測の後埋め戻し終了。
3.22　D 区拡張部平面実測完了。西壁の断面図作成。
3.23　庭石の立面図作成。調査区南東部の庭石周辺を掘り下げ。
3.24　東側庭石の周辺掘り下げと清掃。
3.25　落込の掘り下げ。西側で庭石検出。
3.27　落込と土壙 44 掘り下げ。
3.28　全景写真と実測。
3.29　庭石の立面図作成。
3.30　東壁に沿って断ち割り。下層から庭石の検出。
3.31　埋め戻し終了する。

第 2 次調査（1989 年 7 月～ 90 年 3 月）

7．7　共同溝周辺に埋設されている既存管の試掘に伴う立会調査を実施する。
7.10　立会調査。
7.20　E・F 区、重機掘削開始。E 区焼土層、土壙、ピットを検出。
7.21　E 区遺構完掘。F 区溝、ピット検出。
7.24　E・F 区、全景撮影。
7.25　平面断面の実測。
7.26　G 区手掘りで調査開始。東西方向に近世以降の瓦が詰まった溝状遺構を検出。
7.27　H 区、重機掘削開始。G 区、溝とピットを検出。
7.28　H 区、ピットと土壙を検出。
7.29　H 区、完掘。I 区、掘り下げ開始。瓦、輸入陶磁器、庭石を検出する。
7.31　G 区・H 区全景写真。I 区でさらに庭石 1 個を検出。
8．1　I 区、西側に拡張する。庭石が点々と置かれ、室町期の瓦、土師器、輸入陶磁器が多量に出土。
8．2　I 区景石周辺の清掃。
8．3　I 区、全景写真。
8．4　実測開始。溝を検出。立会調査中に、J 区、切り通し掘削で西側に南北方向の石列を確認。
8．5　I 区平面実測。
8．7　J 区切り通し部北壁に石組み検出。
8．8　J 区、調査区南半の掘り下げ。中央部は重機掘削中に石が抜き取られ、南端で 1 個検出したのみ。K 区の掘り下げ開始。
8．9　J 区、全景写真と実測開始。
8.10　K 区北西隅で石組井戸を検出。
8.11　K 区、全景写真と実測開始。I 区東側へ拡張。
8.12　文化庁加藤調査官視察。
8.16　J区石組みの立面図作成。I区東拡張部図面作成。
8.17　I 区、溝 2 南に拡張。16 世紀頃の土師器皿出土。
8.18　K 区埋め戻し。I 区溝 37 掘り下げ。

8.19　J区、埋め戻し。I区、西へ拡張。溝37の西肩を検出。D区の東西溝との合流が判明。
8.21　安民沢北側地中配管工事に伴う立会調査を開始する。溝が認められ、瓦、玉縁の白磁椀、須恵器平瓶が出土。
8.22　立会調査。調査地周辺の踏査実施。鹿苑寺境内北端中央部（教会南側）で小野瓦窯と同笵の軒平瓦1点と平瓦を表面採集。
8.23　I区拡張部全景写真。
8.24　I区拡張部の実測。庭石と北部拡張部埋め戻し。
8.25　安民沢北側の立会調査。石不動の北側はチャートの岩盤露出。
8.28　M区調査開始。
8.29　上層・下層の掘り下げ。調査区北端に井戸状遺構を検出。
8.30　雨天のため現場作業中止。
8.31　M区全景写真と実測。
9.1　工事掘削開始に伴い立会調査実施。I区東側で庭石検出。その周囲に土器、木製品が多量に出土。工事を中断させ調査する。
9.2　工事現場にN区を設定し調査を開始。南から掘り下げ。土器・木製品が多量に出土。修羅検出。
9.4　修羅の大きさが不明なため重機で調査区を拡張する。さらに東側でもう1基検出。
9.5　重機掘削面の掘り下げ。遺物の出土状況と景石の写真撮影。
9.6　東側へ修羅2の東部確認まで拡張。
9.7　修羅周辺掘り下げ。遺物の取り上げ。
9.8　全景写真と写真測量の実施。
9.9　庭石、修羅の実測開始。
9.11　修羅、立面図と断面図の作成。
9.12　修羅の報道発表。
9.13　N区出土遺物の洗浄。
9.14　修羅取り上げ準備作業開始。
9.15　取り上げ準備のため、修羅周辺掘り下げ。
9.16　取り上げ準備完了。
9.18　修羅1、型枠を作成しウレタンを注入。クレーンで吊り上げて取り上げ、事務所の東側に仮置。
9.19　降雨により修羅2の取り上げ延期。
9.20　修羅2、H鋼と角材で型枠を作成。ウレタンを注入して取り上げ仮置する。
9.21　I区、工事深堀部の断面清掃。写真撮影と断面実測。
9.22　出土遺物の洗浄。
9.25　鏡湖池南方の立会調査。マンホール部の掘削。
9.26　共同溝掘削。石組みの石が共同溝工事によって抜き取られたことが立会調査によって判明。南側で新たに石が露出。
9.27　出土遺物の洗浄。立会調査。
9.28　共同溝発見の石組み付近の断面清掃、断面写真。
9.29　抜き取られた石の確認と写真撮影。
9.30　出土遺物の整理。
10.2　J区（切り通し）の断面図作成。北壁と南壁。
10.3～6　出土遺物の洗浄。土師器の接合。
10.7　O区調査開始。境内南側の林の中で立会調査中、マンホール設置場で庭石風の石認める。
10.11　O区の調査。南端部、石組みの掘り下げ。
10.12　北部の掘り下げ。段差を検出。
10.13　ポンプ場予定地・貯水槽予定地にトレンチ設定し重機掘削。貯水槽北側トレンチで石列を検出。
10.14　貯水槽北東部にトレンチ設定し重機掘削。
10.16　東トレンチ、壁面の清掃。
10.17　西トレンチを拡張して調査する。
10.18　東トレンチ、溝2の掘り下げ。西トレンチ、石列の清掃。
10.19　西トレンチ拡張。重機掘削。現代石垣撤去。
10.20　重機掘削。石列の抜き取り跡掘り下げ。西トレンチ、石列が東にのび花崗岩の切り石に変わる。
10.21　腐植土層の掘り下げ。花崗岩の切り石にホゾ穴。
10.23　北東部壁面が崩壊する。
10.24　壁面がまたも崩壊し、その上に亀裂が入ったため、石列以東は調査を放棄し埋め戻しを実施。
10.25　崩壊部分を土嚢で補強。西トレンチの清掃。
10.26　全景写真。
10.27　実測開始。
10.30　花崗岩切り石の断面実測と拓本。石列、二箇所で断ち割り。
10.31　鐘楼南側で立会調査実施。鐘楼南東部で東西方向の石列を検出する。
11.1　石列は二段で東部に集石あり。遺物に平安中期の瓦、緑釉陶器、土師器皿、青磁など検出。
11.2　全景写真と実測開始。
11.4　発掘調査（L区）に切り替え、石列部分を北に拡張する。礎石らしき石1個検出。
11.6　南部を重機掘削。室町時代の土器出土。平安時代の緑釉陶器、灰釉陶器混入。
11.7　L区、南拡張部の掘り下げ。
11.8　石列が南北方向にものびるため拡張する。

11. 9　石列南部の掘り下げ。
11.10　築地断面の実測。石列の清掃。
11.13　降雨のため室内作業。
11.14　全景写真と実測の準備。
11.15　実測開始。石列が西へのびるため拡張する。
11.16　西トレンチ石列の検出。北へ一部拡張。東トレンチ南北石列の北を拡張。
11.17　築地の北東部拡張。
11.18　西トレンチ実測開始。東トレンチ北へ拡張。
11.20　O区､B区建物19と連結するように拡張する。建物19の延長と考えられる礎石を検出。ややずれて花崗岩切り石の礎石検出。
11.21　建物19北側の拡張。礎石を検出し写真撮影。
11.22　実測開始。L区西トレンチ全景写真。
11.27　L区、遺構を砂で養生し埋め戻す。
11.28　降雨のため室内作業。
11.29　P区の調査開始。土壙・ピット・2個の礎石検出。
11.30　P区、土壙断面写真。L区埋め戻し。
12. 1　全景写真と実測後P区の調査を終了。
12.18　Q区調査開始。重機掘削を行う。
12.19　第1層掘り下げ。
12.20　第1層、灰色粘土層
12.21　北端部で景石の根石を検出。
12.22　全景写真。実測開始。
12.25　実測終了しQ区の調査終了。
1．8　R区調査開始。重機を用いて掘削し、路面上の固い面で止める。
1．9　北トレンチ南部で東西方向の溝検出。
1.10　第2層掘り下げ。
1.11　全景写真。
1.12　実測開始。
1.13　北トレンチで溝状遺構を検出。時期は室町後期。
1.16～19　室内作業。
1.22　S区の調査開始。重機掘削実施。調査区の中央部で庭石らしき石を2個検出。南東部では根石を検出。
1.23　庭石の南側に東西方向の堀状遺構を検出する。
1.24　溝39の掘り下げ。景石の清掃。
1.25　全景写真。実測開始。
1.26　庭石西側拡張。石を抜き取った跡と思われる土壙を検出する。溝39の南を断ち割り遺構面を検出。室町期の瓦、土器出土。
1.29　降雨のため室内作業。
1.30　全景写真。
1.31　降雨のため室内作業。
2．1　溝39腐植土層より木製仏頭の破片出土。南半部掘り下げ。花崗岩の礎石検出。固い遺構面。
2．2　景石の立面図、西壁断面図作成。
2．3　全景写真。
2．5　南半部礎石の平面実測。景石の西側掘り下げ。
2．6　第3面の平面図作成。第5層で平安後期～鎌倉時代の土器出土。
2．7　北端部掘り下げ鎌倉期の土師器皿・瓦出土。池状堆積を示す。溝39の杭を取り上げる。
2．8　T区の調査開始。重機掘削実施。
2．9　遺構検出実施。
2.10　北端部で東西溝の南肩検出。上層から江戸前期・桃山期の土師器皿出土。下層からはほとんど出土せず。
2.13　全景写真。
2.14　実測開始。
2.15　T区の調査終了。
2.16～20　室内作業。
2.21　U区・V区の作業開始。
2.22　U区地山直上で遺構面検出。写真撮影と実測。V区東トレンチ東半部の写真撮影と掘り下げ。
2.23　降雨のため室内作業。
2.26　U区調査終了。V区西トレンチ第1層掘り下げる。寛永通寶出土。
2.27　西トレンチ砂層検出。東トレンチ庭石1個検出。
2.28　V区東トレンチの第3・4層掘り下げ。
3．1　写真撮影用に清掃するが雨のため延期。
3．2　全景写真。
3．3　実測開始。
3．5　第4・5層の掘り下げ。
3．6　西トレンチ落込と第5層の掘り下げ。落込を検出し掘り下げ。室町期の土器出土。
3．7　東トレンチの中央部で集石を検出。
3．8　全景写真。東トレンチ、鎌倉期の遺物出土。
3．9　第5・6層の掘り下げ。
3.12　南壁断面の実測。東トレンチの埋め戻し。
3.13　両トレンチを埋め戻してV区調査終了。

第3次調査（1990年度）

5.24　W区調査開始。重機掘削実施。
5.25　重機掘削。
5.28　W1区西端部から布目瓦が出土。W2区東端部

から瓦、土師器、緑釉陶器出土。
5.29　W1区土壙を検出。
5.30　W1区完掘。東半部は東に傾斜し池状遺構。鎌倉から室町期の瓦、土師器皿出土。全景写真。
5.31　W2区掘り下げ。肩部に石英の半玉散布。W2区実測開始。
6.1　W1区平面実測。W2区第1・2層掘り下げ。
6.2　落込と溝を検出し掘り下げる。
6.4　W2区第2層掘り下げ。
6.5　W2区第2層掘り下げ。
6.6　W2区全景写真。実測開始。
6.7　W2区平面実測。W1区立ち割り。
6.8　W2区平面実測。
6.11　W2区中央部石組掘り下げ。写真35ミリ。
6.12　W2区立ち割り。
6.13　W2区西半部断面図作成。地山層直上は平安か。
6.14　W2区東半部断面図作成。地山層まで掘り下げ。
6.15　雨のため室内作業。
6.18　築地塀排水溝の断面観察では地山検出できず。
6.19　埋め戻し終了。W4区アスファルト重機で除去。
6.20　W3・W4区調査開始。W4区重機掘削東半部でピット、土壙を検出。
6.21　W3・W4区重機掘削。
6.22　W3区第1層掘り下げ。W4区第1層掘り下げピット、礎石を検査。
6.25　W4区、2.1mの間隔でピットを検出。時期不明。
6.26　W4区、ピットの完掘と清掃。ピットに炭混入。
6.27　W4区、池の掘り下げ。肩部付近には多量の瓦。
6.28　W4区、集石周辺の掘り下げ。
6.29　W4区全景写真。実測開始。
6.30　W3区掘り下げ。遺物まったく出土せず。
7.2　W3区落込の掘り下げ。W4区集石の調査。
7.3　雨のため室内作業。
7.4　W4区東半部第2層掘り下げ。瓦一面に散布。
7.5　W3区平面実測。W4区池28の掘り下げ。
7.6　W4区全景写真。
7.9　W4区東半池28の瓦を取り上げる。
7.10　W4区東半部池28の掘り下げ。
7.11　W5区調査開始。重機掘削。池の堆積層検出。W4区掘り下げ平安後期の遺物検出。
7.12　W5区池完掘後写真撮影と実測実施。W4区緑釉陶器高杯、土師器皿出土。
7.13　W4区掘り下げとピットの検出。10世紀代の土師器皿が6枚重なって出土（埋納遺構3)。
7.16　W4区西半第6層掘り下げ。土壙、ピット検出。
7.17　W4区全景写真。実測開始。
7.18　礎石は保存し立ち割り。平面実測。
7.19　立ち割り作業。断面図作成。
7.20　埋め戻し終了する。

第4次調査（1992年度）

11.25　X区の調査開始。重機掘削実施。現鐘楼の柱基礎は、方形の堀形に礫を埋めたものであることを確認。その下から広範囲に広がる桟瓦の瓦溜を検出。江戸中期から後期にかけての陶磁器と共に室町期の青磁片が少量出土。
11.26　鐘楼柱の基礎堀形掘り下げ。
11.27　土壙49第1層掘り下げ。
11.30　やり方設置。落込1と第1層掘り下げ。
12.1　土壙49と第1層掘り下げ。第1面実測。
12.2　第2層の掘り下げ開始。
12.3　第3層の掘り下げ開始。
12.4　土壙49の掘り下げ。
12.5　第2面実測。
12.7　全景写真。黄褐色泥砂層を掘り下げ。室町期の土師器皿出土。
12.8　落込1の肩部で第1層掘り下げ。室町の土器と瓦出土。
12.9　溝43、土壙、落込掘り下げ。土壙で10世紀代の土師器皿、緑釉陶器、黒色土器出土。
12.10　溝43と落込の掘り下げ。
12.11　溝43北肩が調査区外にのびるために北に拡張。肩部検出。
12.14　全景写真と実測開始。
12.15　土壙の掘り下げ、地山となる。拡張部暗褐色泥砂層掘り下げ。平安中期の緑釉陶器、灰釉陶器、土師器、須恵器が小破片で少量出土。X区調査終了。

安民沢の調査（1993年度）

11.29　本日より安民沢の測量開始。航空写真用の標定点を設定。鏡湖池の基準点から延長させる。
11.30　ヘリコプターで航空写真を撮影。
12.1　午後から地形測量を開始する。西から北へかけ実施。
12.2　地形測量。池の北から東へかけての汀線。
12.3　地形測量。汀線部分は完了。景石の写真撮影。

12. 6　景石の立面図作成。景石 5 ～ 15。築山の地形測量開始。見通しが悪いため、レベルの測点を先に落とす。
12. 7　築山の地形測量。築山部分に測点を設定。
12. 9　築山部分の地形測量。
12.10　地形測量。
12.13　地形測量。
12.15　木樋部分の調査。小口部分を掘り下げ、清掃後写真撮影。実測（平面図・断面図）
12.16　地形測量。
12.17　地形測量完了。
12.20　池中の遺物の検出。
12.21　池中に遺物検出状況の写真撮影（35 ミリ）。遺物の取り上げ。木樋の埋め戻し。本日で調査終了。

第 5 次調査（1994 年度）

8.23　調査器材の搬入。
8.24　茶所崖面コンクリート基礎解体の立会調査。断面に地山面らしき黄褐色土層がみえるが軟弱。
8.25　茶所とトイレの解体作業、立会調査。
8.26　解体作業の立会調査。
8.29　リース物品の搬入。
8.30　本日より Y 区重機掘削開始。段差の斜面は、地山面に沿ってスロープを付けて掘削。
9. 1　本日より精査開始。1 トレンチ中央部で南北方向の平瓦を並べ護岸とした溝を検出。
9. 2　遺構検出実施。ピット、土壙、溝を検出。第 1 層からは江戸前期の土師器皿、陶器出土。土壙からは寛永通寶 1 点だけ出土。
9. 5　段差斜面、石と瓦の清掃。段差斜面の下層、赤褐色泥砂混礫より瓦片（室町か）出土。段差形成は室町時代の可能性あり。
9. 6　2 トレンチ段差斜面の掘り下げ。斜面の下部では地山層が確認できるが、中段から上は瓦も含み、すべて盛土層となる。壁面の清掃。
9. 7　段差斜面の写真撮影。断面の実測。南側へ拡張し溝の延長を検出する。
9. 8　1 トレンチ 2 トレンチの拡張。溝の瓦は段差の肩部までのびる
9. 9　重機導入。段差の上段前面と裾部二箇所を拡張する。遺構検出を実施。建物の基礎と撹乱が多数みられる。
9.12　やり形設置。午前中に設置完了。拡張部の建物基礎・瓦溜・避雷針などの撹乱を掘り下げ。
9.13　遺構検出。溝は調査区南端から 1.5m だけを瓦で護岸しているがその北は素掘り。
9.14　全面清掃。写真撮影。割付。平面実測。斜面拡張部の清掃。
9.15　第 1 面平面図作成。
9.16　雨天のため、室内作業を行う。出土遺物の洗浄。
9.17　第 1 面平面図の作成。
9.19　第 1 面実測完了。東半部の遺構検出。
9.20　東半部第 1 層掘り下げ。ピットと落込検出。溝南端部の瓦取り上げ。すべて桟瓦。
9.21　西半部遺構検出。石組 4 の落ち込んだ石を取り上げ整理。
9.22　西半部の黄褐色泥砂層を掘り下げ、遺構検出。ピットと溝を検出。東半部は掘り残しの実測図追加。
9.26　東半部、黄褐色泥砂層の掘り下げ。
9.27　東半部第 2 層掘り下げ。石製の香炉出土。
9.28　東半部遺構検出。一部ピットの掘り下げを開始。
9.29　台風接近で、現場作業は中止。
9.30　調査区の水抜き作業。ピットの掘り下げ。
10. 1　遺構（ピット・溝）の掘り下げ。清掃開始。
10. 3　第 2 遺構面の清掃。写真撮影。第 2 面実測開始。
10. 4　第 2 面の実測。平面実測中は遺物の洗浄。
10. 5　第 2 面実測完了。遺構検出とピットの掘り下げ。
10. 6　調査区の西側 2m 拡張。
10. 7　南半部第 3 層（整地層）の掘り下げ。拡張部遺構検出とピットの掘り下げ。
10.10　拡張部、溝とピット検出。南半部第 3 層の掘り下げ。柵列と対応するピットは検出できず。
10.11　ピットの掘り下げ。拡張部東部、第 3 層の掘り下げ。16 世紀の土師器皿出土。清掃開始。
10.12　全面清掃。写真撮影。掘り残しピット掘り下げ。平面実測。午後、雨天のため遺物の洗浄。
10.13　第 3 面平面実測。出土遺物の洗浄。
10.14　第 3 面平面実測完了。現場報告書会議。
10.17　断ち割り作業二箇所で実施。整地層精査。東壁断面図作成。断ち割り箇所の写真撮影。
10.18　断面図・立面図の作成。川上所長、京都府文化財保護課石田氏視察。本日で現場作業は終了。
10.19　出土遺物の洗浄。杉山前所長現場視察。
10.20　調査区をブルーシートで覆い養生して、調査を終了。調査器材搬出。引っ越し作業。
10.21　現場事務所の清掃。発掘調査の終了報告。

第2章　遺　　構

検出した遺構には建物、庭園、溝、土壙など多種ある。調査は広範囲にわたっているが、各調査区は小面積で遺構が他の調査区へ広がっている場合があるため、調査区ごとではなく、建物遺構、庭園遺構、その他の遺構を時代ごとに分けて述べることにする。

1　平安時代の遺構

築地1(第2次L区、図4　写真図版3・4)

築地1は寺域の東部、鐘楼の南東部で検出した。当初電線の埋設工事に伴う立会調査で石列を確認したため、発掘調査に切り替え拡張したところ、築地であることが判明した。築地は南北方向で、そして東西方向の築地あるいは建物に接続する部分を検出したことになる。築地の接続する箇所には東西方向の石組の暗渠が設けられていた。築地の基底部分は良好に遺存しており、黄褐色粘質土を幅1.8m、高さ0.6m盛り上げて、その両側に20～30cmの石を並べている。基底部の上は崩壊した築地の壁土が覆っていた。暗渠遺構は築地を横切って溝を設け、石を縦にして並べたのち､やや平たい石で蓋をしている。溝の勾配をみると西から東へ排水しているようである。

建物2(第2次L区、図4　写真図版3)

築地が接続する東西方向の建物である。築地の石列は基壇の化粧石のようにもみえるが、やや崩れており、築地とは直角につながらない。出土遺物は少量で遺構の時期を決めがたいが、層位的関係から平安時代後期に属すると思われる。築地の方向も金閣および建物18～20の方向とは一致しない。

埋納遺構3(第3次W4区、図3　写真図版27)

W4区の西端部で土師器の皿を6枚重ねた状態で出土している。他の共伴遺物は認められない。土壙の堀形は検出できず穴を掘って埋めたものか不明であるが、6枚とも同じ大きさで配置が人為的なため、地鎮に関する埋納遺構と考えられる。土器は10世紀前葉である。

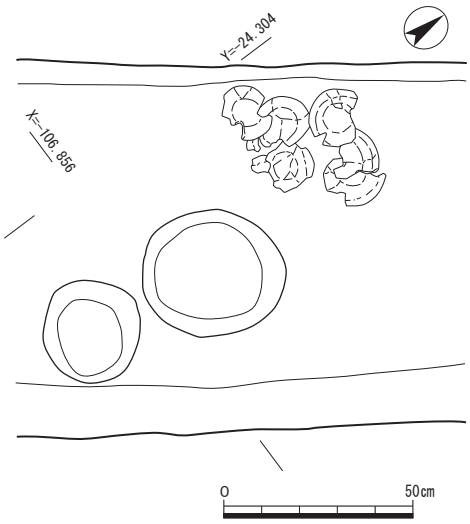


図3　埋納遺構3実測図(1:20)

2　鎌倉時代の遺構

滝組4(安民沢、図6　写真図版20)

安民沢から年代を決定づける遺物資料が出土したわけではないが、中島周辺の池底に平安時代後期から鎌倉時代の丸瓦と平瓦が分布している。また安民沢の北方、現在の杉林内からも平安時代後期から鎌倉時代の瓦が地表面で採集されるため、今回安民沢の滝組と木樋を鎌倉時代の遺構と考えた。そして安民沢およびそ

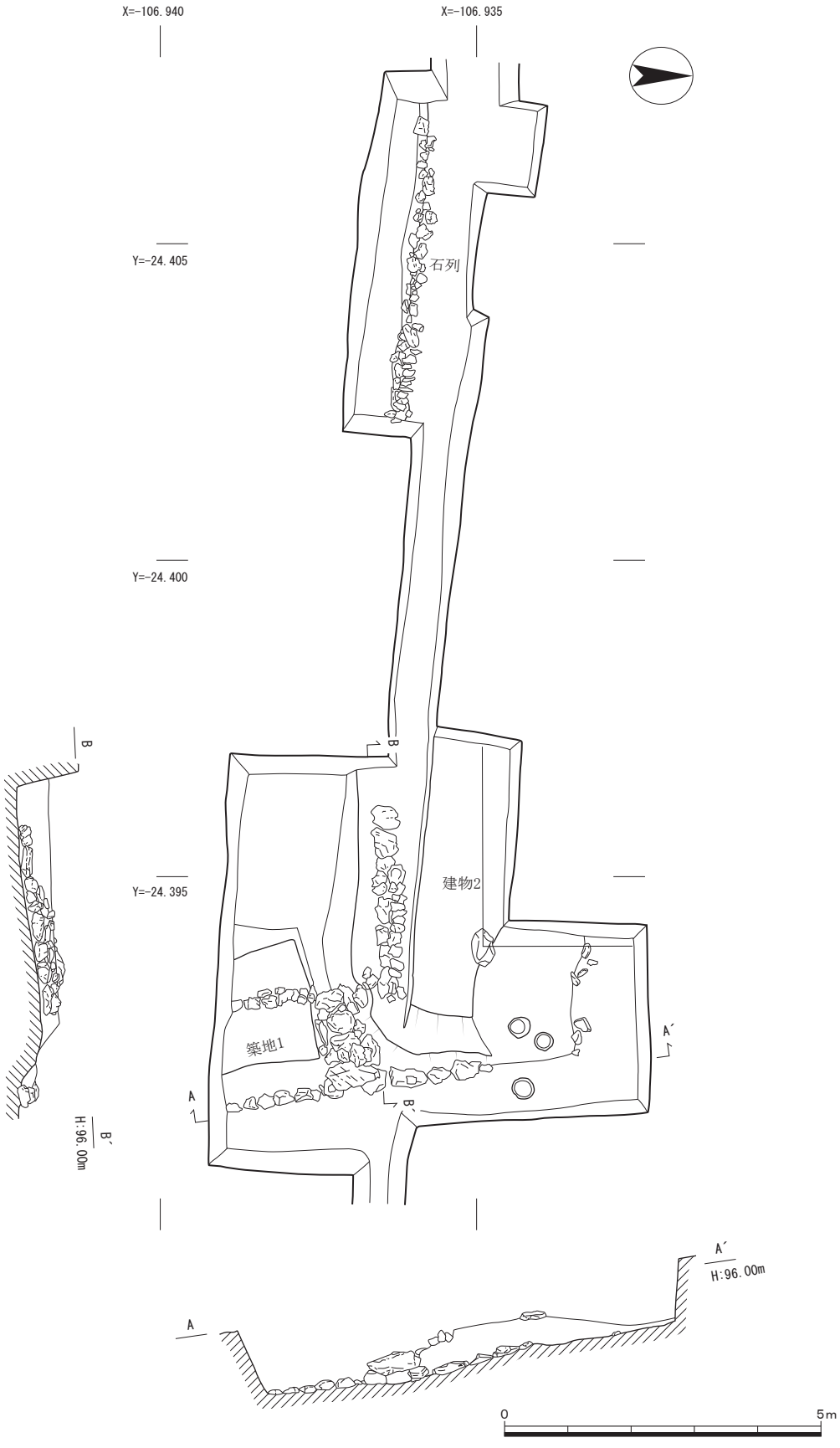


図4　L区遺構実測図(1:100)

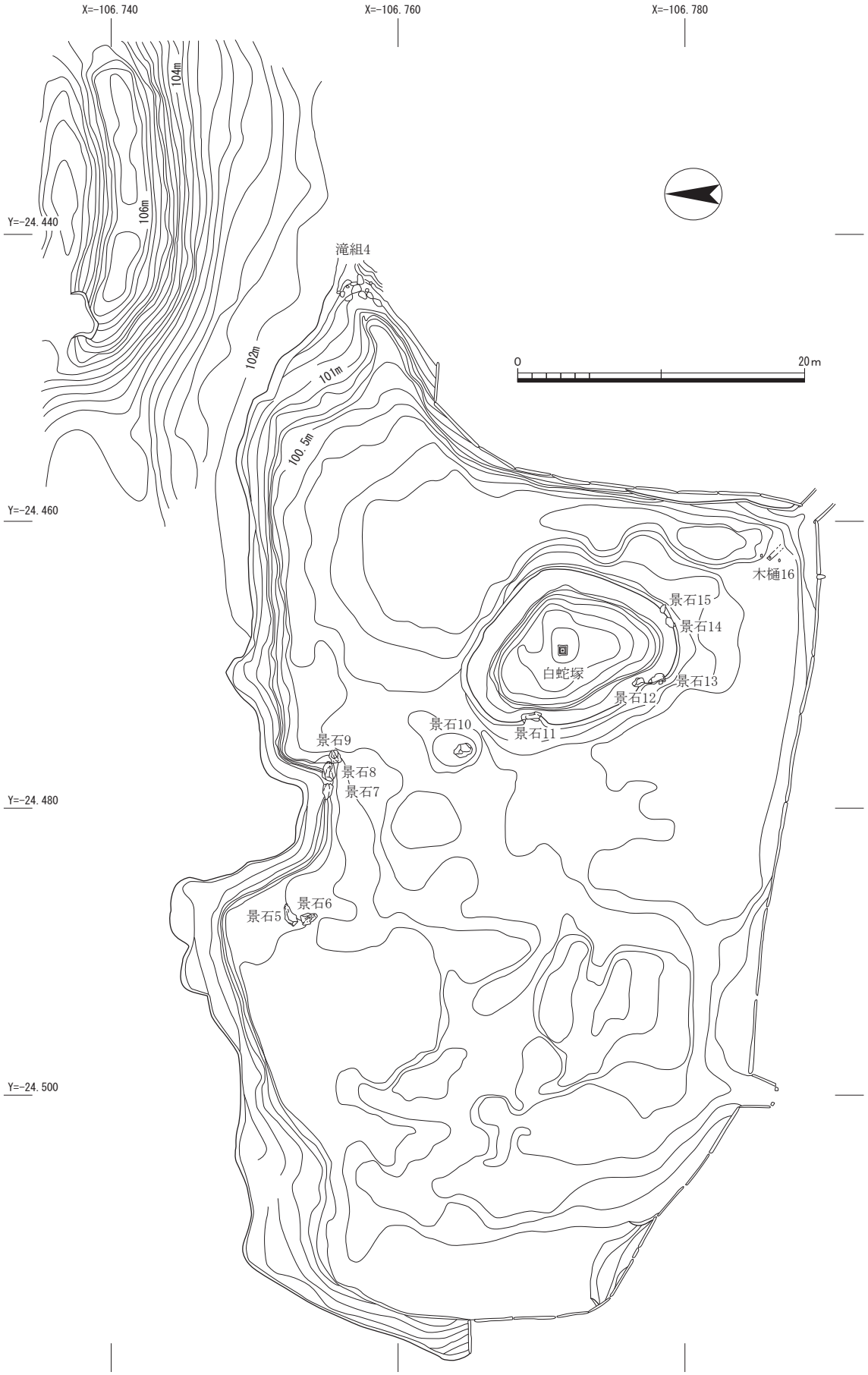


図5　安民沢地形図(1:400)

の周辺に西園寺関係の遺構があると推定される。

安民沢の浚渫工事の際にみつかった遺構で、北東部のもっとも奥まったところに位置し、北東方向から安民沢に流れ込む水路の注ぎ口で小規模な滝組を検出した。長年の土砂の流入と樹木の落ち葉が堆積し、完全に埋もれていた。滝組は上流からの水を流れ落ちとするために階段状に3個を組み、その両側にも石を配する。滝の周囲には拳大から人頭大までの石がみられるため、部分的には壊されているかも知れない。上流の遣水部分には景石や石敷などの施設は認められなかった。滝の幅2.7m、奥行き2.3m、高さ0.7mを測る。石材はいずれもチャートである。この遺構は滝組としたが、その落差は約30cmしかなく、いわゆる瀬落ちである。

景石5～15(安民沢、図5・7　写真図版18・19)

浚渫工事では隠れていた景石も姿を表した。昭和10年に発行された吉永義信氏報告の「金閣寺(鹿苑寺)庭園」(『名勝調査報告』)第二輯　文部省1935年)をみると安民沢の北岸に景石が5個図示されている。池の水が少ない時は現れていたのだろう。今回さらに北岸と島の中間に1個、中島の汀に沿って5個、合計11個みつかった。景石の周囲を断ち割ってはいないので、観察できないところもあるが、基本的には堀形は持たず根石を入れて石を据えている、また石は長軸を横にして用いている。石材はすべて境内周辺で調達できるチャートであるが、風化が進み割れの進んでいるのもある。北岸西側の景石群は、現在のところ汀からやや離れ池内に位置するが、本来は出島がもっと張り出し、景石はその汀に配置されていたと思われる。また池内の景石の周囲にまき石がみられることから、現在は流失しているが汀線は洲浜を形成していた可能性がある。

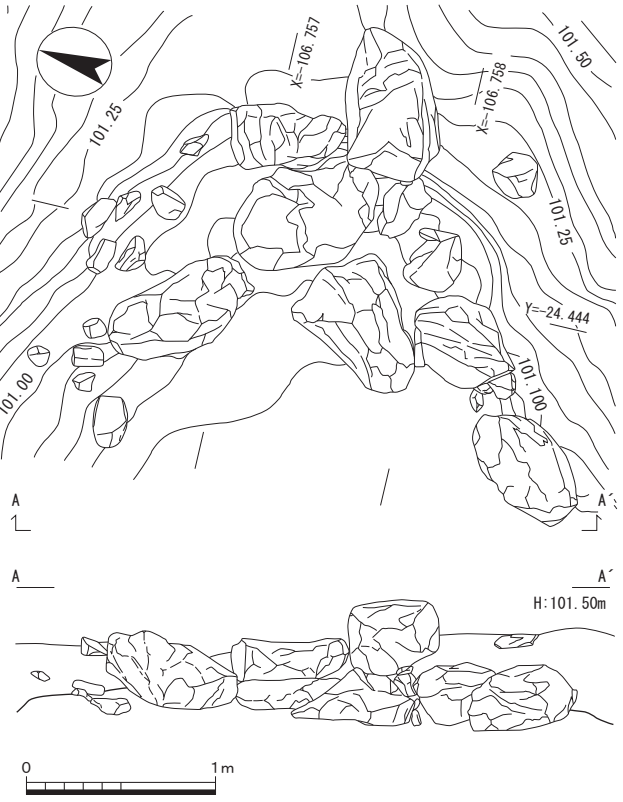


図6　安民沢滝組4実測図(1:40)

木樋16(安民沢、図8　写真図版19)

木樋は逆台形を呈した角材の内部を刳り貫き、板材で蓋をしたもので、鉄釘で打ちつけている。樋の刳り貫きは端部から12cmまでを残し、その部分に上から水が入るように、別の部材を蓋に穴を開け差し込んでいる。樋本体は下辺20cm上辺が26cm高さ15cm、蓋は幅30cm厚さ7cmを測り、長さ1.2mを検出した。さらに南東方向へのび、1本の長さや継ぎ目は不明。木樋の勾配は約3度を測る。水の取り入れ口は不整形な八角形に面取りした材木の中心を刳り貫いて管状にし、樋の蓋に直角に差し込んでいる。取り入れ口の内径は10cm、樋の内部は下辺17cm上辺

20cm 深さ 10cm を測る。両側には木樋の方向から約 60 度傾け、取り入れ口を中心として 60cm ずつ離れたところに 10cm × 25cm の角材を杭（杭 1・2）として打ち込んでいる。おそらく取り入れ口の栓を固定する施設であろう。木樋の周囲には地山層を掘り込んで白色の粘土を詰めていた。木樋の残存状況が良好なのは、この粘土で密閉されていたからとみられる。

石組 17（第 2 次 J 区、図 9 写真図版 14）

建物 18 の東方 20m に位置し、切り通し部分の西斜面で検出した石組みである。切り通しの拡張工事の折、一部の石組みは抜き取られてしまった。石はすべて縦に用い、南西から北東方向へ階段状になるように据えている。天端はいずれも平たく、西

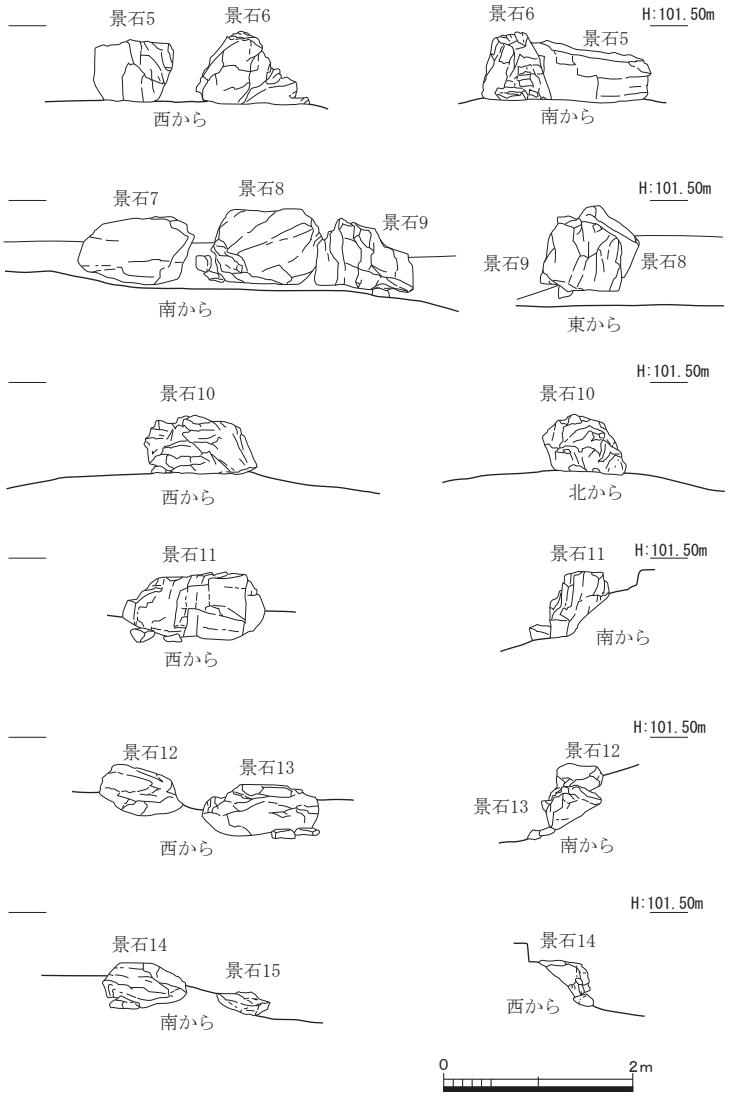


図7　安民沢景石立面図（1:80）

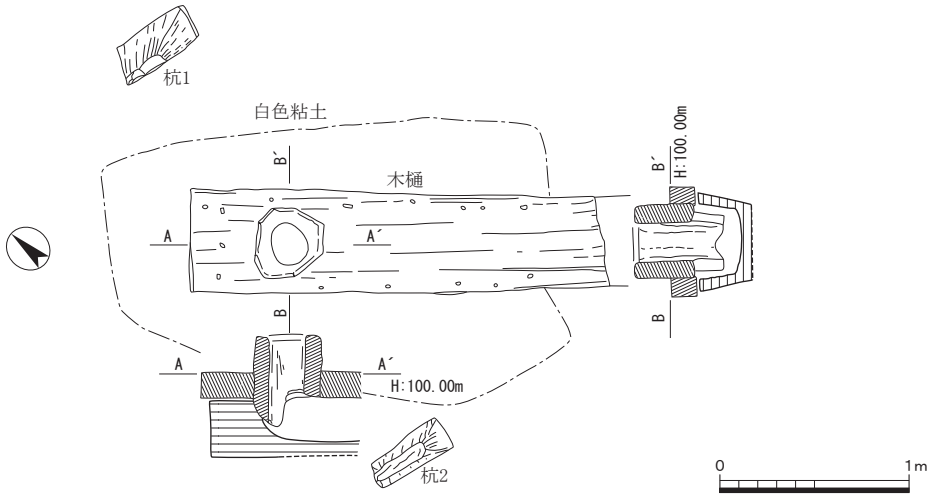


図8　安民沢木樋16実測図（1:40）

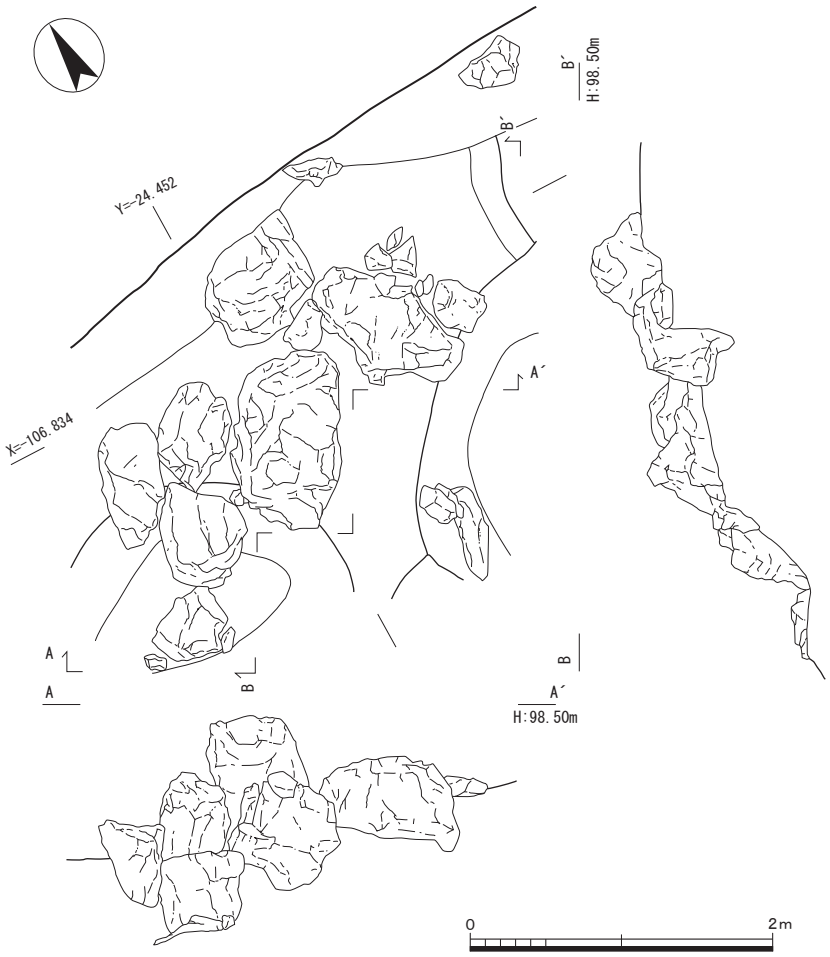


図9　J区石組17実測図(1:50)

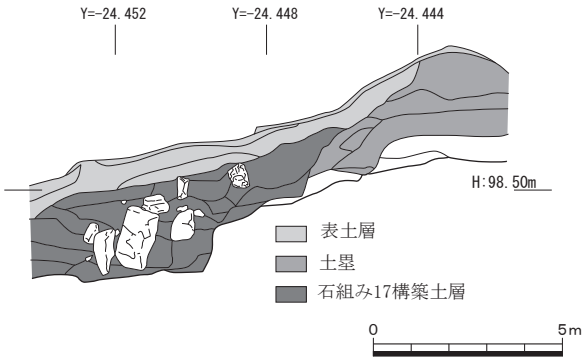


図10　J区北壁断面図(1:200)

からみると滝組のようにみえる。石組 17 の上部の土層は、溝状の遺構が認められ砂が含まれるが、はっきりとした遣水遺構は確認できなかった。さらに北方を調査する必要がある。石組みの石材はチャートが主である。

3　室町時代の遺構

建物 18(第 1 次 B 区、図 11　写真図版 11)

建物は B 区と D 区で 3 棟連続して検出した。建物 18 は 3 棟の中間にある。遺存状態は不良であるが、東西 5 間 (11.7m)、南北 4 間 (9.3m) を復原した。南側の桁行柱列の礎石は南東隅のみ残存していたが、他はすべて抜き取られ、その礎石の据え付け穴を検出した。調査区の北西部では削平を受け、礎石および据え付け穴は削られ、痕跡を残していないため、建物の詳細は明らかではない。建物 18 は建物 20 と廊でつながり、また建物 19 とも接続する。

建物 19（第 1 次 B 区、図 11　写真図版 11）

建物 19 はもっとも奥まった箇所にあり、北側と東側は切り立った崖面に近接している。建物 18 と比べ、礎石は小さく小規模な建物で、東西 3.3m、南北 6.5m の大きさで検出した。さらに建物 19 の周辺にもいくつか礎石がみられ、複雑な構造を持ち、また重複も考えられる。しかし小さな自然石を据えただけで、堀形を持たないため、礎石が抜き取られた痕跡を探すのは困難で、全貌を明らかにはし得なかった。

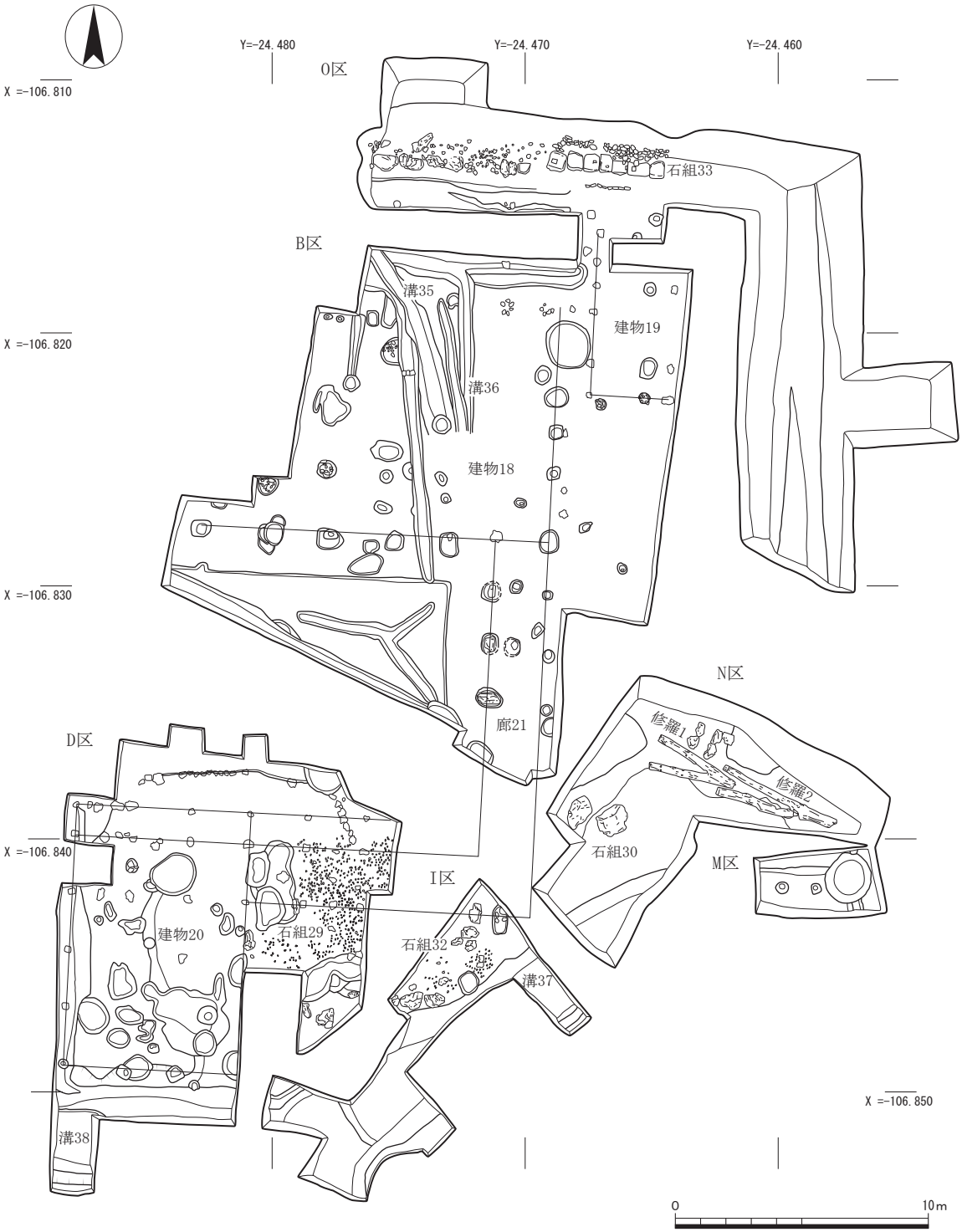


図11　B・D・I・M・N・O区遺構実測図（1:250）

建物 20（第 1 次 D 区、図 11・12　写真図版 1・2）

建物 20 は 3 棟のうちもっとも良好に遺存していた建物である。東西梁行 3 間（6.9m）、南北桁行 4 間（9.2m）を検出し、梁行桁行の柱間寸法は共に 8 尺（2.3m）の等間隔である。北側には幅 1.2m の縁が付く。礎石は花崗岩の切り石や砂岩などの自然石を用いている。建物の内部にも礎石が並び、床を貼った建物である。西側梁行の測柱筋は一段低くなり、礎石はすべて花崗岩の切り石を並べている。入測柱の礎石は自然石である。これは入測柱の礎石が床の下に隠れるため、切り石を使わなかったのであろう。西からみると亀腹状である。花崗岩の礎石は柱のあたる上面を平らにし、正方形に調整したものである。一辺は 30cm を測る。礎石の堀形には根石を用いず、簡略な据え方である。建物 20 の東半部では、白色や黒色の小粒な直径が 5 ～ 10cm 程の玉石が散布しており、この周辺の礎石は測柱の礎石と同様、花崗岩の切り石を用いているため、建物の中に庭園を取り込んだものと考えられる。D 区の東端から I 区にかけて石列が認められる。石列は一部壊されているが、L 字型に建物 20 を取り囲むように並べられている。石材はチャートを用い、

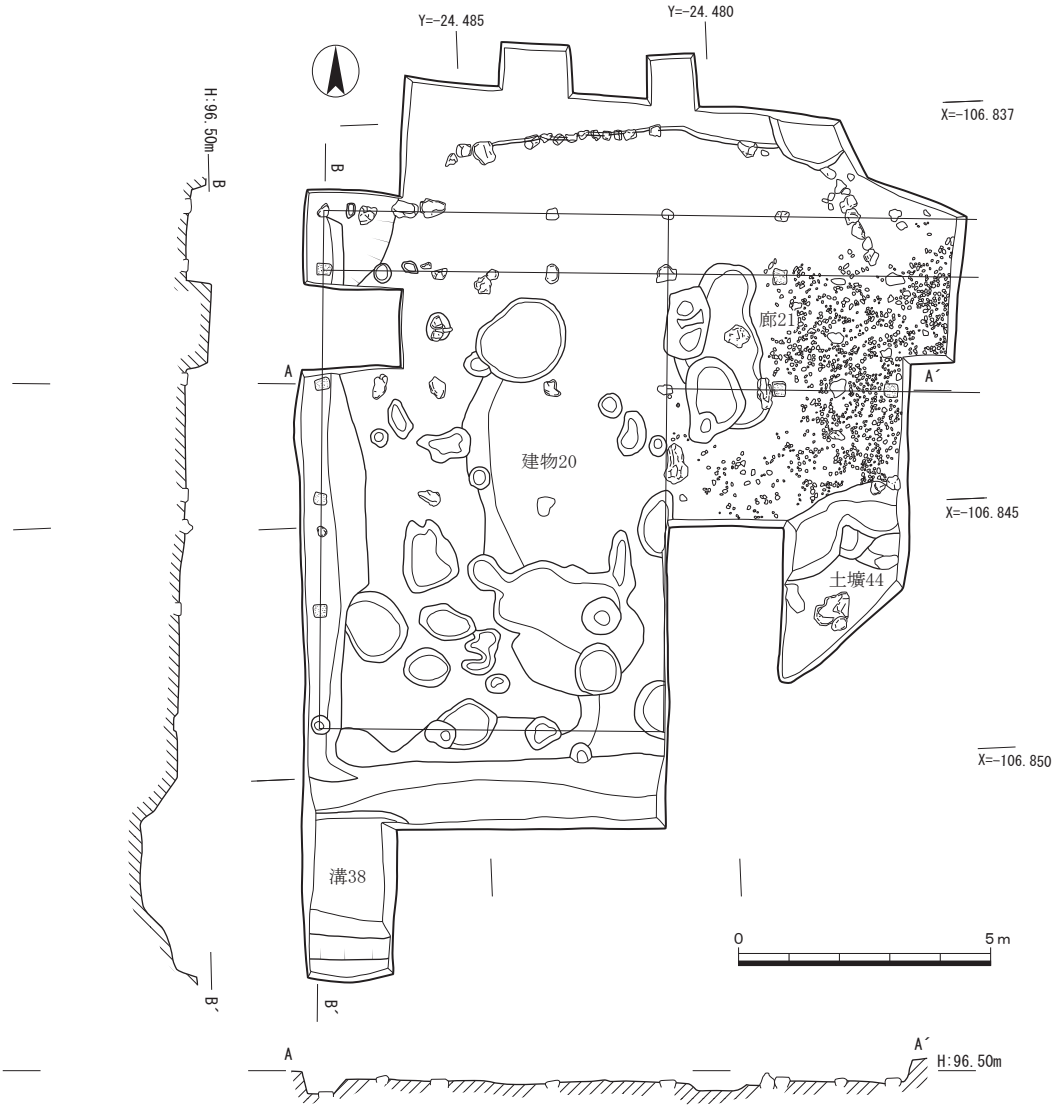


図12　D区遺構実測図（1:150）

景石のような据え方である。建物 20 が覆っている層に焼土と炭が混入しているため、建物 20 は焼失したと考察される。焼土層から出土する土器は二次焼成を受け、16 世紀代に属している。建物 18 から建物 20 の 3 棟の建物は、柱筋の方向が金閣と一致する。

廊 21（第 1 次 A 区第 2 次 D 区 I 区、図 11・12 写真図版 11）

建物 18 と建物 20 をつなぐ廊である。全面を調査できたわけではないため、柱筋で未調査の部分を残しているが、東西 8 尺南北 7 尺で柱間寸法が割り切れるため、廊と考えた。建物 20 の北側 1 間目から東へ 5 間で北へ折れ曲がり、6 間で建物 18 の東南隅につながる。東西方向の廊は梁行桁行とも 2.3m で東端の桁行が 2.1m、南北方向の廊は梁行桁行とも 2.1m である。東西方向は建物 20 と同様北側に幅 1.2m の縁が付く。南北方向廊の西側柱筋の礎

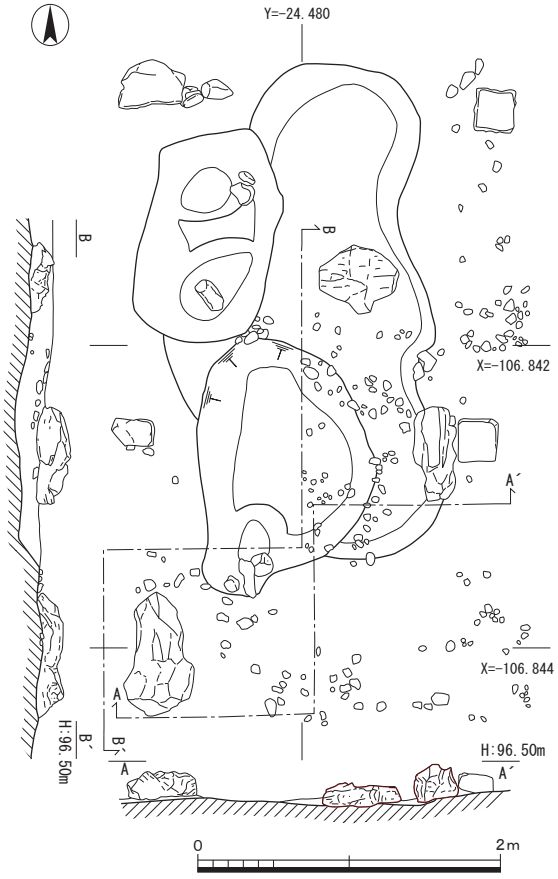


図13　D区石組29実測図(1:50)

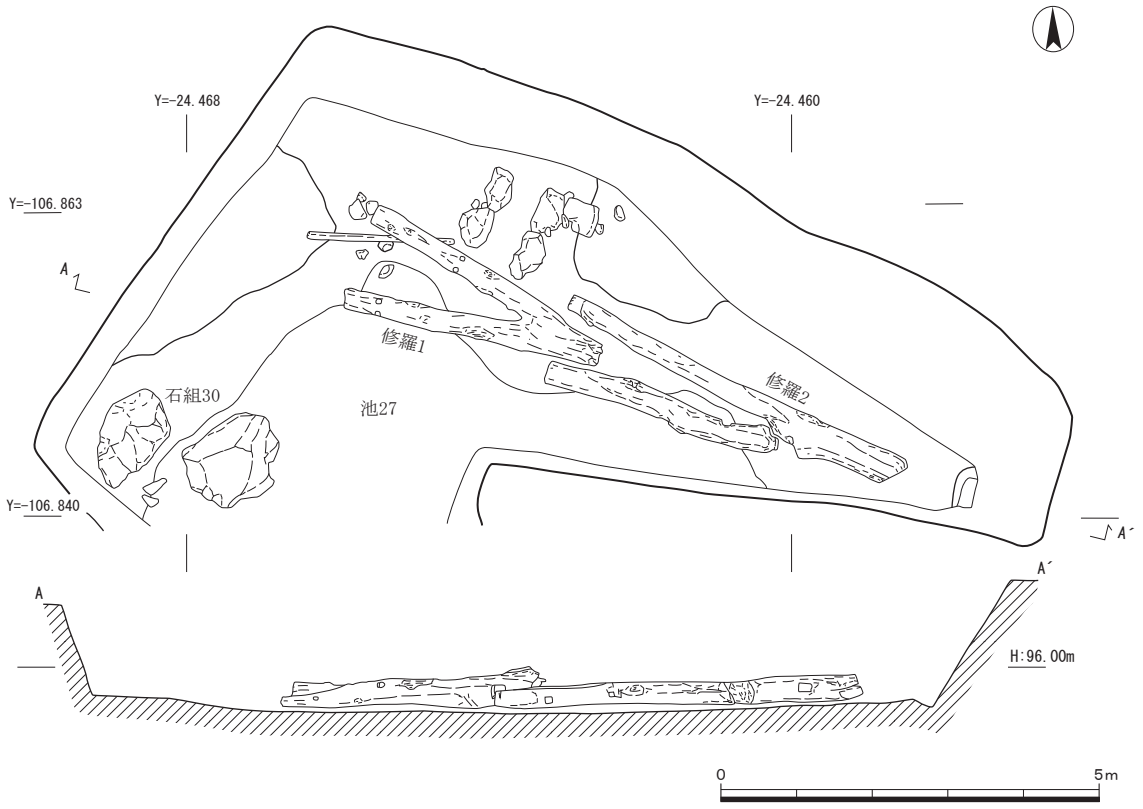


図14　N区遺構実測図(1:100)

石はさらにその下に石を敷き､根石のように用いている。石材は礎石・根石ともチャートである。

建物 22(第 2 次 S 区、図 22　写真図版 24)

建物 22 は鏡湖池東側の園路内の調査地 S 区で検出した。花崗岩の礎石を 1 個みつけたが、幅の狭いトレンチのため、これに対応する礎石を確認することができず、建物の規模などの様相はまったく不明である。しかし礎石の周辺は固く叩き締めたような面をなしているため、土間にあたるかもしれない。礎石は建物 20 と同様に面取りを施した花崗岩の切り石で、柱の面取りに合わせたものであろう。上部は丁寧に調整し、方形の隅を落として面取りし八角形に造り出したもので、下部は未調整。大きさは一辺 30cm を測る。

建物 23(第 3 次 W4 区、図 23　写真図版 27)

W4 区は団体バス駐車場からのびる参道内に設けた幅 1m の狭い調査区である。礎石を 2 個検出した。トレンチの幅が狭く、また礎石と礎石の間を下水管が通っており、撹乱を受け、建物の規模や性格を明らかにするには至らなかった。

図15　0区石列33実測図(1:100)

建物 24(第 5 次 Y 区、図 20 写真図版 17)

柱穴列はピットの底部に石を敷いたもので、柱が沈まないようにしたものがあるため、建物の柱穴と考えた。東西に 9 間並び西へさらにのびる。南北方向に 3 間検出し､さらに北へのびる。いずれもほぼ 120cm 等間隔で、底部に根石を持つピットがある。Y 区ではそのほか多数のピットがみられたが建物としてまとまらない。

柵列 25・26(第 5 次 Y 区、図 20 写真図版 17)

柵列 25 は南北方向で 6 間検出した。柱間は 1.2m 間隔である。柵列 26 は東西方向に検出したが、間隔に規則性がない。

池 27(第 2 次 N 区､図 14　写真図版 5)

N 区で検出した池状の遺構である。西と北肩部を検出したが、東と南は調査区外にのびるため、規模は不明であ

る。しかし周囲の調査区地形から推定すると、東西は 12 ～ 15m 程度と思われる。石組 30 付近で西へゆるく立ち上がり肩部となる。洲浜などの施設は認められない。北側には直径 50cm の石を 5 個用いて石組溝を造っており、水の取り入れ口と思われる。池からは修羅が 2 基出土した。堆積状況は黒褐色腐植土層が厚さ 40cm ほどあり、腐植土層には土師器と木製品や植物遺体が多量に含まれ、修羅を覆っていた。修羅は東を頭にして東西方向に 2 基並べられていた。修羅の頭部が次の脚部の間にぴったり収まるように配置していることから、単に投げ込んだのではなく、水中に保管していたと思われる。また修羅は石組溝に接しており、水の取り入れ口に置いたものと推定される。

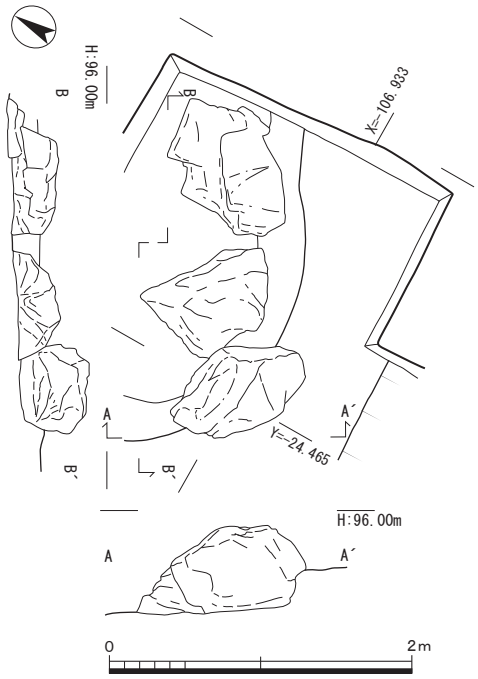


図16　S区石組31実測図(1:50)

池 28(第 3 次 W4 区、図 23　写真図版 26)

W4 区の東半で検出した池状の遺構であるが、送水管埋設に伴う調査のため幅の狭いトレンチで、遺構の規模や範囲を確かめることができなかった。調査区内では幅 9.5m、深さ 0.5m で落込である。東肩部にはチャートの景石らしき石が張り付くように据わっているが、洲浜もしくは護岸の施設は認められなかった。埋土からは多量の瓦が出土し、池を瓦で埋めたような状態である。これまで出土している瓦は甍棟用と考えられる小型瓦ばかりであったが、これらは普通サイズのもので調査区付近に瓦葺きの建物が存在していた可

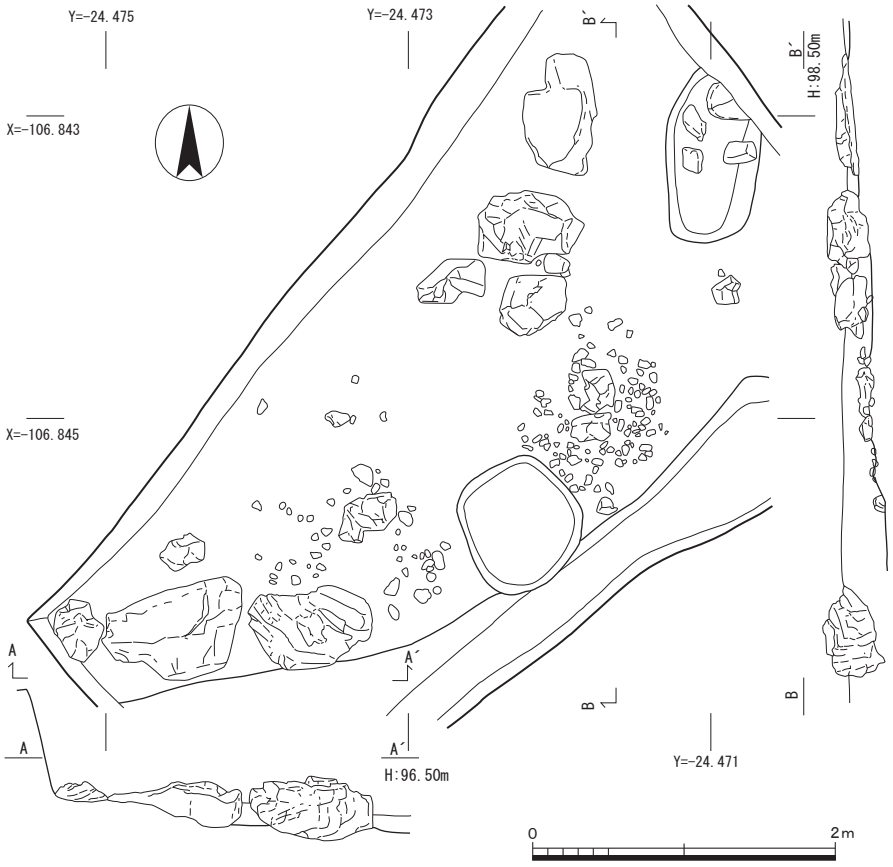


図17　I区石組32実測図(1:50)

能性を示唆している。

石組 29（第 1 次 D 区、図 13 写真図版 2）

建物 20 の東半部で確認した石組遺構である。小振りなチャートの景石を 3 個検出した。また景石周辺には径 3cm ほどの黒色と白色の小石がびっしりとまかれている。建物 20 の礎石と景石が接しており、礎石とまき石は同一面で検出したため、建物内に庭園を取り込んだ建物とみられる。景石に近接して 2 基の土壙がみられるが、これは後の時代にじゃまになる景石を抜き取ったものと思われる。

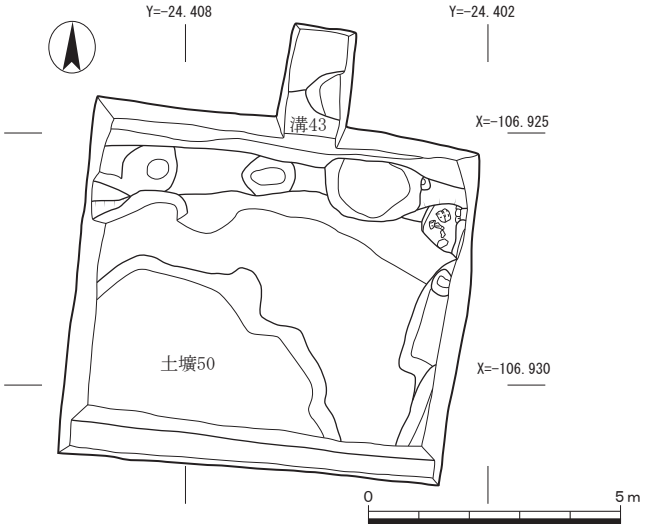


図18　X区遺構実測図(1:150)

石組30（第2次N区、図14　写真図版7）

N 区の修羅の西側でみつかった景石である。浅い池状遺構の西肩口に堀形も設けずに東西に 2 個据えている。石材はいずれもチャートである。

石組 31（第 2 次 S 区、図 16　写真図版 16）

鏡湖池の東側園路にある調査区の中で、もっとも南の S 区で検出した。景石は 3 個、東西に据えられている。景石には根石を設けず、石の周囲には空隙がみられ、据え付け方が簡略である。石材は 3 個ともチャートである。景石の頭が一部園路に顔を出し、表面が摩滅するほど浅い位置で検出した。景石が土に埋もれたまま、その上に現在の園路が設けられている。また S 区から東の庭園へのびる電線埋設区の V 区において、チャートの景石を 1 個検出した。石組 31 から東へ 7m しか離れておらず、一連の石組みの可能性がある。

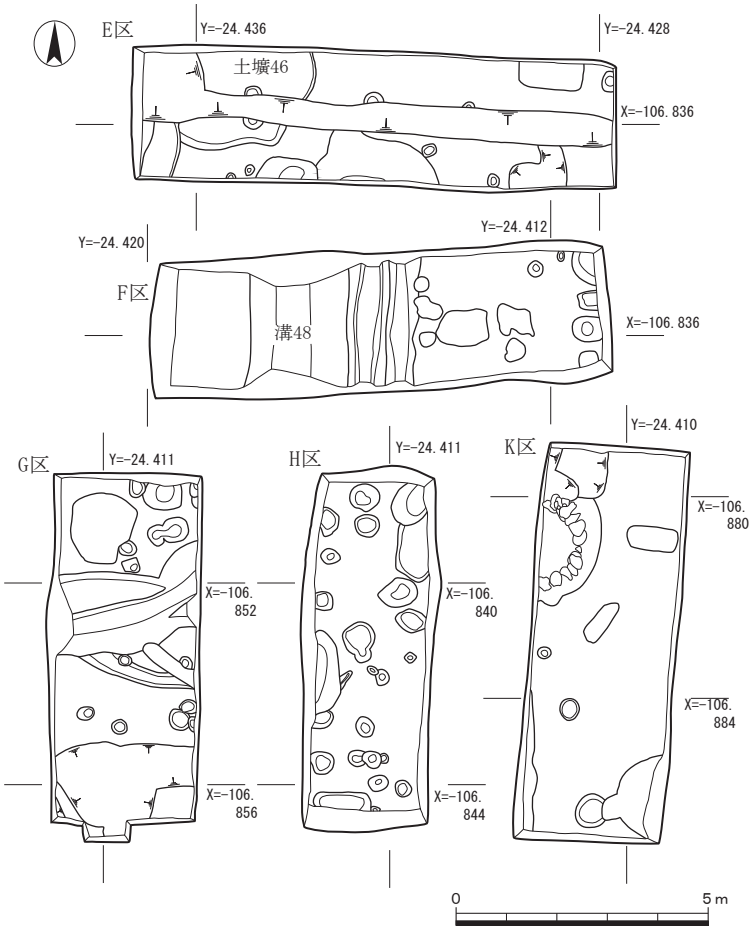


図19　E・F・G・H・K区遺構実測図(1:150)

石組 32（第 2 次 I 区、図 17　写真図版 13）

建物 20 の東側、廊 21 の南側で検出した。石材はすべてチャートを寝かせるように配している。抜き取られたり、割られたりした景石もある。また石組 32 から石組 29 にかけては丸く磨滅した河原石を巻いている。

石列 33（第 2 次 0 区、図 15　写真図版 8・9・23）

貯水槽とポンプ室の設計変更によって、B 区の北側斜面と東側斜面に 0 区を設けたところ、斜面の裾部に沿って東西方向の石列が 1 条みつかった。東半部に花崗岩の切り石を 8 個並べ、その西にチャートの自然石を並べている。チャートはところどころ抜き取られている。花崗岩列と自然石列の面にはくいちがいが認められ、自然石列の方が少し前へ出る。自然石列の裏込めには杭を打ち、板をあてて、拳大の石をぎっしりと詰めている。花崗岩は正方形（一辺 60cm）や長方形（短辺 60cm 長辺 90cm）があり、ホゾ穴を穿った石もある。ホゾ穴の位置や大きさは不揃いである。石列の東側は花崗岩屑の混じった礫で埋まっており、石列が抜き取られたことが考えられる。石列の前面には溝が掘られている。調査中にも石列の裏からの湧水は激しく、溝はこの湧水の排水溝と考えられる。石列が抜き取られている箇所は、調査中降雨によって調査区北東部の崖面が崩壊し、危険な状態になったため、石列の東側は埋め戻した。このように不安定な崖面であることから、石列は土留めのために設けられていたことが考えられる。

溝 34（第 1 次 A 区、図 21　写真図版 10）

A 区中央部の、地山面が西へ傾斜している箇所で検出した南北方向の溝である。幅 1.9m、深さ 0.5m を測る。肩部には礫が敷かれている。この溝を北へ延長すると現在の龍門瀑と呼ばれる滝があるため、溝 34 は鏡湖池に水を取り入れる導水路の可能性がある。

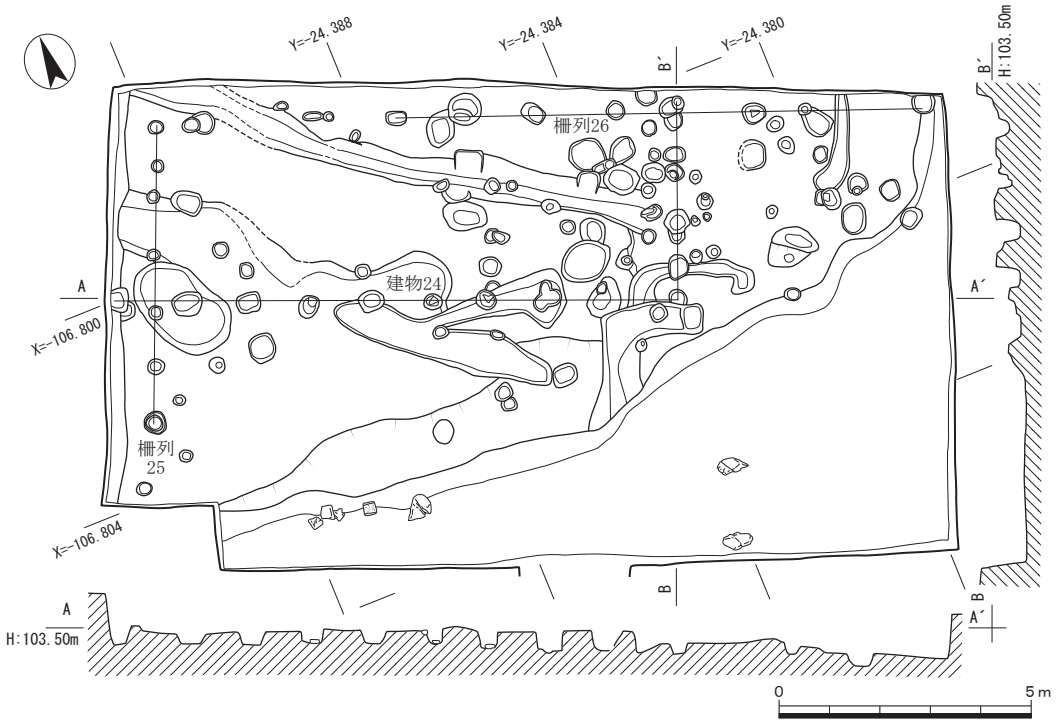
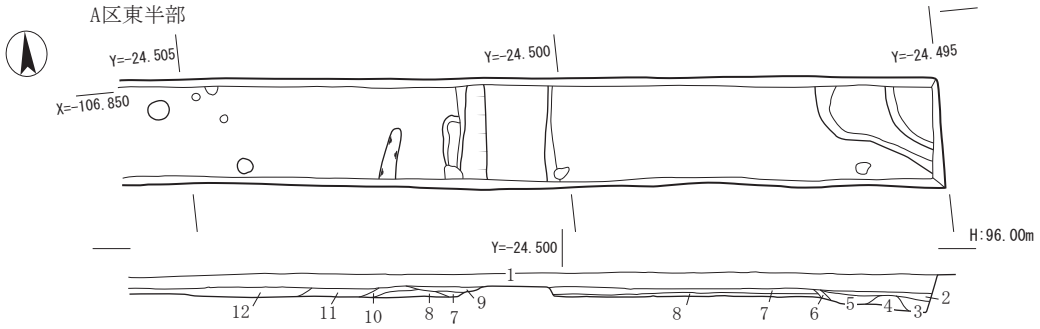
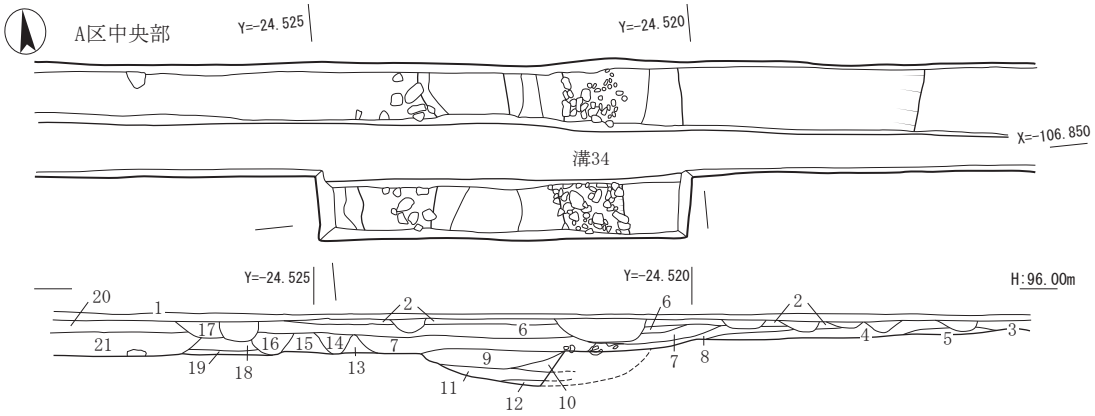


図20　Y区遺構実測図（1:150）



1　砂利層
2　黄褐色泥土層〔2.5Y5/4〕
3　黄褐色泥層〔10YR5/8〕
4　にぶい黄褐色泥砂層〔10YR5/4〕
5　明黄褐色泥土層〔10YR6/6〕
6　黄褐色砂泥層〔10Y5/6〕
7　褐色砂泥層〔10YR4/6〕
8　褐色泥砂層〔10YR4/6〕
9　オリーブ褐色泥砂層〔2.5YR4/4〕
10　黄褐色泥砂層〔2.5YR5/6〕
11　明黄褐色泥砂層〔2.5YR6/6〕
12　黄褐色砂礫層〔10YR5/8〕



1　砂利層
2　褐色砂泥層〔10YR4/6〕
3　明褐色砂礫層〔7.5YR5/8〕
4　明褐色泥砂層〔10YR6/8〕
5　黄褐色泥土層〔10YR5/8〕
6　黄褐色泥砂層〔10Y5/6〕
7　明褐色泥砂層〔10YR6/6〕
8　褐色泥砂層〔5YR4/6〕
9　にぶい黄橙色砂泥層〔10YR6/3〕
10　黄褐色泥砂層〔10YR5/6〕
11　にぶい黄褐色泥砂層〔10YR5/3〕
12　灰褐色腐植土層〔7.5YR5/2〕
13　黄褐色粗砂層〔10YR5/8〕
14　黄褐色泥砂層〔10YR5/8〕
15　明黄褐色泥砂層〔2.5YR5/6〕
16　黄褐色泥砂層〔10YR5/6〕
17　明黄褐色砂泥層〔10YR6/6〕
18　褐色砂泥層〔10YR4/6〕
19　にぶい黄色泥砂層〔2.5YR6/3〕
20　黄褐色砂泥層〔10YR5/8〕
21　黄褐色細砂層〔10YR5/6〕

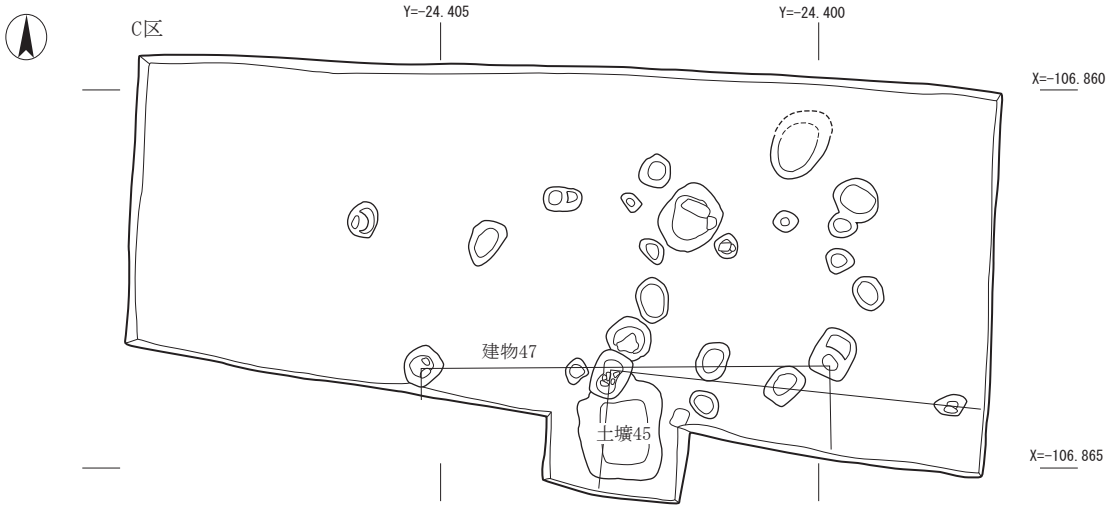


図21　A・C区遺構実測図(1:100)

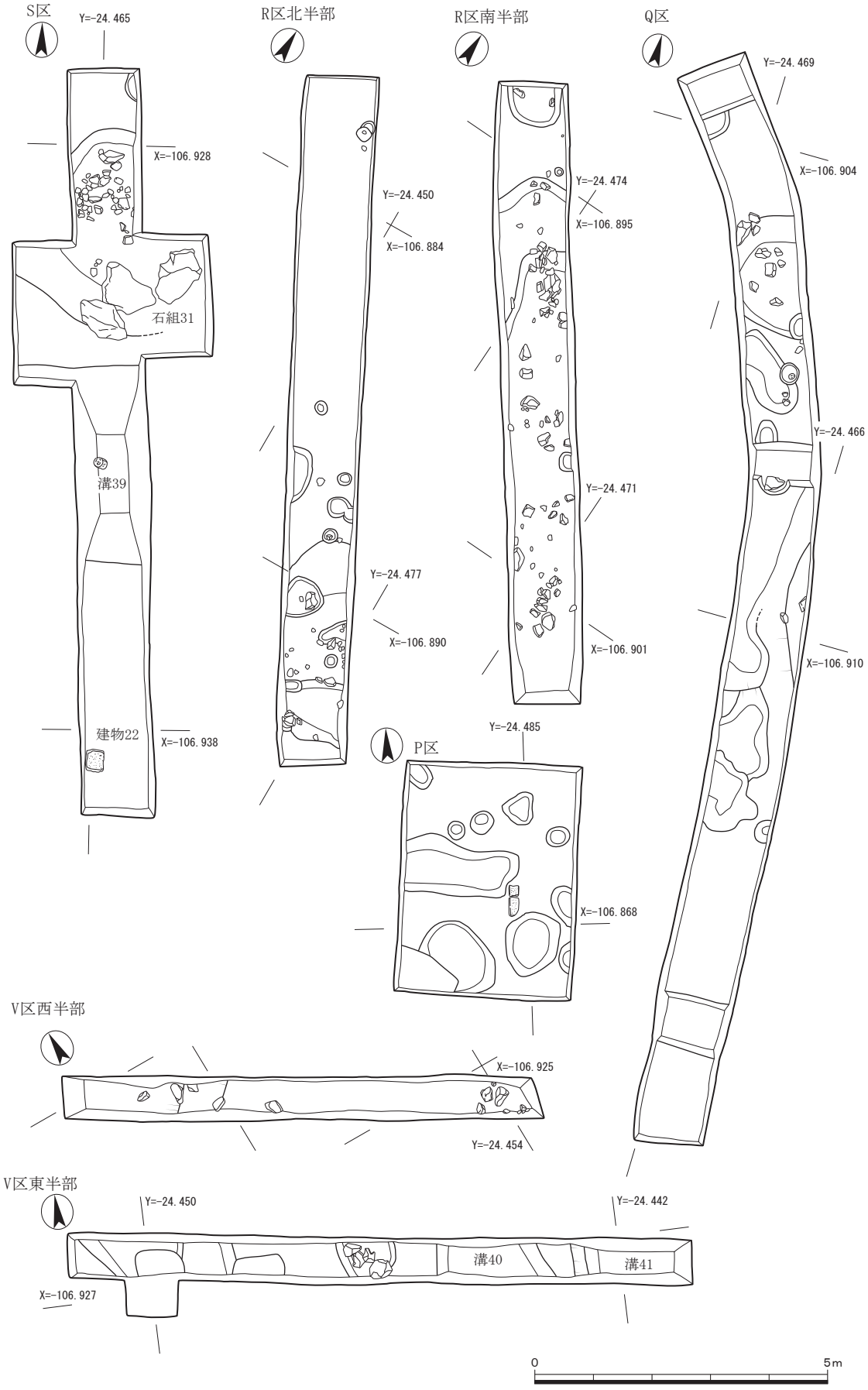


図22　P・Q・R・S・V区遺構実測図(1:100)

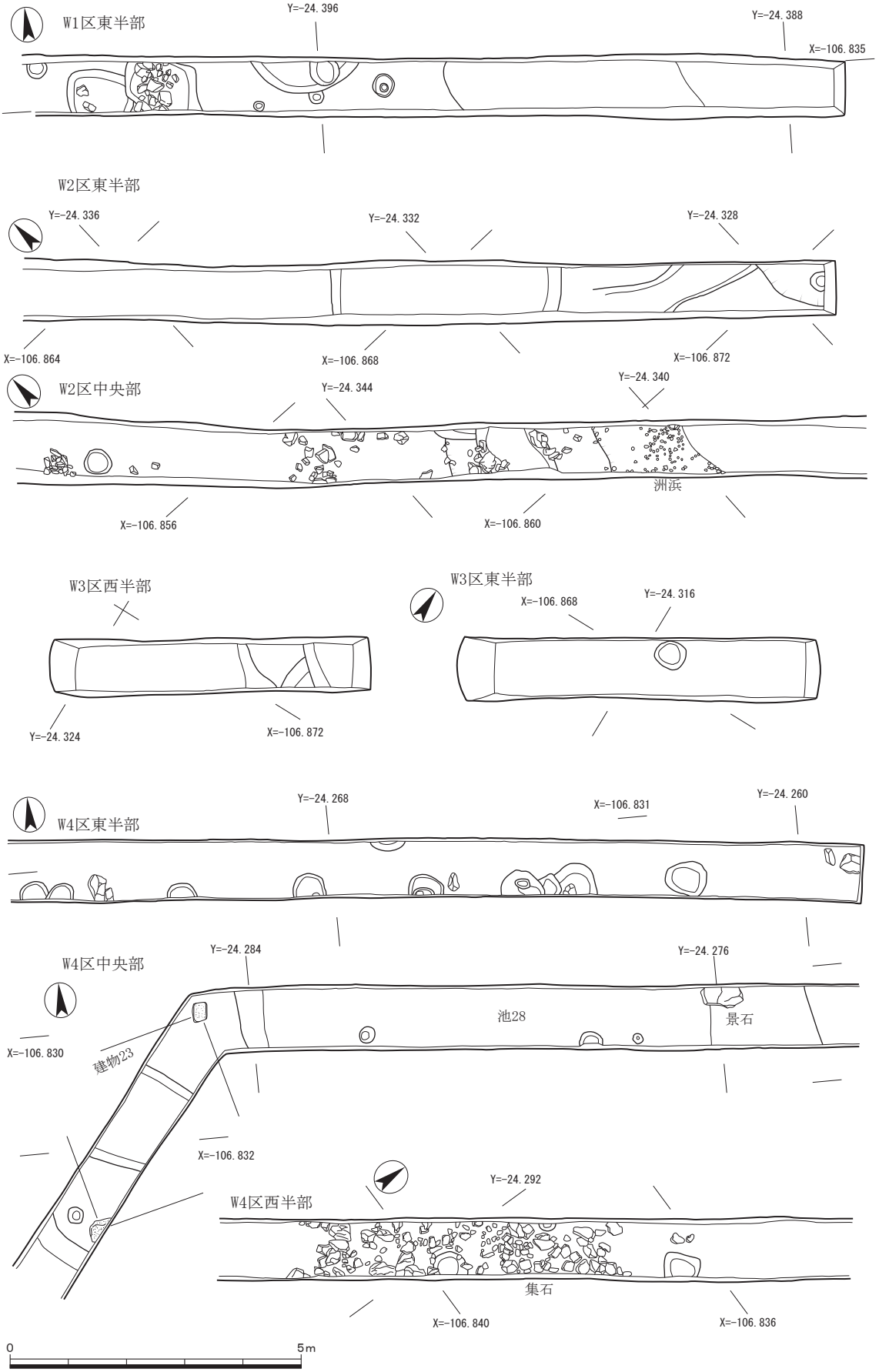


図23　W区遺構実測図(1:100)

溝 35・36（第 1 次 B 区、図 11　写真図版 11）

B 区では重複して数本の溝を検出した。いずれも北から南へ流れ、B 区北側の崖面からの湧水を排水するための溝と思われる。溝 35・36 は建物 18 より遡る時代の溝であるが、建物 18 を保存する目的で建物の下は未調査である。

溝 37（第 2 次 I・N・M・R 区、図 11　写真図版 13）

I 区は現地形の水路に調査区を設定したが、水路と重なるように溝 37 が検出された。M 区から N 区・I 区・R 区まで続き、鏡湖池に接続する溝である。N 区では修羅の出土した腐植土層を切って新しく掘られているため、修羅や供伴した土器・木製品より新しいことが判る。規模は幅約 4m、深さ 0.5m を測る。

溝 38（第 2 次 A・T・D・I 区、図 11　写真図版 1）

溝 37 と接続する溝で、東西方向にのびる。幅 3.5m、深さ 0.7m を測る。

溝 39（第 2 次 S 区、図 22　写真図版 24）

園路内に設けた幅の狭い調査区を東西に横切るように検出した。溝の底には直径 20cm の杭が打ち込まれ、溝をわたる橋が架けられていたのかもしれない。花崗岩の礎石を検出した調査区の南半では、叩き締めたような固い面が 2 層あったが、溝 39 はその上層から掘り込んで成立している。幅 3.2m、深さ 1.3m の規模である。

溝 40・41（第 2 次 V 区、図 22　写真図版 24）

V 区の東端で 2 本の南北溝を検出した。V 区も S 区と同様、幅の狭いトレンチのための遺構の広がりは推定するしかないが、溝 39 と溝 40・41 は接続する堀状の遺構の可能性がある。

溝 42（第 2 次 O 区、図 15　写真図版 23）

石列 33 の前面に設けられた東西溝である。東半部の花崗岩列の前面はさらに一段深く、南側肩部には丸瓦を土管のように並べた施設がみられた。幅 0.5 ～ 1.0m、深さ 0.2m で、東側の深い部分は幅 0.4m、深さ 0.1m を測る。

溝 43（第 4 次 X 区、図 18　写真図版 28）

X 区の北端で南肩部だけ検出して、後に一部分拡張して溝の幅と深さを確認した。南側の肩部は土壙や落込によって削平されているが、北側は地表面から 0.6m の深さで検出できる。その結果、幅 1.5m、深さ 1.0m を測り、断面が V 字型を呈することが判った。S 区・V 区でみつかった溝 39 ～ 41 など境内南部では、堀状の遺構が検出され、時期的にも一致し、これらの溝は境内をとりまく堀、あるいは区画の堀と類推できる。

土壙 44（第 1 次 D 区、図 12　写真図版 2）

建物 20 の東部で検出した土壙で、景石とも近接している。二箇所がやや深く、土壙の埋土からは景石周辺のまき石が混入していた。このことから土壙は景石を抜き取った痕跡と考えた。北山殿の解体時に建物や景石が破壊された記録があり、この頃抜き取ったことが考えられる。

土壙 45（第 1 次 C 区　図 21）

C 区の中央部南端で検出したが、全体の大きさが不明なため南に拡張した。南北 1.3m、東西 1.1m、

深さ 0.4m を測る長方形の土壙で、埋土からは瓦が出土した。C 区では堀立柱建物の柱穴が検出されたが、周辺の建物に葺かれていた瓦を廃棄したものと考える。

土壙 46（第 1 次 E 区、図 19　写真図版 12）

E 区ではすでに消防用送水管や水道管が、中央部を東西に横切るように埋設され撹乱されていたが、両側に残った部分で検出した。埋土には多くの焼土や炭が混入している。大きさは一辺 3m、深さ 0.3m を測る。

建物 47（第 1 次調査 C 区　図 21）

C 区の南端で検出した堀立柱建物である。東西方向に 3 間検出したが大半が調査区外にのびる。建物の規模や棟の方向は不明で、柱間寸法は西から 2.1m、1.8m、1.5m と不揃いである。柱穴から室町時代の土器の小片が出土している。

4　江戸時代の遺構

溝 48（第 1 次 F 区、図 19　写真図版 12）

南北方向に走る溝で、地山層の黄褐色泥土（混礫）を切り込んで掘られ、幅 2.4m、深さ 1.2m を測る。埋土からは江戸時代後期の国産陶磁器が出土している。F 区の西側には現在の水路が流れているが、溝 47 は江戸時代に設けられた水路と思われる。断面観察では現水路と溝 47 との間、5m 程に土塁状の盛り上がりがみられ、築地塀の施設が考えられる。

溝 49（第 5 次 Y 区　写真図版 17）

溝は瓦を立てて護岸したものである。溝 2 は幅 20 ～ 30cm 深さ 20cm を測り、調査区を南北に縦断している。溝の底部には砂質土が堆積し、水の流れた痕跡が認められるため、排水溝と思われる。護岸の瓦は、北半部に本瓦葺き用の平瓦、南半部には桟瓦を用いている。

土壙 50（第 4 次 X 区、図 18　写真図版 28）

X 区はこれまで鐘楼が建っていた場所であるが、その真下から土壙を検出した。東西が約 7.5m、南北は 5m 以上、深さ 0.8m を測る。土壙の堆積をみると、桟瓦と黄褐色泥土層が互層に堆積し、また北西から南東へ傾斜し、北西から投棄されたことが明らかである。桟瓦の他に陶磁器類も多量に含まれ、ゴミを廃棄する土壙であったことが判る。

第3章　遺　　物

遺物は各調査区から出土し、平安時代前期以降、各時代の遺物がある。第1次（1988年度）の出土遺物は整理箱で43箱、第2次（1989年度）155箱、第3次（1990年度）53箱で、第4次調査（1992年度）15箱、第5次調査（1994年度）33箱、安民沢の調査（1993年度）1箱、計300箱を数える。遺物の大部分を瓦類が占め、土器類と木製品類などがある。

1　瓦類

瓦には軒丸瓦、軒平瓦、獅子口、鬼瓦、丸瓦、平瓦がある。当遺跡では瓦葺き用の普通サイズの瓦と、桧皮葺きやコケラ葺きの大棟（甍棟）に用いる小型瓦がみられるが、大小に関係なく軒丸瓦、軒平瓦として一括している。型式番号は軒丸瓦を100番台、軒平瓦を200番台で表す。

(1) 軒丸瓦（図24～26　写真図版29～31）

軒丸瓦は14型式23種86点を数える。瓦当の主文様には蓮華文、宝相華文、巴文がみられ、平安時代前期・中期・後期、鎌倉時代、室町時代の各時代の瓦がある。

単弁蓮華文軒丸瓦（101）　単弁は細い棒状の子葉に輪郭線が巡り、中房の界線に接する。他の同笵例では16弁である。中房・弁区とも平坦。外区には太目の界線と小粒な珠文が突出し配される。珠文は各弁の位置に対応する。瓦当外周はナデ調整。瓦当の接合粘土が多く、分厚い。瓦当裏面から丸瓦凹面にかけて指ナデ跡が明瞭。胎土には微砂粒（長石）を含み、焼成良好、黄褐色を呈する。平安宮で出土例がみられ、大阪府吹田市岸部瓦窯の製品とされている。L区西トレンチ第3層から出土した。

複弁蓮華文軒丸瓦（102）　瓦当笵が浅く、離れ砂を使用しているため、文様が不鮮明である。弁と間弁の区別が不明瞭。外区に界線と珠文を巡らす。瓦当外周はヘラケズリで整形し、外縁まで削り取っている。胎土には混入物が少なく緻密、焼成良好で淡灰色を呈する。京都市森ヶ東瓦窯の製品である。Q区第1層から出土した。

単弁4弁蓮華文軒丸瓦（103）　単弁は凸線円形に表す。中房は不明。外区は一段高く、密に珠文が配される。外周下半部の断面は丸みがあり、オサエとナデの調整。砂粒（石英・長石）を含み、焼成は軟質、灰黄褐色を呈する。鳥羽離宮跡田中殿で同笵と思われる軒丸瓦が出土している。I区溝37南半下層から出土した。

宝相華文軒丸瓦（104A）　抽象化された宝相華文。弁は銀杏の葉状に、間弁は楕円形で表す。界線は弁に対応して湾曲する。外区には珠文を密に配する。丸瓦凸面は縦方向に縄タタキ痕が残る。胎土は長石を含み、焼成軟質、淡黄褐色を呈する。L区第2層から出土した。

宝相華文軒丸瓦（104B）　　宝相華の花を外から内に向けて、横向きに4個表現している。外区には珠文を配置。胎土は細かい黒色粒（チャート）を疎らに含み、焼成やや軟質、色調は黒灰色を呈する。O区褐色砂泥層から出土した。

複弁蓮華文軒丸瓦（105A）　中房は一段と高く突出する。弁は凸線で表し、子葉は丸く表現。外区には大粒の珠文とその外側に界線を巡らす。珠文は弁に接する。胎土は粗く小石が疎らに混入、焼成軟質、淡灰色。臨川寺境内から同文の出土がある。O区東トレンチから出土した。

複弁蓮華文軒丸瓦（105B）　105Aと同文でやや小振り、中房に「米」で表す。胎土は粗く長石混入、焼成はやや軟質で、淡灰色を呈する。X区第2層から出土した。

複弁蓮華文軒丸瓦（106）　中房と弁区は105Aと同じように表すが、外区には珠文がなく、界線のみである。胎土は粗く、石英・長石を多く混入。焼成軟質で、淡黄褐色。Q区第1層、O区褐色砂泥層から1点ずつ出土した。

巴文軒丸瓦（107A）　右巻きの三巴文で、巴の頭部の先端は尖り、尾は隣と接し界線状となる。外区は珠文の内と外に界線が巡る、珠文は密に配する。瓦当裏面と外周はナデ調整、裏面にヘラで縦方向に沈線を付ける。胎土は疎らに石英・砂を含む。焼成は軟質であまく、炭素吸着。B区第2層から出土した。

巴文軒丸瓦（107B）　左巻き三巴文の巴の断面は高く盛り上がり、珠文帯の内と外に細い界線が巡る。珠文は密に配する。瓦当外周・裏面を軽くケズる。胎土は少量の砂粒を混入し、焼成やや軟質、暗灰色を呈する。寺域山林内の立会調査で表面採集。

巴文軒丸瓦（108A）　左巻きの三巴文で、尾は互いに接して界線状となる。さらに外側に界線が1条巡る。外区には大粒の珠文が12個配される。珠文が大きいため巴文が小振りにみえる。小石と砂粒を多く含み、焼成やや軟質、色調は黄灰色。C区土壙45から出土した。

巴文軒丸瓦（108B）　右巻きの巴文で、内区に界線、外区には大粒の珠文を配する。砂粒を混入し、焼成やや軟質、黒色を呈する。H区表面採集。

巴文軒丸瓦（109A）　内区には左巻きの三巴文を配し、巴の尾は半周して界線と結合する。外区には小粒な珠文を24個配置。瓦当外周と裏面は丁寧にナデ調整。丸瓦凸面はヘラ状器具で縦方向にミガキ。瓦当裏面の下半は横方向にナデ。胎土は小石が多く粗い。焼成は良好で、青灰色を呈する。C区土壙45から出土した。

巴文軒丸瓦（109B）　109Aと同様左巻きの三巴文で、外区には珠文を配する。胎土は微砂粒を混入し、焼成軟質、淡灰色を呈する。C区土壙45から出土した。

巴文軒丸瓦（109C）　右巻きの三巴文で、尾は界線に接する。外区には珠文を配する。N区上層から出土した。

巴文軒丸瓦（110）　右巻き三巴文の頭部は太く、尾は界線に接続する。外区には大粒の珠文が配される。瓦当厚が薄く裏面はナデで調整。丸瓦部凸面は縦方向の縄タタキが残る。細かい長石と小石が混入し、焼成軟質、暗灰褐色。J区石組み上層から出土した。

巴文軒丸瓦（111A）　左巻きの三巴文は頭部が強く巻き、尾は短い。外区には小粒な珠文を19個配置する。瓦当面には離れ砂を使用。丸瓦部凸面を縦方向にミガキ、瓦当外周・裏面は丁寧なナデで調整。砂粒が少量混入、焼成良好で、黒灰色を呈する。O区西トレンチ溝42から出土した。

巴文軒丸瓦（111B）　111Aと同様左巻きの三巴文で、巴頭部の巻きが強い。外区には小粒の珠

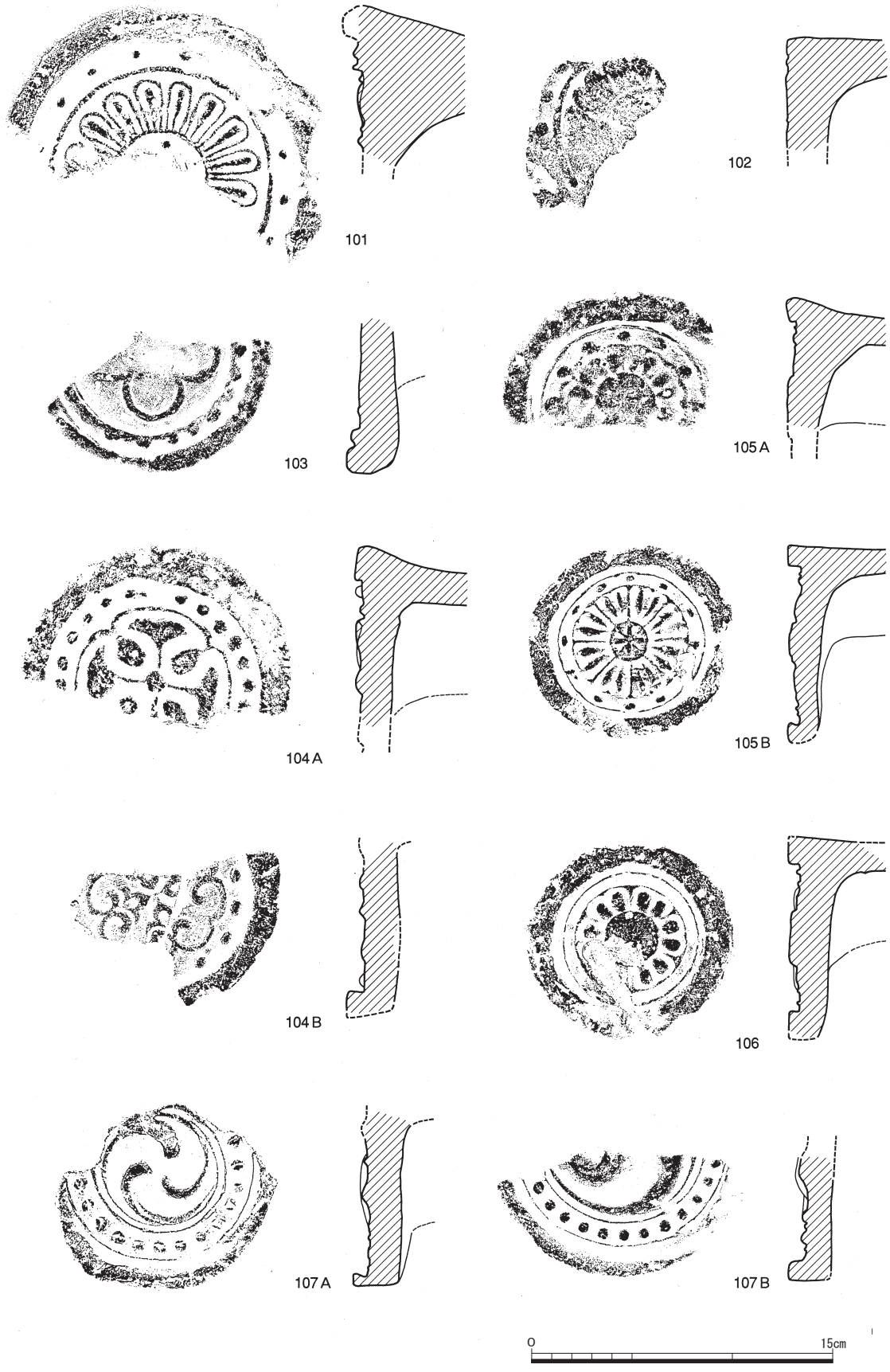


図 24　軒丸瓦拓影実測図 (1) (1:3)

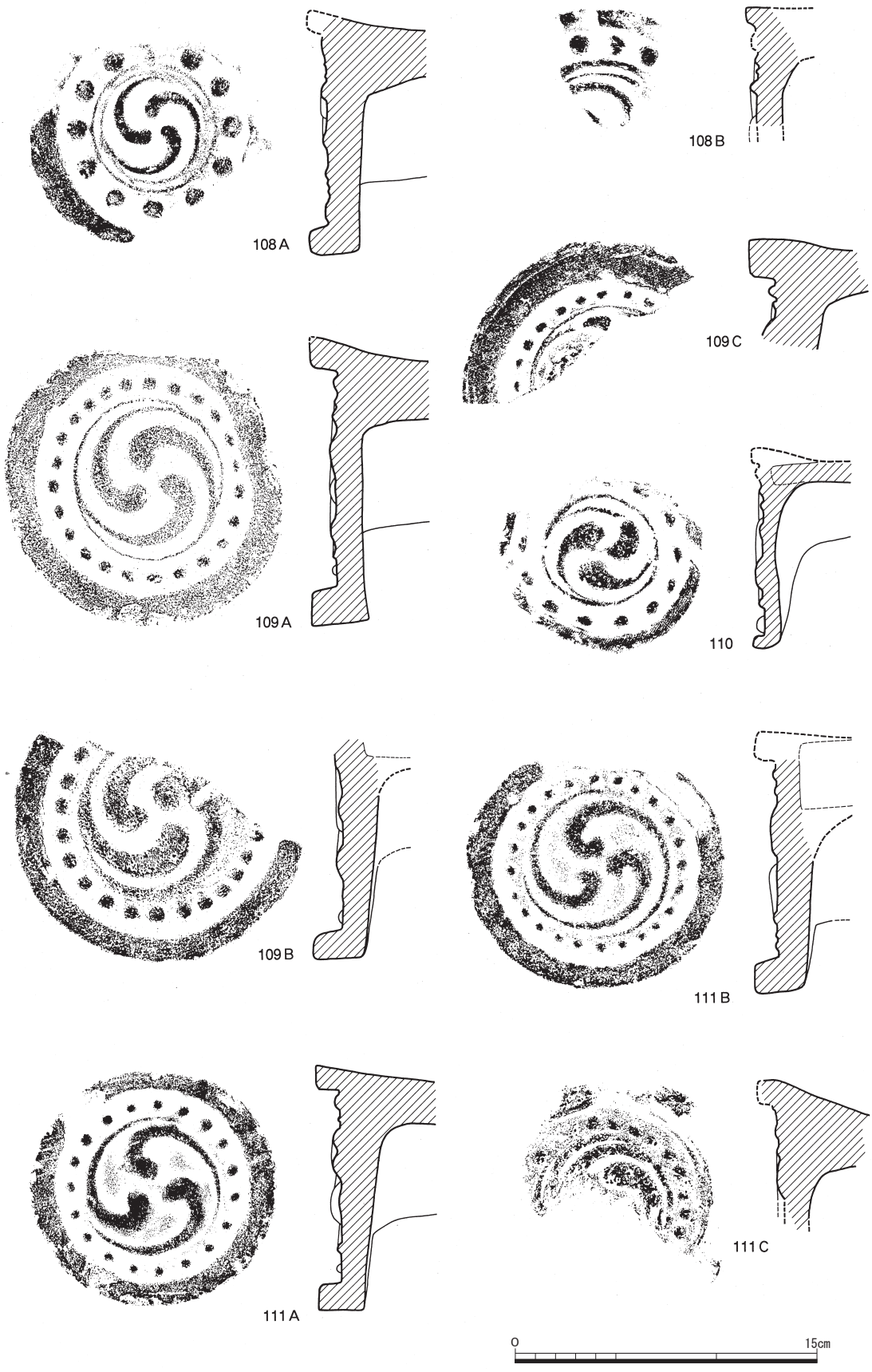


図 25　軒丸瓦拓影実測図 (2) (1:3)

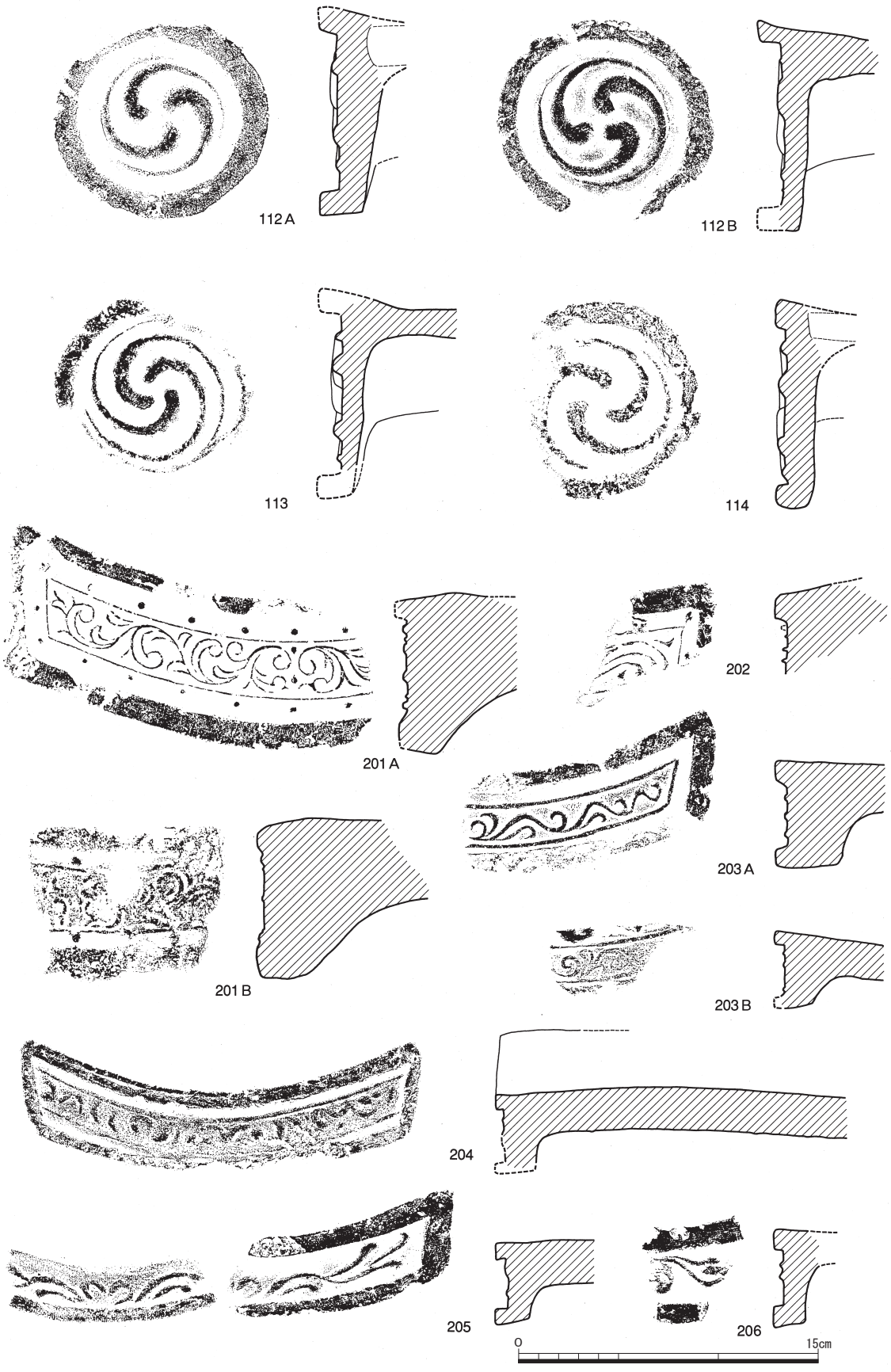


図 26　軒丸瓦 (3)・軒平瓦拓影実測図 (1) (1:3)

文が 24 個配される。丸瓦を瓦当裏面に浅く接合しているため、この部分ではずれている。瓦当外周と裏面はナデで調整。胎土は雲母や長石を含みやや粗い。焼成軟質で黄褐色を呈する。S 区南半部第 2 層から出土した。

巴文軒丸瓦（111C）　左巻きの巴文。外区に珠文帯を設ける。胎土は長石など砂粒を含み粗い。焼成軟質で、淡黄灰石。L 区南拡張区第 2 層から出土した。

巴文軒丸瓦（112A）　左巻きの三巴文で珠文はない。巴の尾は半周し、細くのびる。瓦当裏面に溝を設け、丸瓦を差し込んで接合しているが、接合部が浅いためはずれている瓦当外周と裏面は丁寧なナデ調整を施している。微砂粒が混入し、焼成やや軟質、淡灰色を呈する。D 区第 1 層の他 I 区・S 区・O 区・E 区で出土している。

巴文軒丸瓦（112B）　112A と類似。瓦当面に離れ砂使用。瓦当外周と裏面は丁寧なナデ調整。微砂粒を少量含み、焼成良好、灰色を呈する。計 5 点出土しているが、同范で O 区西トレンチ腐植土層からの出土品に獅子口（313）がある。

巴文軒丸瓦（113）　左巻きの三巴文で、巴文の先端は尖り、尾は細く長くのびる。丸瓦より瓦当径がかなり大きい。小石を疎らに混入し、焼成軟質、黄橙色を呈する。L 区南拡張区第 1 層から出土した。

巴文軒丸瓦（114）　右巻きの三巴文で、巴の巻きは異なるが 113 と類似している。小石を疎らに混入し、焼成やや軟質、黄灰色を呈する。境内北部の山林内の立会調査で出土した。

(2) 軒平瓦（図 26 ～ 28　写真図版 32 ～ 34）

軒平瓦は 16 型式 32 種 132 点を数える。瓦当の主文様には唐草文、菊花唐草文、剣頭文、幾何学文、水波紋などがある。平安時代中期以降、鎌倉時代、室町時代の瓦がみられる。

均整唐草文軒平瓦（201A）　複線で向かい合う C 字型の中心飾りから、唐草が 3 反転する。唐草の反転する分岐点では複線化された枝葉が派生する。中心飾りの中には､水滴状の珠文を 2 個、縦に配置する。界線が 1 条巡り、外区には小粒な珠文が配される。下外区の内側には文様の割付中心線のキザミ痕が認められる。瓦当外周をケズリ・ナデ調整。平瓦部の布目は粗い。石英・長石などの小石を多く混入し、焼成良好、硬質、暗灰色を呈する。境内山林中の分布調査で採取。京都市小野瓦窯産とされる軒平瓦である。

均整唐草文軒平瓦（201B）　201A と類似する軒平瓦で、唐草を複線で表現する。胎土は砂粒を混入し、焼成軟質で、黄灰色を呈する。I 区北半第 2 層から出土した。京都市小野瓦窯産とされている。

均等唐草文軒平瓦（202）　数本の唐草がゆるやかに反転する。瓦当外周はケズリで調整。胎土は砂粒多く粗い。焼成良好で、明褐色を呈する。L 区西トレンチ第 3 層から出土した。

均等唐草文軒平瓦（203A）　唐草の主葉は波形に流れ、屈曲部で枝葉が派生する。界線が 1 条巡る。瓦当は平瓦の端面を下方へ斜めに裁断し瓦当を接合している。平瓦凹面の布目は瓦当外周の端部近くまで残る。外周・瓦当裏面・平瓦凸面を丁寧にナデ調整。平瓦凸面には凹形台（調整台）らしき圧痕が認められる。平瓦凹面および側面の調整を凹形台の上で行っている。微砂粒を

多く混入し、焼成良好、暗灰色。Ⅰ区から出土した。法持寺殿で同文あり。

唐草文軒平瓦(203B)　小片。唐草の巻きは強い。界線が1条巡る。瓦当外周端部まで布目がつき、裏面を強くナデる。胎土は緻密で、焼成やや軟質、淡灰色を呈する。F区第1層から出土した。

唐草文軒平瓦(204)　非常に簡略化された唐草文である。主葉と枝葉の区別がなく唐草が分離している。上外区と下外区に界線が巡り、脇区には界線がない。瓦当外周まで布目が付く。布目の下には糸切り痕が明瞭に残る。平瓦部凸面には格子タタキが残る。瓦当裏面は丁寧にヨコナデの調整。胎土は長石・黒色砂粒を含みやや粗い。焼成やや軟質、淡灰色を呈する。F区第1層から出土した。

唐草文軒平瓦(205)　中心飾りをハート形に表し、唐草はゆるやかに2反転する。枝葉の派生も3本と少ない。胎土は緻密で、焼成軟質、淡灰色を呈する。F区第1層から出土した。

唐草文軒平瓦(206)　唐草複線で表現する。瓦当外周をヨコナデ。Ⅰ区東拡張区溝37盛土層から出土した。

菊花唐草文軒平瓦(207A)　中心飾りは半截菊花文を凸線で表す。唐草は中心飾りの下部からのび、左右に3反転する。唐草の巻きは強く、それぞれ独立する。下外区を除き界線が巡る。瓦当面に離れ砂を使用している。また、瓦当外周下部・裏面にも離れ砂が付着している。凹形台を利用して平瓦凹面と側面をナデ調整。胎土は砂粒を疎らに含み、焼成軟質で、淡灰色を呈する。C区土壙45から出土した。

菊花唐草文軒平瓦(207B)　207Aと文様は同じ。しかし中心飾りの半截菊花文と唐草が207Aより大きく展開する。207Aは下外区の界線がないが、207Bには外区全周に界線が巡る。W4区池28出土。

菊花唐草文軒平瓦(208A)　中心飾りは6弁の半截菊花文を凸線で表す。唐草は中心飾りの下部からのび左右に3反転する。平瓦凹面には糸切り痕を残し、瓦当外周と側面はナデ調整。胎土は緻密で焼成はやや甘く、淡灰色を呈する。B区北拡張区溝から出土した。

菊花唐草文軒平瓦(208B)　208Aと近似。右側の唐草と脇区の間隔がAよりもやや広い。瓦当面に離れ砂を使用。胎土は白色の微砂粒を含み、焼成軟質、淡灰色を呈する。B区第2層とD区第1層から1点ずつ出土した。

菊花唐草文軒平瓦(208C)　208Aと近似。中心飾りに6弁の半截菊花文を凸線で表し、唐草は左右に1葉ずつ反転する。208Aとは逆に左側の脇区の間隔がやや広い。胎土は緻密で、焼成やや軟質、黒灰色。

菊花唐草文軒平瓦(208D)　中心部分を欠くが唐草の巻きの状態から208型式に含める。208型式の中ではもっとも小型で、平瓦部も薄い。Ⅰ区土壙から出土した。

菊花唐草文軒平瓦(209A)　中心飾りは5弁の半截菊花文を凸線で表す。唐草の展開は208Aと同様であるが、第3単位の途中で終わる。瓦当面に離れ砂を使用。平瓦凹面は丁寧なナデ調整。胎土は砂粒が混入し、焼成軟質で、橙白色。B区溝から多数出土した。

菊花唐草文軒平瓦(209B)　5弁の半截菊花文を表した中心飾りを持ち、唐草は中心飾りの下部

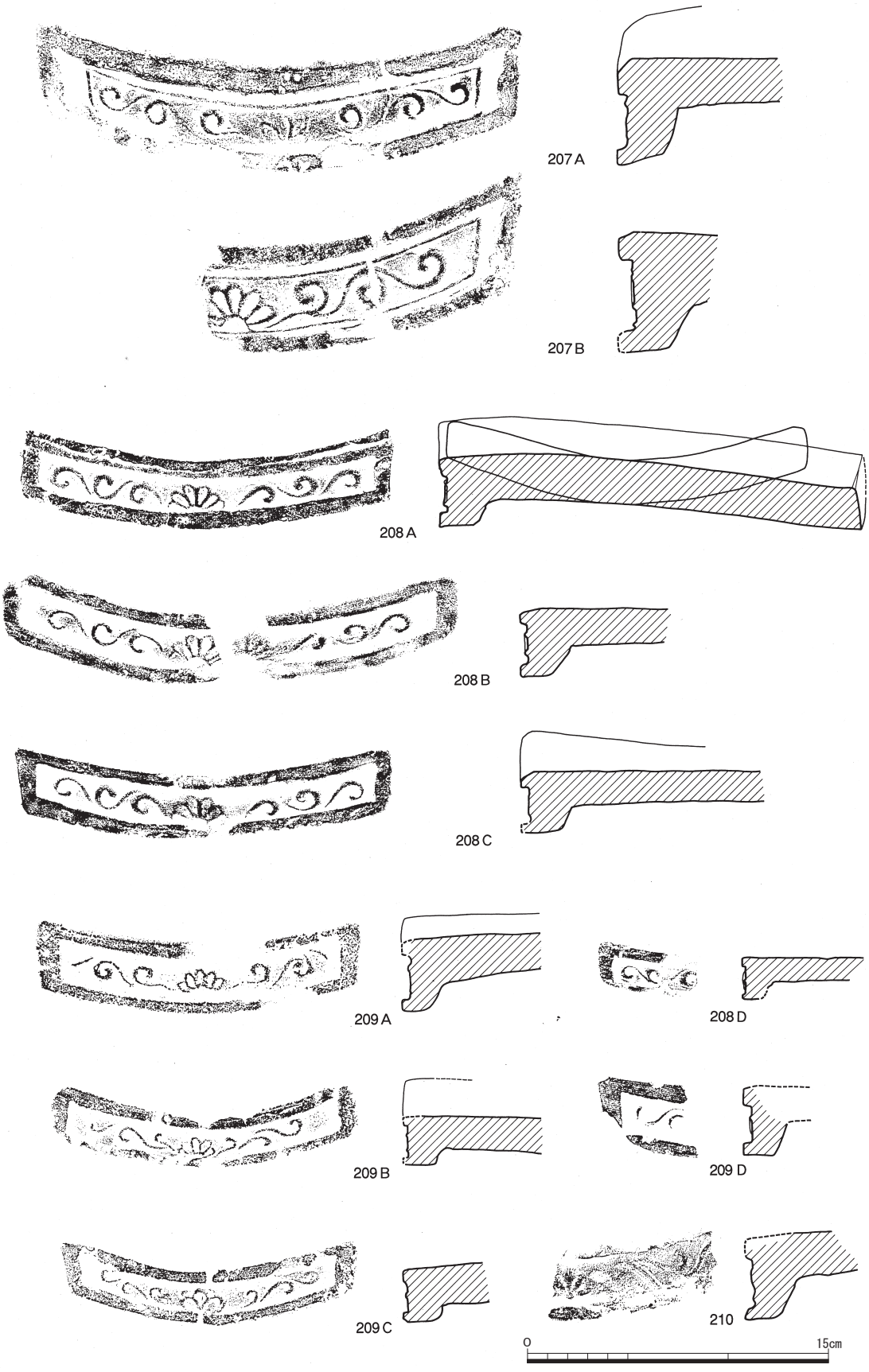


図 27　軒平瓦拓影実測図 (2) (1:3)

から始まり、左右に3反転する。胎土はやや粗く、焼成軟質で、灰色を呈する。N区上層から出土した。

菊花唐草文軒平瓦（209C）　209Bと文様の展開は同様。胎土は砂粒を疎らに混入し、焼成良好、淡黄灰色。D区落込から出土した。

菊花唐草文軒平瓦（209D）　小片。文様は209Bに似るがやや大ぶり。平瓦と瓦当の接合部で剥離し、平瓦の下端部を斜めに削って瓦当部と接合しているのが、よく判る。胎土は緻密で焼成やや軟質、暗褐色。D区から出土した。

菊花唐草文軒平瓦（210）　中心飾りの菊花文の弁を棒状に表す。瓦当面に離れ砂を使用。胎土に石英などの砂粒が混入し、焼成は良好で硬質、暗灰色を呈する。I区南半溝37上層から出土した。

剣頭文軒平瓦（211A）　中心飾りに×を置く剣頭文。剣頭の鏑を幅広く表す。左から2個目の剣頭は基部に傷が入っている。瓦当は折り曲げ式による。瓦当外周はナデ調整で、平瓦凹面は細かい布目の後ナデ調整。胎土は砂粒を含み粗い。焼成良好で、淡灰色。N区砂層から出土した。

剣頭文軒平瓦（211B）　剣頭の鏑は太く、先端が尖る。瓦当は折り曲げ式。胎土は緻密で、焼

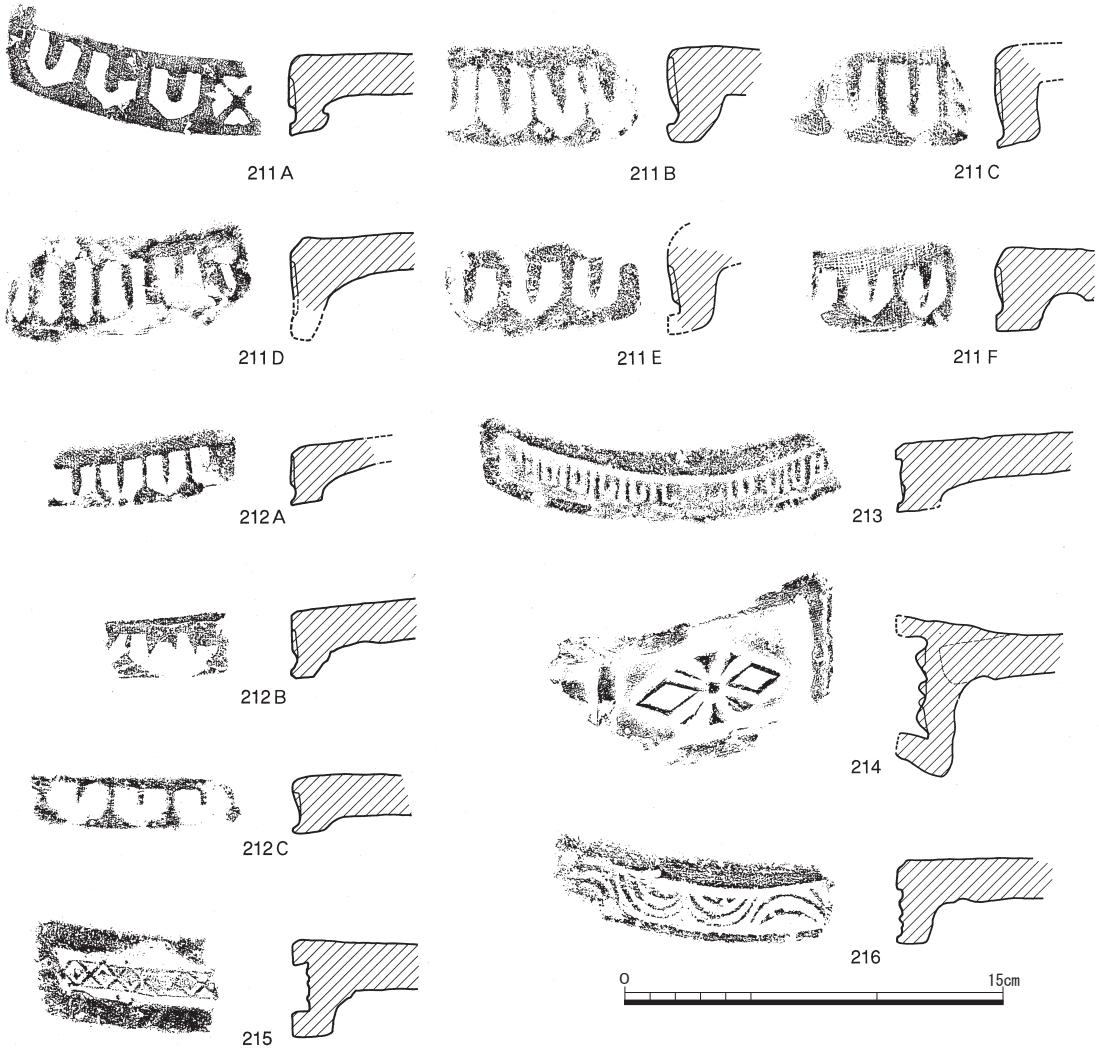


図28　軒平瓦拓影実測図（3）（1:3）

成軟質、灰白色を呈する。立会13で出土した。

剣頭文軒平瓦(211C)　剣頭を長く表現する。瓦当は折り曲げ式で成形し、瓦当面まで布目が残る。胎土は粗く、焼成軟質、淡灰色。O区東トレンチから出土した。

剣頭文軒平瓦(211D)　剣頭の鏑が長くのび外縁に接続しているため、剣頭の単位が不明瞭となる。瓦当は折り曲げ式で成形する。布目・叩き目は表面が荒れて確認できない。胎土は小石混じりで、焼成は軟質、淡黄白色を呈する。D区第1層から出土した。

剣頭文軒平瓦(211E)　瓦当は折り曲げ式で成形。瓦当面まで布目が付く。平瓦部凸面は縦方向の縄タタキ目が明瞭で、瓦当裏面にも残る。胎土は長石などの砂粒が混入しやや粗い。焼成硬質で、灰色を呈する。L区から出土した。

剣頭文軒平瓦(211F)　211Eと剣頭の各単位の大きさは類似するが、やや鏑の幅が細く先端が尖る。瓦当面まで布目が被る。W4区出土。

剣頭文軒平瓦(212A)　211型式に比べ瓦当面の厚さや幅が小さい。瓦当は折り曲げ式による成形。瓦当面には布目が付く。布目は細かい。胎土は小石が混入し、やや粗い。焼成やや軟質で、淡灰色を呈する。N区上層から出土した。

剣頭文軒平瓦(212B)　瓦当范が荒れ、剣頭が乱れている。折り曲げ式の瓦当成形。胎土は緻密で、焼成硬質、灰色を呈する。J区石組み上層から出土した。

剣頭文軒平瓦(212C)　幅広の剣頭文を並べている。折り曲げによる瓦当の成形。胎土はやや粗く、焼成軟質。淡灰色を呈する。K区井戸内から出土した。

剣頭文軒平瓦(213)　細かい剣頭を多く配する。胎土は長石粒が混入し粗い。焼成軟質で褐灰色。F区第1層から出土した。

花菱文軒平瓦(214)　内区を凸線で区画し、その区画内に花菱文を飾る。瓦当の成形は包み込み式。平瓦先端を台形に削って接合している。布目は細かい。瓦当范の打ち込みは深い。胎土は緻密で焼成良好、灰色。J区石抜き取り穴から出土した。

幾何学文軒平瓦(215)　界線に囲まれた斜格子を配置する。格子の中には小さな菱形文を表す。平瓦凹面にヘラ記号あり。長石が疎らに混入し、焼成軟質、黄灰色を呈する。N区上層から出土した。

水波文軒平瓦(216)　それぞれ独立した3本の凸線で水波文を表す。瓦当は折り曲げ式で成形。胎土は砂粒多く粗い。焼成やや軟質で褐灰色。J区で表面採集した。

(3)軒丸瓦・丸瓦・平瓦(図29・30　写真図版36・37)

三巴文軒丸瓦(301)　大型の丸瓦(303)に三巴文の瓦当部(109A)を接合したもの。全長33.5cm、胴部長28.2cm、幅14.3cm、厚さ3.0cm。胴部に1.3cmの釘穴を有する。E区から出土。

三巴文軒丸瓦(302)　玉縁のない行基葺きに瓦当(112A)を接合したもの。瓦当の外縁部が外れている。丸瓦部の凹面の面取りは広端部から狭端部まで一気に幅約2cm 削り取り、さらに広端部外側に約0.5cm面取りを施す。吊り紐痕は認められない。全長23cm、幅11.5cm、厚さ2cm。O区から出土した。

丸瓦（303）　完形丸瓦である。金閣寺出土丸瓦の内では大型に分類できる。丸瓦凸面は丁寧なナデとミガキで縄タタキを消しているが、胴部狭端部付近にわずかに残る。凹面には糸切り痕・布目痕が残り、ループ状の吊り紐痕が食い込む。吊り紐痕は紐を布袋の通し、粘土に布を食い込ませて、布付きの状態で木型から取り外すために付いた痕跡である。凹面には楕円形の内面叩き痕が残る。各部の面取りは表 3 を参照。全長 30cm、胴部長 25cm、幅 15.7cm、厚さ 2.5cm。胎土は緻密で淡灰色。焼成軟質。W4 区池 28 から出土した。

丸瓦（304）　大型の丸瓦で、玉縁部に 9 個の旭日印を捺す。他に 1 個の旭日印を捺すものが 1 点ある。この刻印は東福寺・栢森遺跡・相国寺・臨川寺で出土し、鎌倉時代から室町時代にかけて奈良・京都の広範にみられ、南都系瓦の指標とされている。

丸瓦（305）　大型の丸瓦で凹面に吊り紐痕跡を留める。紐を山の部分で一回転させてループ状にする。W4 区池 28 から出土した。

平瓦（306）　大型丸瓦（303）と組み合う平瓦で、W4 区池 28 の平瓦総破片数 6 千点中で復原できたのはこの 1 点だけである。凸面には斜め方向に円弧を描く粘土版切断痕と離れ砂が付着し、その上から手や指で押さえた痕跡を留める。また凸面広端部に凹型調整台の端に押しつけた時に付いたと思われる円弧上の圧痕と、凹型調整台に沿って両側端を切り揃える際に生じるバリが、凸面両側縁に残る。凹面の糸切り痕と離れ砂はナデと無文の叩き板でほぼ消滅しているが、広端部付近にわすかにその痕跡を留める。凹面の狭端縁に 1.3cm・両側縁に 0.4cm の面取りを施す。胎土は 303 とほぼ同じであるが、焼成はやや軟質。全長約 30cm、狭端部 21.6cm、広端部不明、厚さ 2.5cm を測る。

平瓦（307）　中型の平瓦で、鹿苑寺境内で広範囲に出土するが、これに対応する丸瓦は極端に

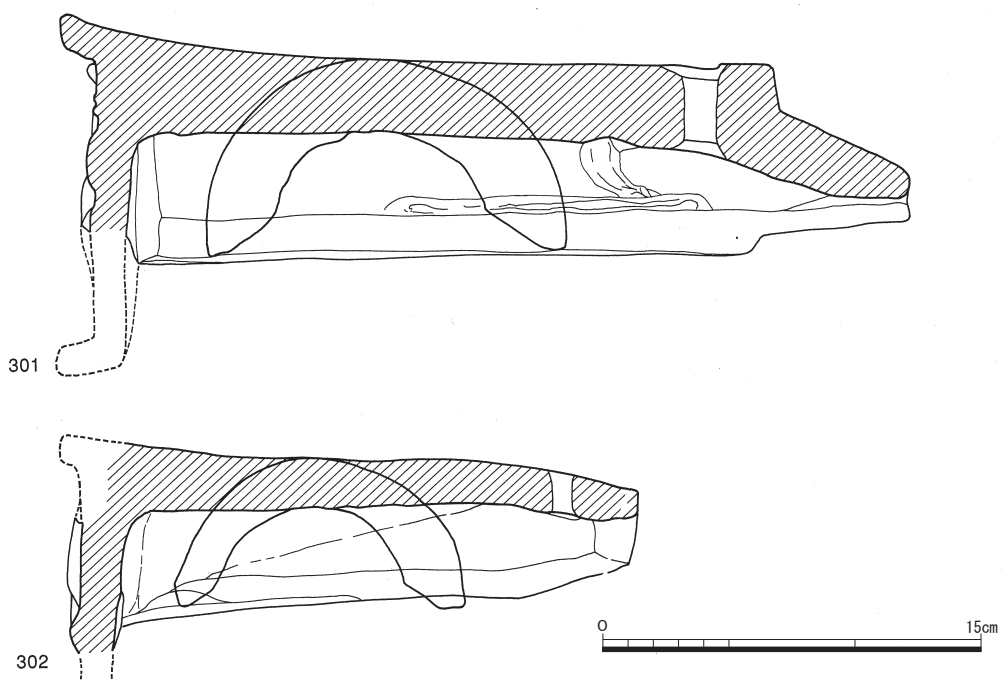


図 29　軒丸瓦実測図（1:3）

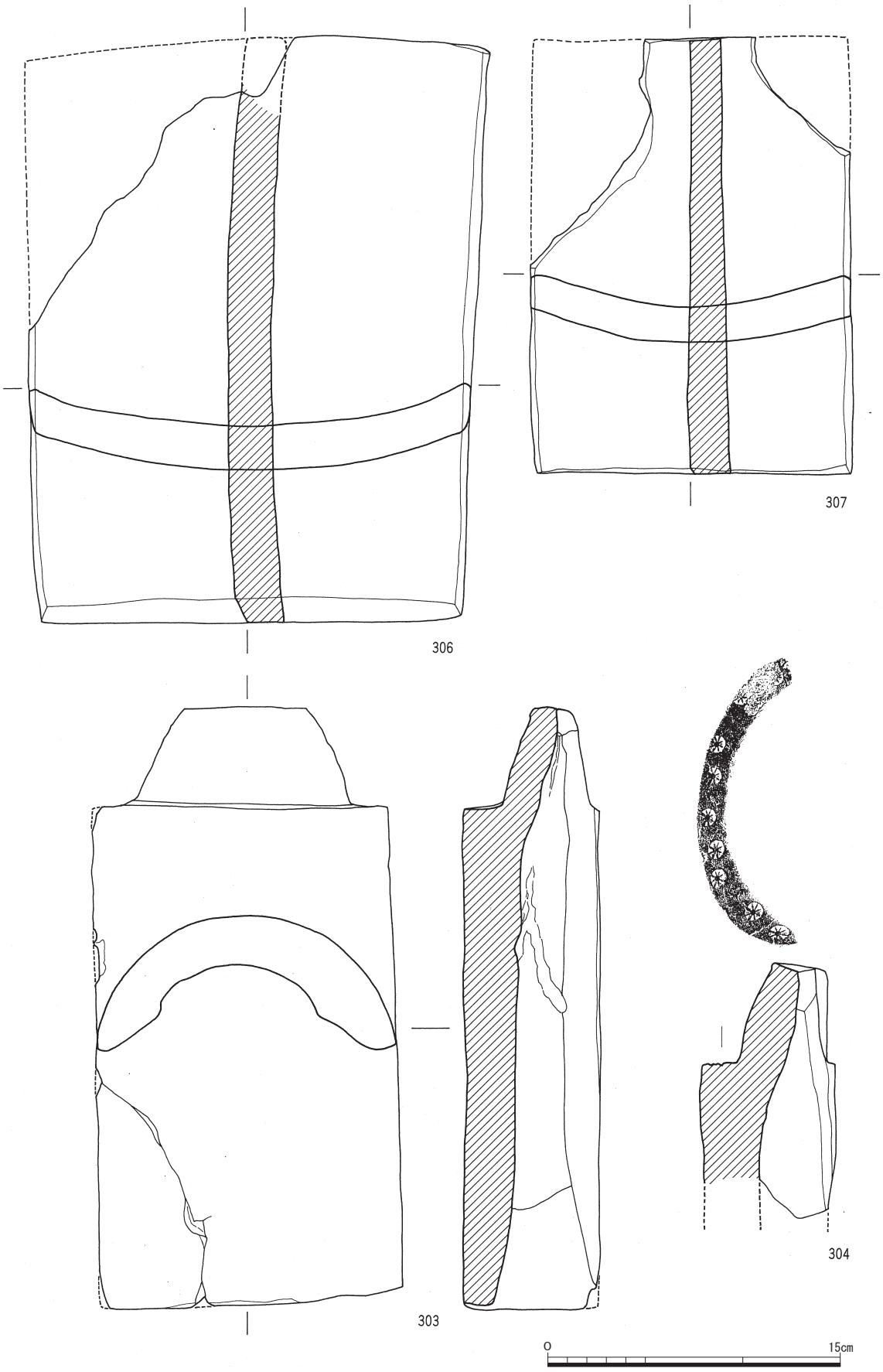


図 30　丸瓦・平瓦実測図 (1:3)

少ない。凹面の無文タタキもしくはナデが大型平瓦と異なり、狭端部付近に粗くわずかに施されているだけで糸切りと離れ砂が付着している様子が明瞭に観察できる。凸面の痕跡は306と同様である。N区から出土した。

(4) 道具瓦（図31　写真図版31・35）

鬼瓦（308・309）　どちらも破片であるため、大きさは不明であるが、308は口と髭を表した部分である。308・309はD区出土。

巴文獅子口（310）　丸瓦に相当するところは欠損しているが、平瓦に剣頭文を表現する。丸を3個、平を2個並べ、体部に2条の突帯を山形に張り付ける。推定で幅40cm高さ38cmほどと思われる。D区出土。

巴獅子口（311）　左巻き三巴文の尾は短い。内区の細い界線に接して珠文を配する。范ずれをおこし、珠文の形が変形している。外縁は一部しかない。獅子口の本体の上部に穴を開け、軒丸瓦の瓦当部を斜めにはめ込んでいる。その横には剣頭文を表した粘土板を貼

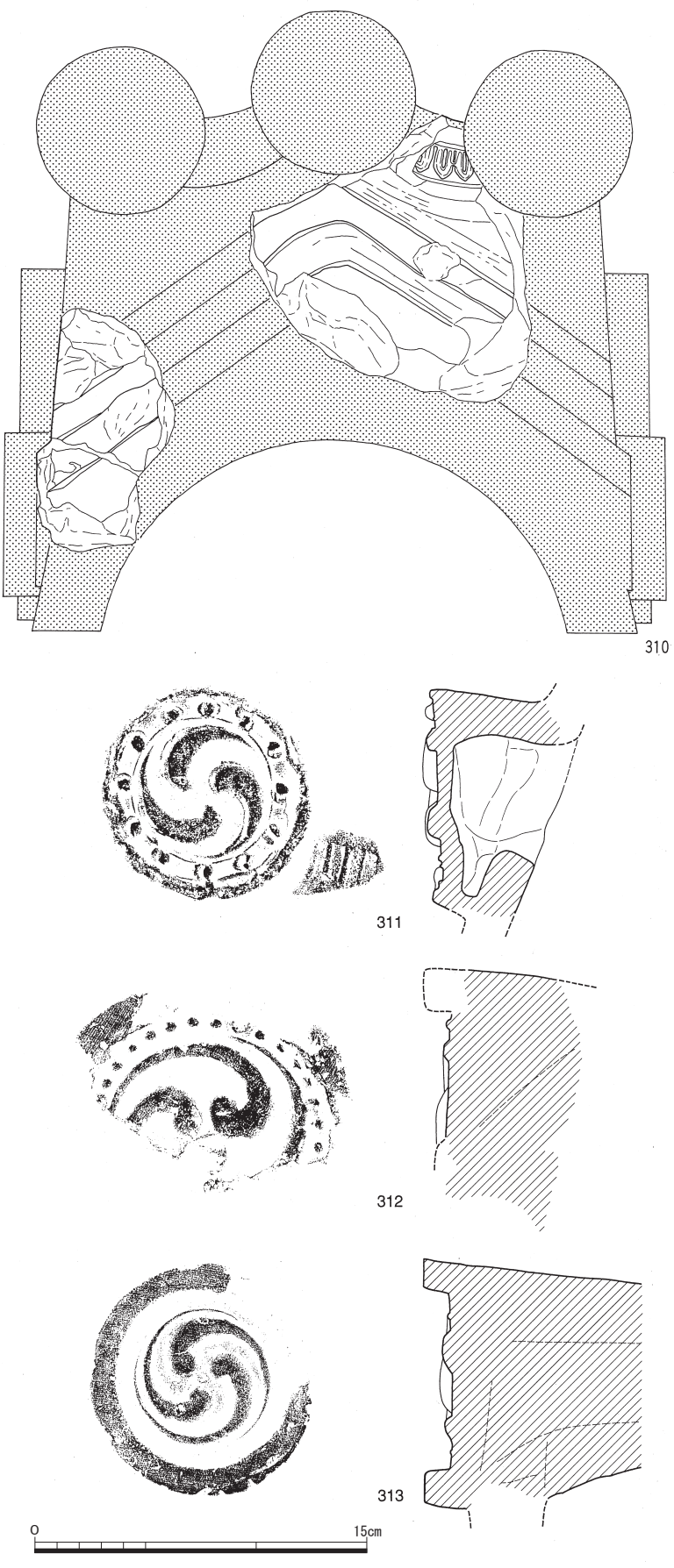


図31　獅子口復原図・獅子口拓影実測図（1:4）（1:3）

りつけ、軒平瓦のように表現している。胎土は緻密で、焼成やや軟質、黄灰色。O区東トレンチ段の上部で出土した。

巴文獅子口（312）　右巻き三巴文の頭部は巻きが強く、尾は長くのびる。外区には密に珠文を巡らす。瓦当面に離れ砂を使用している。311と違って瓦の裏側にも粘土を充填している。胎土は微砂粒を疎らに含み、焼成良好、暗灰色を呈する。H区重機掘削面から出土。

巴文獅子口（313）　軒丸瓦112Aと同范。瓦当面に離れ砂使用。瓦当外周と裏面は丁寧なナデ調整。微砂粒を少量含み、焼成良好、灰色を呈する。O区西トレンチ腐植土層から出土。

獅子口（314～316）　いずれも破片のため大きさ・形状は不明である。314・315は体部で2条の突帯を張り付ける。316は経の巻の上部で文様ははがれて不明である。

2　土器

土器は各調査区から出土し、平安時代中期から江戸時代後期までである。土師器がもっとも多く、またまとまっているのはN区で、修羅や木製品と供伴して多量に出土した。他調査区では量的にも少ない。D区では染付・白磁などの輸入陶磁器が出土している。また、X区では多量の国産陶磁器が土壙から出土した。

(1) 土師器（図32・33　写真図版38～40）

N区出土土師器（1～43）

土師器皿は形によってA(11～43)・B(1～10)の2種がある。皿Aは大きさによって6種類に分類でき、大きい順にⅠ～Ⅵとする。皿Aは平らな底部からゆるやかに斜め上方へのびる体部を持ち、口縁部はわずかに外反し上方へつまみあげるようにやや尖らす。底部内面は一定方向のナデ、体部内面から口縁部の外面にかけて横方向に丁寧なナデを施す。ナデには濡らした布状のものを用いたらしく、ナデの方向を明瞭に観察できる。

Ⅰ～Ⅲは底部から体部の外面は指オサエののち、軽いナデ調整。Ⅳ～Ⅵは底部から体部にかけての外面は未調整。口縁部の下方でわずかに外反する部分の外面では、中心から左方向へ向かうシワが認められる。体部の立ち上がりを成型する時に付いたと思われる。Ⅰ～Ⅲはナデのため消されている。

Ⅰ（38～43）は口径17.0～19.2cm・器高2.5～3.4cm（平均値口径17.9cm・器高2.9cm）

Ⅱ（34～37）は口径15.2～16.6cm・器高2.1～3.2cm（平均値口径16.0cm・器高2.7cm）

Ⅲ（31～33）は口径13.4～14.6cm・器高2.3～3.2cm（平均値口径14.4cm・器高2.7cm）

Ⅳ（28～30）は口径12.4～12.6cm・器高2.0～2.8cm（平均値口径12.5cm・器高2.4cm）

Ⅴ（20～27）は口径10.0～11.6cm・器高1.9～2.9cm（平均値口径10.6cm・器高2.3cm）

Ⅵ（11～19）は口径8.0～9.8cm・器高1.6～2.4cm（平均値口径8.8cm・器高2.1cm）

をそれぞれ測る。胎土は微砂粒を少量含み、焼成やや軟質、色調は灰褐色や黄灰色を呈する。いわゆる白土器と称する白色系の土器もある。皿AⅣには灯明皿として用いたために、口縁部に煤が点々と付き、灯心の痕跡を明瞭に残している土師器皿が2点ある。Ⅰ～Ⅵはそれぞれ大き

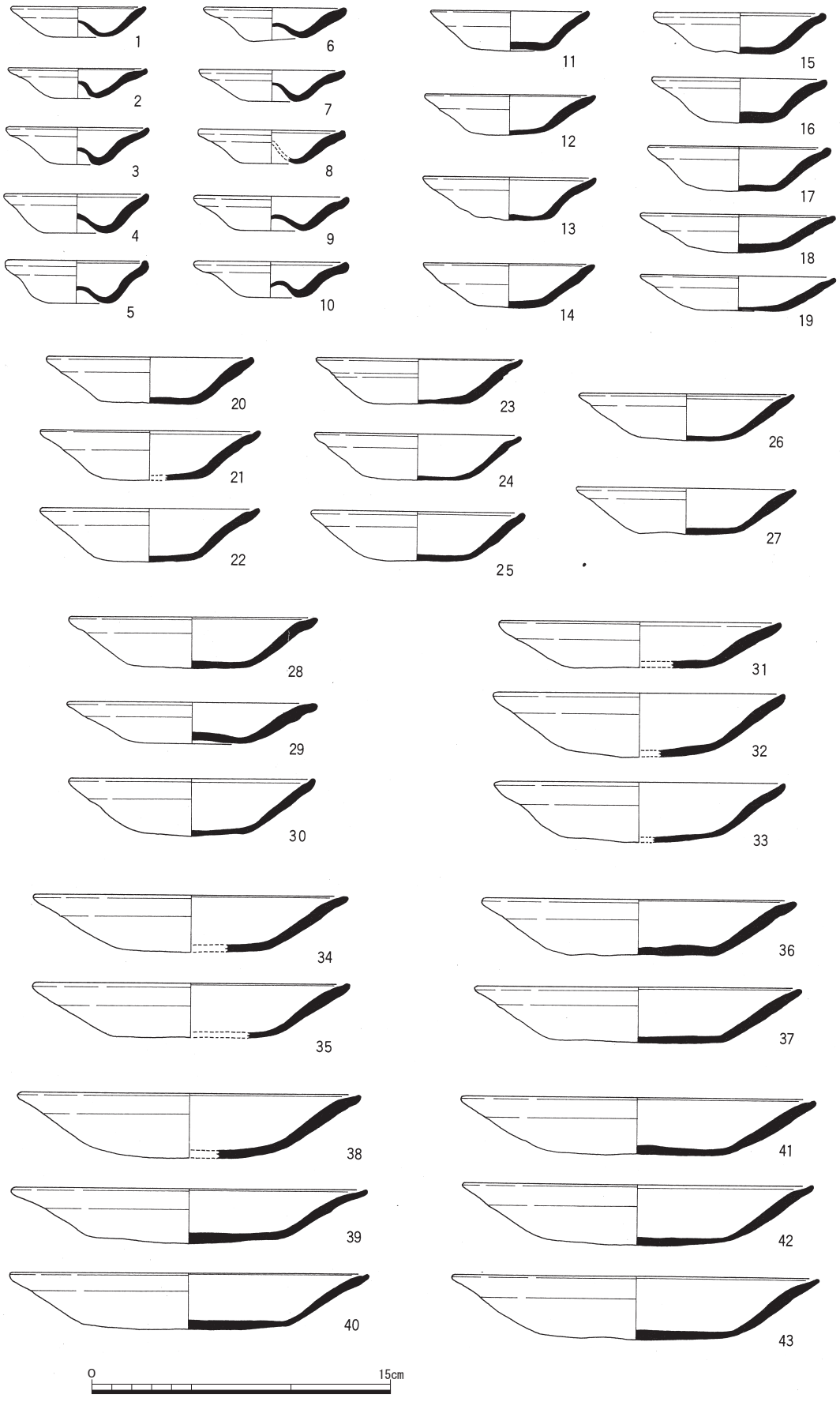


図 32　N 区出土土師器実測図 (1:3)

さ・成型・調整が近似し、この類の土師器皿を型造りとする考え方もあるが、本資料では型造りで成型した痕跡は認められなかった。

皿Bはもっとも小型の皿A Ⅵよりもさらに一回り小さく、底部を上方へ凹めたいわゆるヘソ皿と呼ばれている器形である。底部外面から体部にかけてオサエ、口縁部から内面を横ナデの調整。口縁端部は上方へつまみあげるように横ナデ。底部の凹みには爪痕が残り、指で押し込んで成型していることが判る。大きさは口径が6.6～7.9cm・器高が1.4～2.2cmを測る。平均値は口径7.3cm、器高1.7cmである。胎土・焼成・色調は皿Aと同様である。

J区出土土師器（44～50）

N区で出土している土師器皿と類似する。皿AⅡ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ、皿B（いわゆるヘソ皿）がある。特殊な土器としては皿Bに墨書土器（50）が1点ある。口縁部内面に45度置きに棒線を引き、「廿文・一文・卅文」「十五」と描く。呪術に用いたものであろうか。

O区出土土師器（51～57）

O区東側トレンチで土師器皿が出土している。（54～56）は体部外面のナデが底部近くまで施される。（57）は分厚い手捏ねの壺で、調整が悪く、粘土紐の継ぎ目が明瞭に残る土器である。14世紀前半に比定されている。

V区出土土師器（58～63）

深手の皿（63）と浅い皿（58～62）がある。どちらも底部から体部にかけて曲線を描いて立ち上がる。（63）は口縁端部を丸くするが、（58～62）は口縁端部を尖らすようにしておさめる。（62）は近世初頭、他は13世紀中頃段階の土器である。

W区出土土師器（64～69）

W4区で土師器が6枚重なって出土している。皿2枚、杯4枚がある。（69）は底部から口縁まで真っ直ぐにのびるが、（68）は体部で屈曲し、口縁部では外反しながら上方へ折り返して立ち上がる。杯（64～67）は皿（68）と同様、口縁部外側を強く横ナデし、外反させたのち上方へ立ち上がる。器壁は薄く仕上げ、オサエのための凹凸がある。皿と杯は口径が13.4～14.5cmを測り、ほぼ同じ大きさである。10世紀前葉に比定されている。

（2）輸入陶磁器（図34　写真図版41）

輸入陶磁器には白磁・染付があり、青磁の小破片がわずかにみられる。輸入陶磁器はD区で主に出土しているが量的には少ない。図示した輸入陶磁器はD区出土で、（75・82）が土壙44出土、他はすべて第1層出土である。（82）は茶色の釉薬をかける椀で、緻密な胎土から輸入陶磁器と考えた。

白磁

白磁皿は大小2種がある。底部には直立する高台を付け、体部はなだらかに立ち上がり口縁部で外反して丸くおさめる。釉は全面施され、貫入が入る。高台の先端畳み付けは釉を削り取る。底部外面にはケズリ痕跡が認められる。（78～80）の3点は口径と器高がほぼ同じで規格品である。（81）は小型で口縁部の破片。

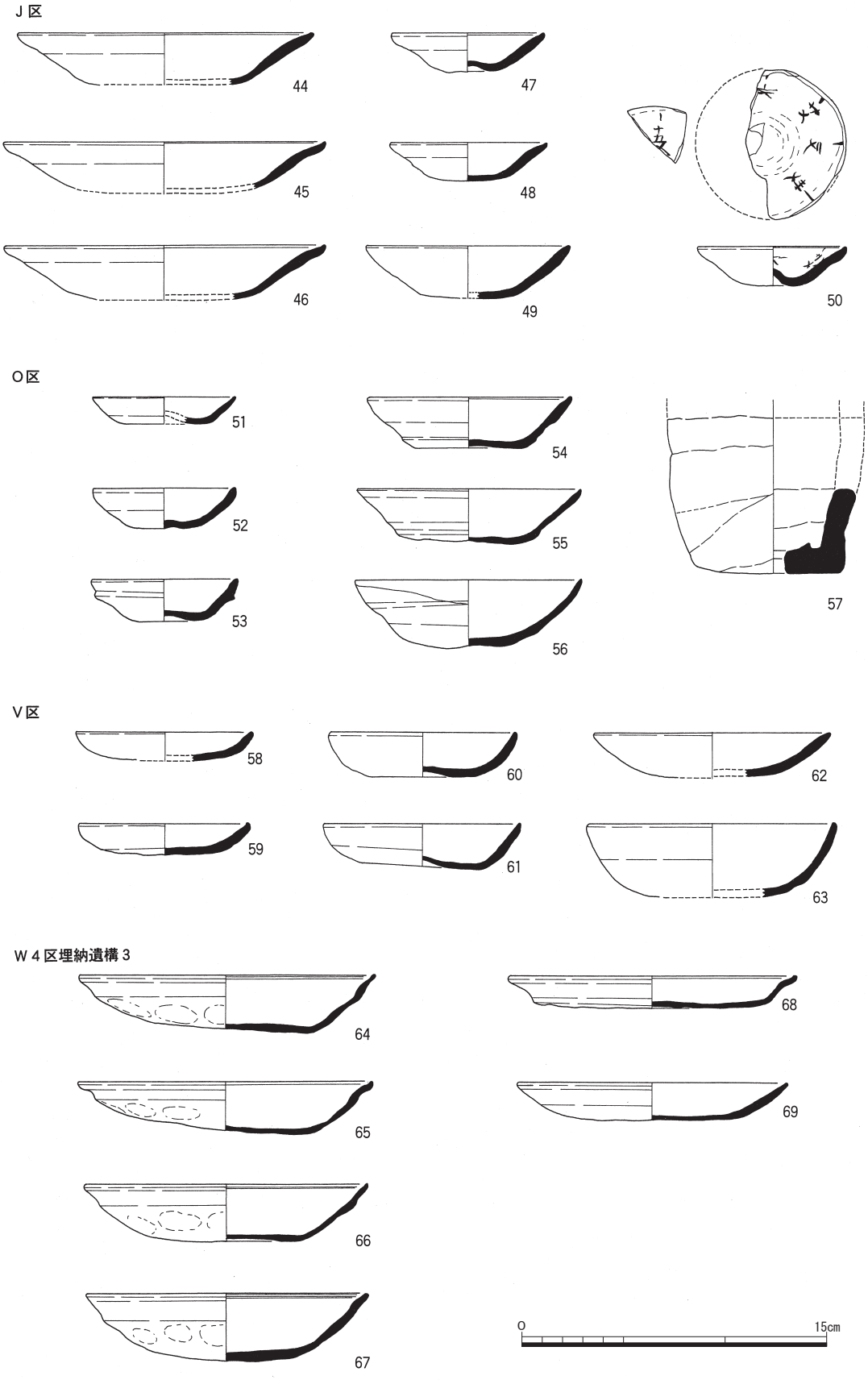


図33　J・O・V・W区出土土師器実測図（1:3）

染付

染付には皿と椀がある。皿は白磁皿と類似する器形で、法量によって2種に分けられ、染付皿Ⅰと染付皿Ⅱとする。染付皿Ⅰは内外面共に文様を描き、(76) と (77) は文様が類似する。染付皿Ⅱは (70) と (71) 類似する文様を描く。椀は小破片のため正確な法量は求められない。(76・77) は二次焼成を受け、釉が溶け文様が不鮮明である。

(3) 国産陶磁器 (写真図版 42 ～ 45)

国産陶磁器は各調査区から出土しているが、ここではX区出土の土壙50より出土した一括の陶磁器を取り上げることにする。

伊万里系の染付椀には多種の文様がみられる。外面には風景・竹・草花・幾何学文などが描かれ、見込み中央には小さく草花を描く。(90 ～ 97) は文様が稚拙なクラワンカ椀と呼ばれる粗雑な染付である。器壁は分厚く、見込みの釉薬を蛇の目状にかきとって重ね焼きしたものである。摂津枚方 (大阪府枚方市) 付近で、淀川を通る船に酒食を売っていた船の中で用いられた茶碗をクラワンカ椀と呼ばれた。

(96) はコンニャク版で文様を描く。京都市内の発掘調査ではもっとも一般的に出土する江戸時代の伊万里系染付椀である。(83) は広東椀と呼ばれクラワンカ椀より新しい器形である。

(98 ～ 106) は蓋である。(98 ～ 100・102) は染付、(101) は型押で文様を付けたもので「本山」の銘がある。

(102 ～ 104) はつまみの付く蓋、(107 ～ 110) は皿である。(110) は染付で口縁部を波型にする。(107 ～ 109) は灯明皿である。(107) は口縁部近くに浮文を張り付ける。(111) は大振りの染付鉢である。(112・113) は京焼き椀で竹葉を描く。(114) は黒釉、(115) は灰釉の椀。(116) は台の付く仏飯器。(117 ～ 125) は円柱状の椀である。(118) は染付、(122) は樹木を表したもの、(125) は交胎。

(126・127) は土師質の焼塩壺である。(128 ～ 131) は鉄釉にかけたもので、(130) が水差し、(128・129) は急須、(131) は徳利。(132) は青磁の香炉で、三足がつき底部に「□□改」のスタンプを押す。(134 ～ 139) は底部に墨書のあるもの、(133) は蓋の底部に墨書したものである。いずれも無釉の部分に墨書している。墨書は判読しがたい。

(4) 火鉢 (図 35　写真図版 40)

火鉢は瓦質で、上からみて円形を呈するもの (140) と方形を呈するもの (141) があり、いずれも破片で、脚部が付く。方形火鉢の脚部は単純であるが、円形火鉢の脚部は面取りを施し左右に波型の刻みを入れたひかえを付け、安定させている。(143) は方形火鉢で上方へ向かって開き、口縁部の外側に菊花文のスタンプを押しつけ飾りとしている。外面は横方向のミガキによって調整している。

3　木製品

木製品はN区で修羅と共に多量に出土した。池27に投棄されたらしく、結果として湿潤な粘

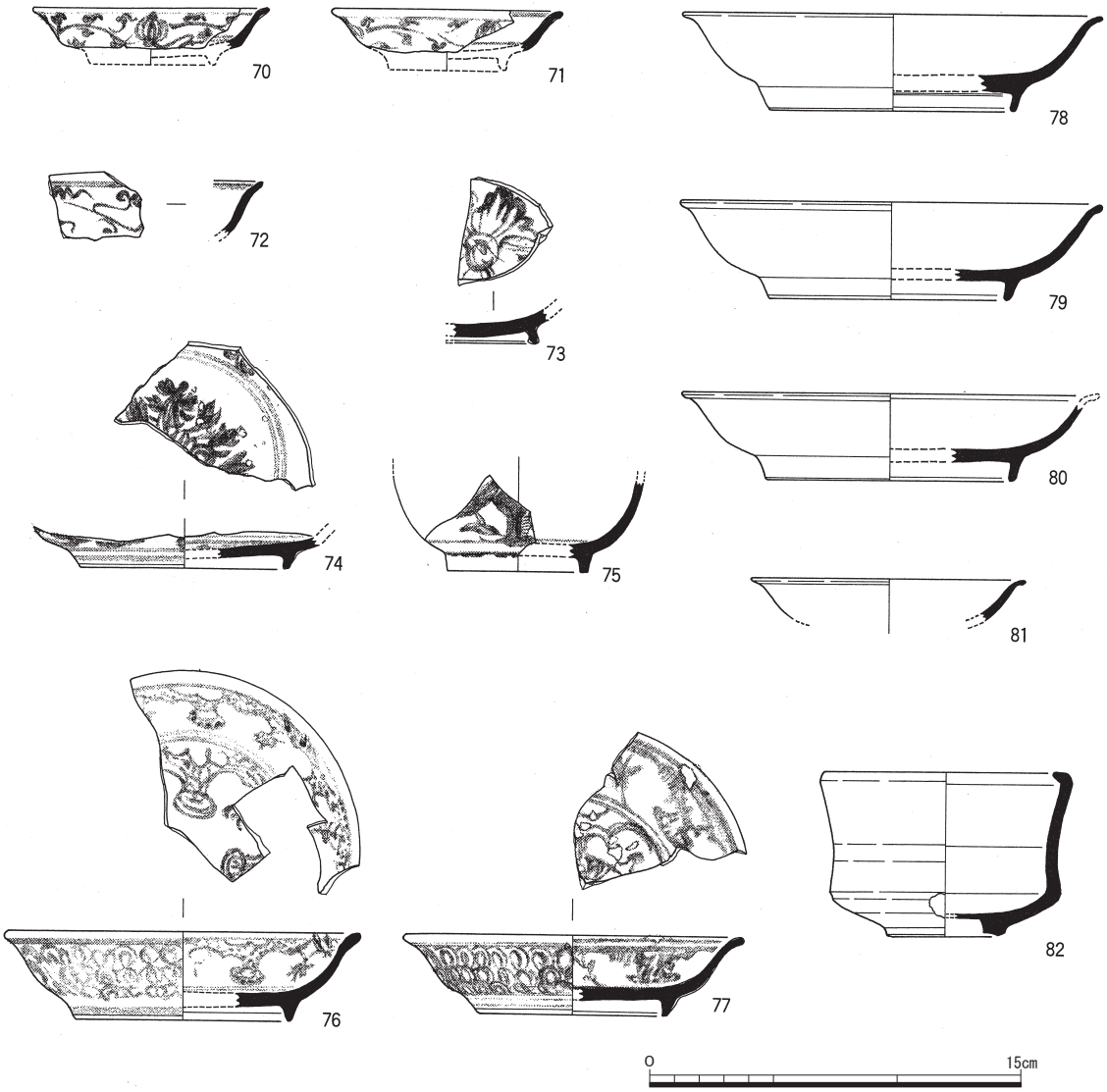


図 34　D 区出土輸入陶磁器実測図 (1:3)

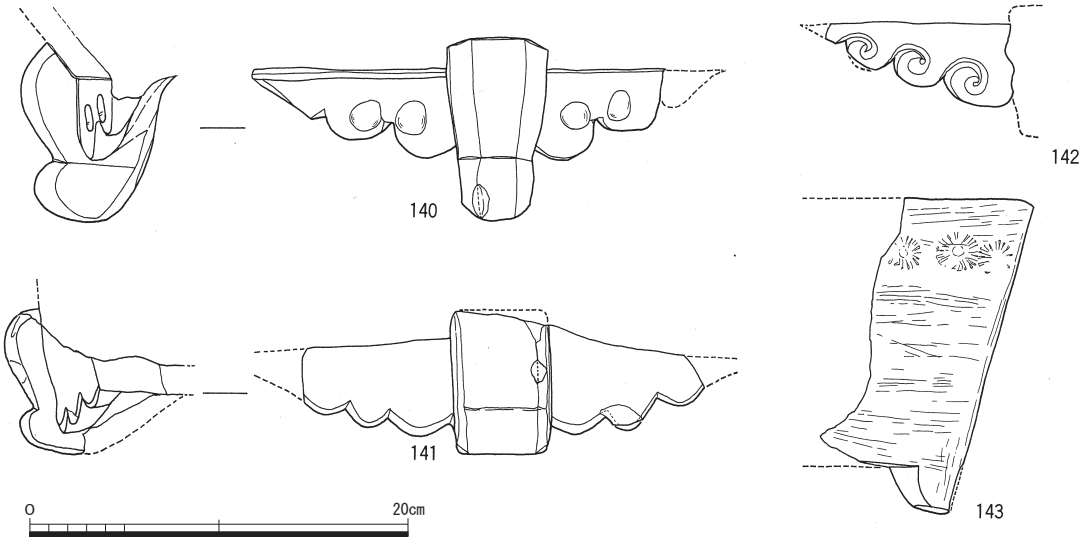


図 35　N 区出土火鉢実測図 (1:4)

土に密閉された状態となり、遺存状態は非常に良好であった。木製品は運搬具・祭祀具・遊戯具・服飾具・農具・部材・食事具・容器・用途不明品に分類される。祭祀具に人形・刀形・刀子形・刀子形の鞘・剣形・舟形・陽物形・斎串・遊戯具として琴柱形、木球、服飾具に下駄、傘、部材に台脚、格子桟、食事具に杓子、箸、容器に曲物、折敷、漆器椀などがある。その他にS区から出土した仏像の破片と燈台がある。

(1)N区出土木製品(図36～45)　写真図版46～55)

ⅰ運搬具

修羅(1・2)　N区の調査で修羅が2基出土した。どちらもY字形の二股の木を利用し、綱や紐をかける孔を穿つ。

修羅1の樹種はクリで、長さ350cm・脚部の幅140cm・高さは脚部で32cm・頭部で45cm・体積0.56㎥を測る。頭部には一辺15cmの方形孔を横方向に穿ち、脚部には左側に一箇所、右側に二箇所の孔を斜め上方から断面がU字型になるように開ける。頭部脚部とも下面がすり減って平らになっている。脚部先端ではやや下へ反っているため、下半分程がすり減っている。上面には一部樹皮が残っているところもあり、特別な加工はみられない。頭部の先端は未調整であるが、脚部は両方とも鋸で切り落とし平らにする。

修羅2の樹種はケヤキで、修羅1よりやや大きく、長さ470cm・脚部の幅130cm・高さが20cmから35cm・体積0.81㎥を測る。修羅1と同様に頭部に15×10cmの方形孔を穿ち、脚部には左右一箇所ずつ横から5～10cmの方形孔を真横から開ける。脚部の根元近くで、脚を補強する横材を入れたと思われる刳り込みがある。また脚部右側から孔を開けているが、途中で止まっている孔が一箇所認められる。貫通できずに止めたのだろうか。修羅2は上面も下面と同じように平らにすり減っており、上下とも使用したようである。すり減った部分には砂粒がめり込んでいるため、実際に使用したことが判る。頭部先端はかなり腐植が進んでいるが、両側から先を尖らすように削り、脚部先端は平らに切り落としている。修羅2の原因は判らないが、脚部の右側付け根に鉈のような刃物で切断しようとした痕跡がある。

ⅱ　祭祀具

人形(3～6)　柱状の材から顔と頭部を削りだして立体的に表わすものと、板材を用い人の顔を横から表現するものとがある。(3)は方柱状の一端を削り、顔と烏帽子を被った頭部を表わす。烏帽子と口に墨痕が認められる。径1.5cm、高さ12.4cm。(4)はやや厚手の板に顔を横向きに鼻と口を粗く削り出す。幅1.4cm、厚さ0.8cm、高さ8.8cm。(5・6)は薄板を削り、顔の横向きを表わす。どちらも頭部に被りものがみられる。(6)は首と胴部に小さい釘孔が認められ、表現が丁寧である。

陽物形(7・8)　板材に切り込みを入れ、陽物を横方向から表したもの。(7)はやや厚手の板材を用い、粗く削る。(8)は薄板を用いる。

舟形(9・10)　舟形は船首を尖らせ、船尾を直線に切り落とし、船槽をくり抜いて作ったもの。(10)は底部を丸く削り、丸木船のように仕上げている。船首には縦に小孔が穿たれている。(9)

は板材の上部を刳り込み船槽を作る。

刀形（11 ～ 21）　薄板を削って刀を表したもの。刃は基部が破損しているものが多いが、刀身のみを表現し、柄まで表した刀はない。（13）と（16）は刀の刃の先端が三角形で丸みのないカマス切っ先で、（16）は刃を写実的に表わす。（11 ～ 16・18・19・21）は刀身を直刀に表わすが、（17・20）は刀身に反りがみられ、（17）は基部先端を斜めに切り落とす。（11）は刃の先端から1/3 のところに切り込みを入れている。

剣形（22 ～ 26）　板材の一端の両側を削って切っ先を山形に尖らすもので、刀形に比べ長さが短い。（25・26）は大型で柄を表さない。（22 ～ 24）は（25・26）より一回り小型で、基部を刃に比べ細くし柄を表わす。（22）は先端を粗く削り、切っ先を表現し、柄の境にも切り込みを入れる。柄は欠損する。

刀形の鞘（27 ～ 33）　鞘は板状の 2 枚からなり、やや厚めの板を刀子が入るように刳り貫き、中を空洞にして 2 枚を合わせたものである。2 枚合わせる時に、金具か紐でしばりつけたような痕跡を残すものもある。刳り貫きの形は先端を刀子の先のように尖らすもの（27・28・30・31）と、先端を平らにしたもの（29・32・33）がある。N 区では刀子が 1 点（図 47）出土してお

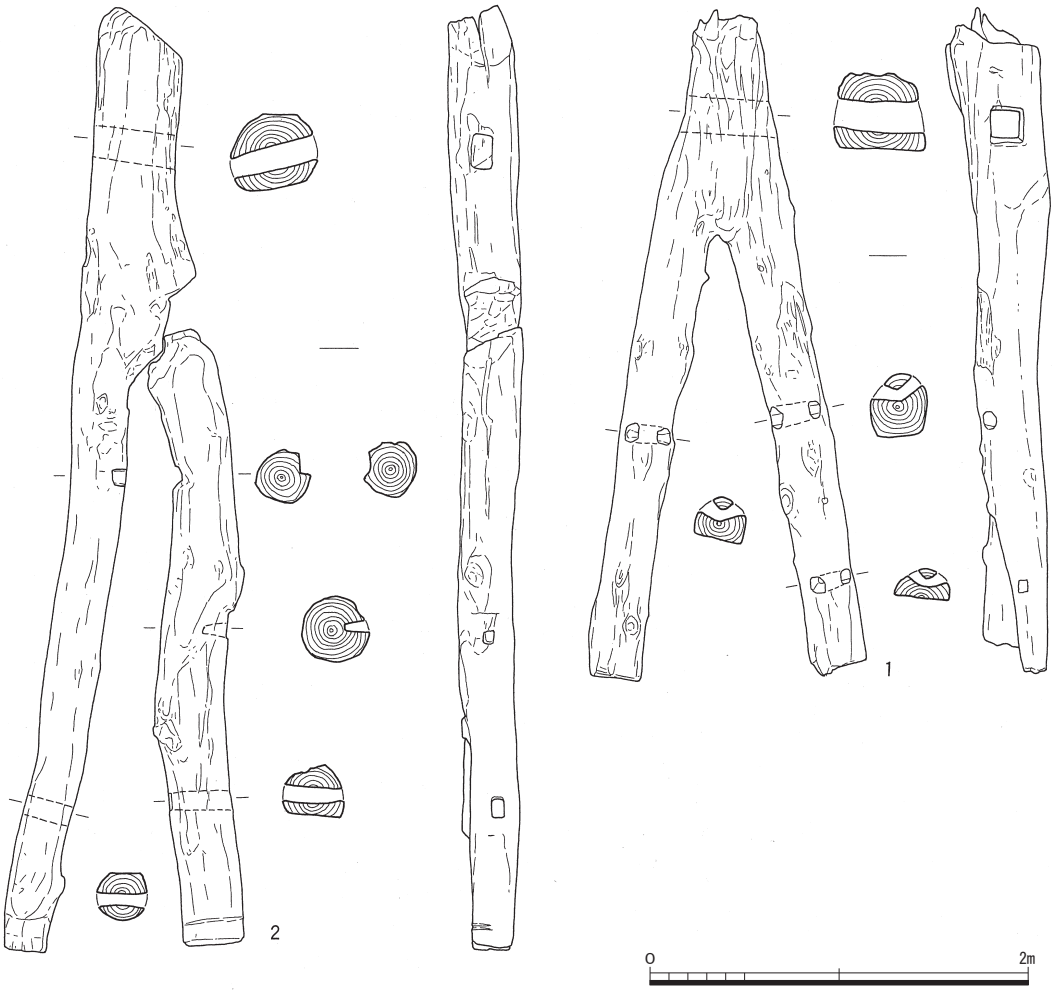


図 36　N 区出土木製品実測図（1）（1:40）

り、鞘の中身は金属製刀子が入っていたものと木製の刀子形が入っていたものがあると思われるが、その区別は付かない。

斎串（33 ～ 44）　古代の斎串は薄板の端を尖らせ、頭部を圭頭状にし、側面に切り込みを入れたものが一般的である。当遺跡の出土例と比べると時代と木製品の形状がやや異なるが、先端を鋭く尖らせているため、ここでは斎串とする。（34）は板材の両端を側面から斜めに切り落としたもの。（37・40）は両端を両側面から削ったもの。（41・44）は頭部を圭頭状にし、（44）は他に比べて幅広である。（42）は頭部を丸くえぐり取り、（43）は破損しているが、頭部に孔を穿つ。（35・36・38・39）は細身で頭部を平にしたもので、柱状である。（38・39）はやや短い。

琴柱形（45）　琴柱形としたが、上部の弦受けの溝はなく尖っているため、琴柱に用いることはできない。胸部は湾曲しながら末広がりとなり、先端は尖る。

鳴鏑（46）　木片をイチジク形に削り、側面に 1 個の孔を開けたもの。上方に鏃の茎孔がある。茎孔は貫通していない。

糸巻き状木器（47）　糸巻きは一般的に枠木とそれを固定する横木・横木に通す軸棒とからなる。（47）は横木に似るが軸棒の孔が小さいこと、枠木と連結部の釘孔の位置が異なるため、糸巻きではなく祭祀に用いるものであろう。

傘轆鑢（48）　厚みのある円盤状を呈し、中央に柄を通す孔、下方外側に骨材を差し込む台形を呈する繰り込みを十六箇所に設ける。骨材を取り付ける小孔はすべて破損している。横方向から柄を固定させる目的の孔があるため、動きのある手元ではなく天に用いたものであろう。

ⅲ　遊戯具

木球（49）　有心の木片を粗く削って、扁平な球状に成形したもの。草戸千軒町遺跡（『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅰ－北部地域北半部の調査－』広島県教育委員会　1993 年）では毬として報告されている。

ⅳ　服飾具

下駄（50）　一木から台と歯を造り出したものである。三箇所に鼻緒の孔を開けている。前壺は前歯の前方中央寄りに一箇所、後壺は後歯の前側に二箇所に孔を開けている。台は長方形を呈し、四隅の角を落とす。歯の幅は台よりもやや広い。歯には前方がすり減る使用痕が認められるが台の上面には使用痕は認められない

ⅴ　農具

木錘（51）　方柱の材の中央に刻みを付け細くして、紐を結び付けるようにしたもの。材の一端は粗く削るが、反対側の一側面から丸みを付け削る。

ⅵ　部材

支脚（55）　接地面は方形で、上方へいくにしたがって内へ削り込み、上部は内側に段を付け薄くし､天板との接合部とする。面取りを施して仕上げる。天板との接合部には釘孔はみられず、ほぞ孔に差し込んで結合していたと思われる。

格子桟（52 ～ 54）　格子の桟になると思われる部品が多く出土した。いずれも小さく割れてい

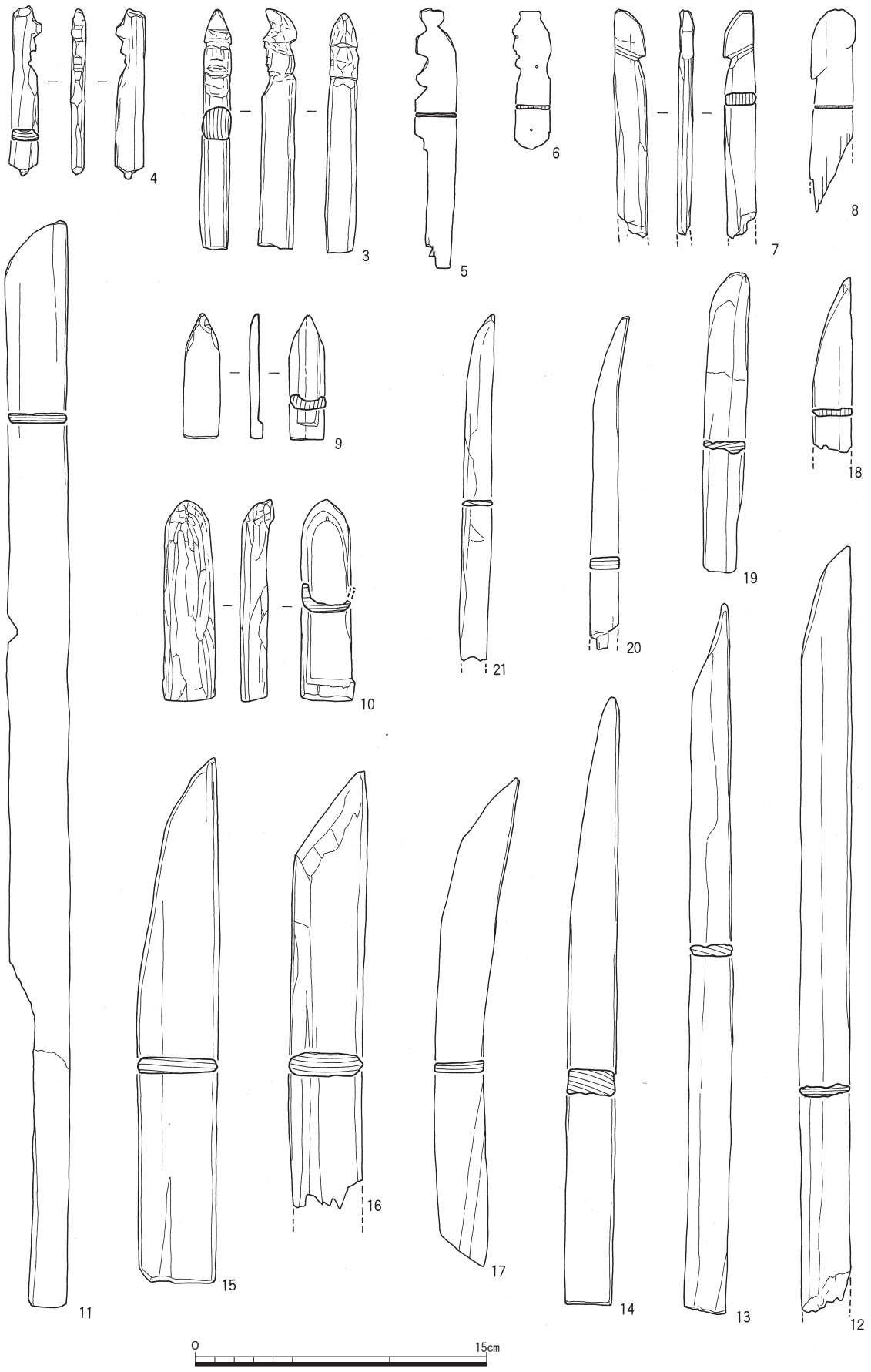


図 37　N 区出土木製品 (2) (1:3)

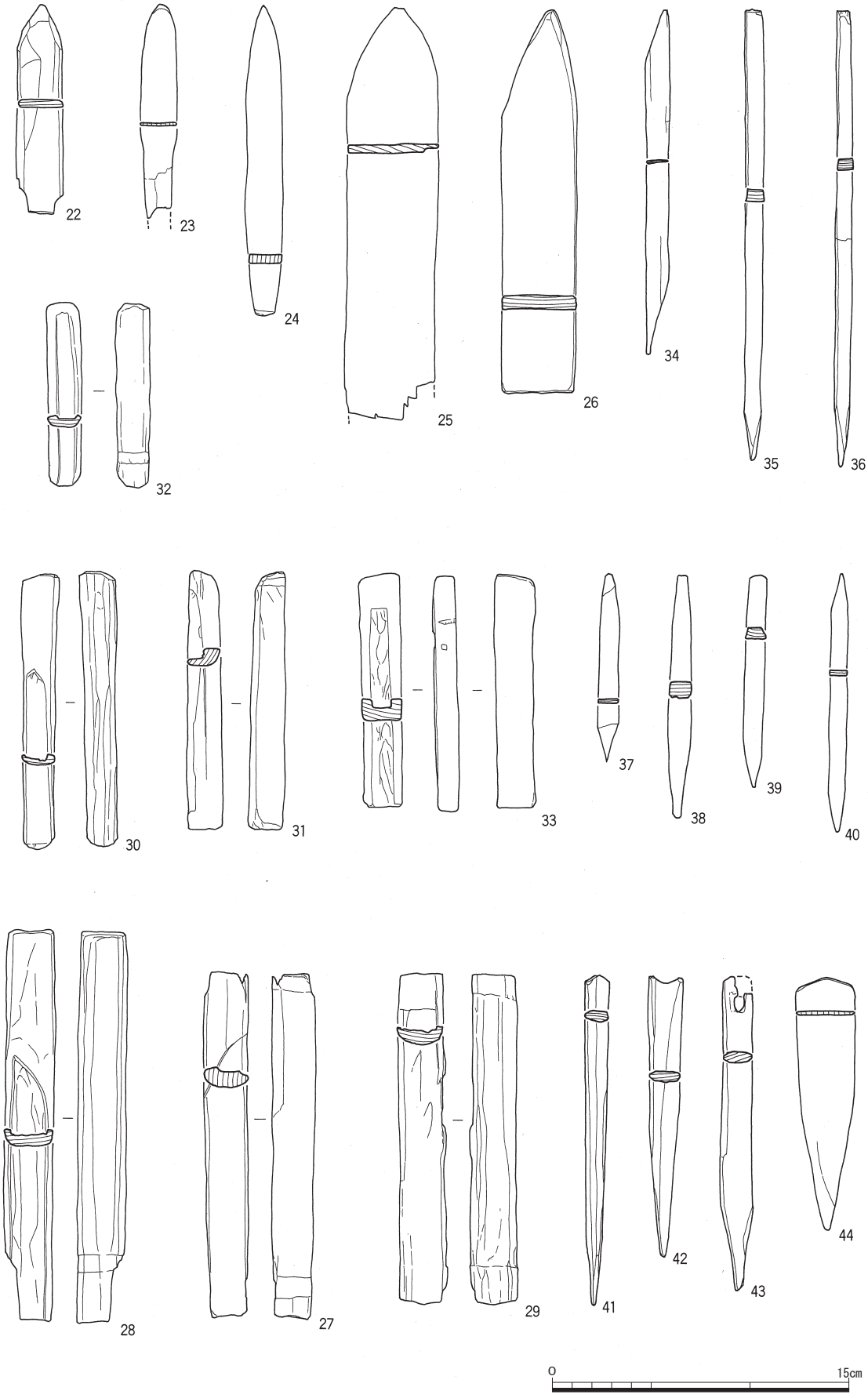


図 38　N 区出土木製品実測図 (3)(1:3)

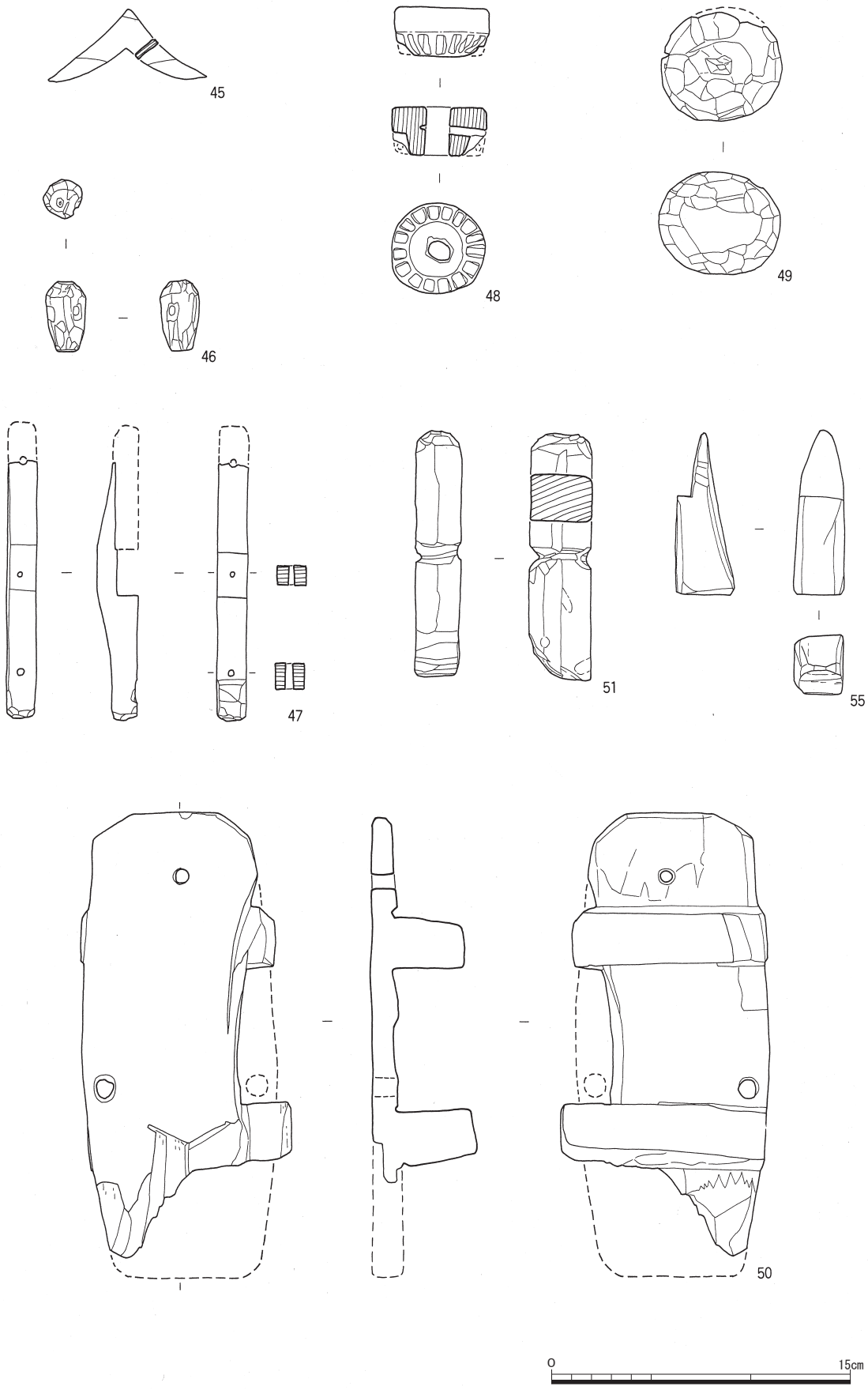


図 39　N 区出土木製品実測図 (4)(1:3)

るが、同形状を示し、2個が対となる仕口の刳り込みがみられ、また結合部では木釘を打っている。格子の端が残っていないため、枠の形態と大きさは不明である。格子窓の桟に用いたのであろうか。

台脚（56～63）　他の部材と組み合う台脚と考えられるが、組み合う部材が不明なため、全体の形状は明らかではない。細長い板材を横にして底面中央を刳り込み、両側を高くして脚の接地面とする。上部中央には他の部材と組み合うための仕口の刳り込みが設けられているものとないものがある。また、上部に木釘の小孔があるものとないものがある。木釘はそのまま折れて孔に残っているものが多い。（56・57・62）は両側の脚部に切り込みを入れ、装飾とする。（57）は木釘孔が両側に三箇所ずつ、（56・58）が一箇所ずつ、（59）は中央にも孔があり、計三箇所の木釘孔がある。（57・59・61）は仕口の刳り込みがない。（62・63）は台脚が破損し脚部だけが割れて残っている。

ⅶ　食事具

箸（64～70）　箸は多量に出土したが長さの判る完成品のみ取り上げる。大半の箸の断面が正円ではなく、扁平であるため、板状の木片を割って棒状に削って成形している。すべて両端を尖らした箸である。削りは粗雑で、使用痕は認められず、一時的な使用と思われる。長さはいろいろで20.2～28.9cm、幅0.7～1.0cm、厚さ0.5～0.6cm。22.0～23.0cmの長さの箸がもっとも多い。

杓子形木器　（71）　身の先縁を半円形に作り、柄が幅広である。身の片面は丁寧に削る。柄の長さと身の幅は欠けて計測できない。身の幅5.7cm（復原）、柄の幅2.7cm（復原）、厚さは0.4cm。匙形木器（72）　杓子形木器より小さく身は長方形を呈する。身の先縁を一直線にし、片面から削り先端を尖らす。

ⅷ　容器

漆器椀（73～75）　（73）は小椀で口径6.7cm、器高推定3cm（高台欠損）。外面は黒漆、内面は朱漆のため文様は判りがたいが、内外面共に草花文を描いているようである。底部には幅の狭い高台が付くが、高さは不明。（74）は内外面とも黒漆で、文様を朱漆で描く。文様は円形文の周囲に圏線を3重に描く単純なものである。（75）は内外面ともに黒漆を塗るが文様はみられない。底部外面にわずかに朱漆を塗るところがある。高台はないが、やや突出するもので、底部内面は凹む。椀ではなく他の器形かもしれない。これらの他に漆を塗った部材が7点ある。いろいろな加工がみられるが、どのような部材のどの部分にあたるかは判断できない。

曲物底板・蓋板（76～84）　曲物の底板には確定できないが、完形の側板とほぼ同じ直径のものや類似の円形版を曲物の底板（80～84）とした。蓋板（76～79）は円板状で中央に紐孔を開けたもの。（78）は中央にやや大きな孔を開け、周縁に沿っても小さな釘孔がある。

曲物（85～89）　薄板を円筒形に曲げ、合わせ目を綴じて、側板と底板を接合して容器としたものである。当遺跡では側板・底板が別々に出土している。側板は完全に一周しているもの2点、割れているもの4点が出土した。（85）は厚さ0.1cmの薄板を2周させ、重ね合わせ部分で、縦

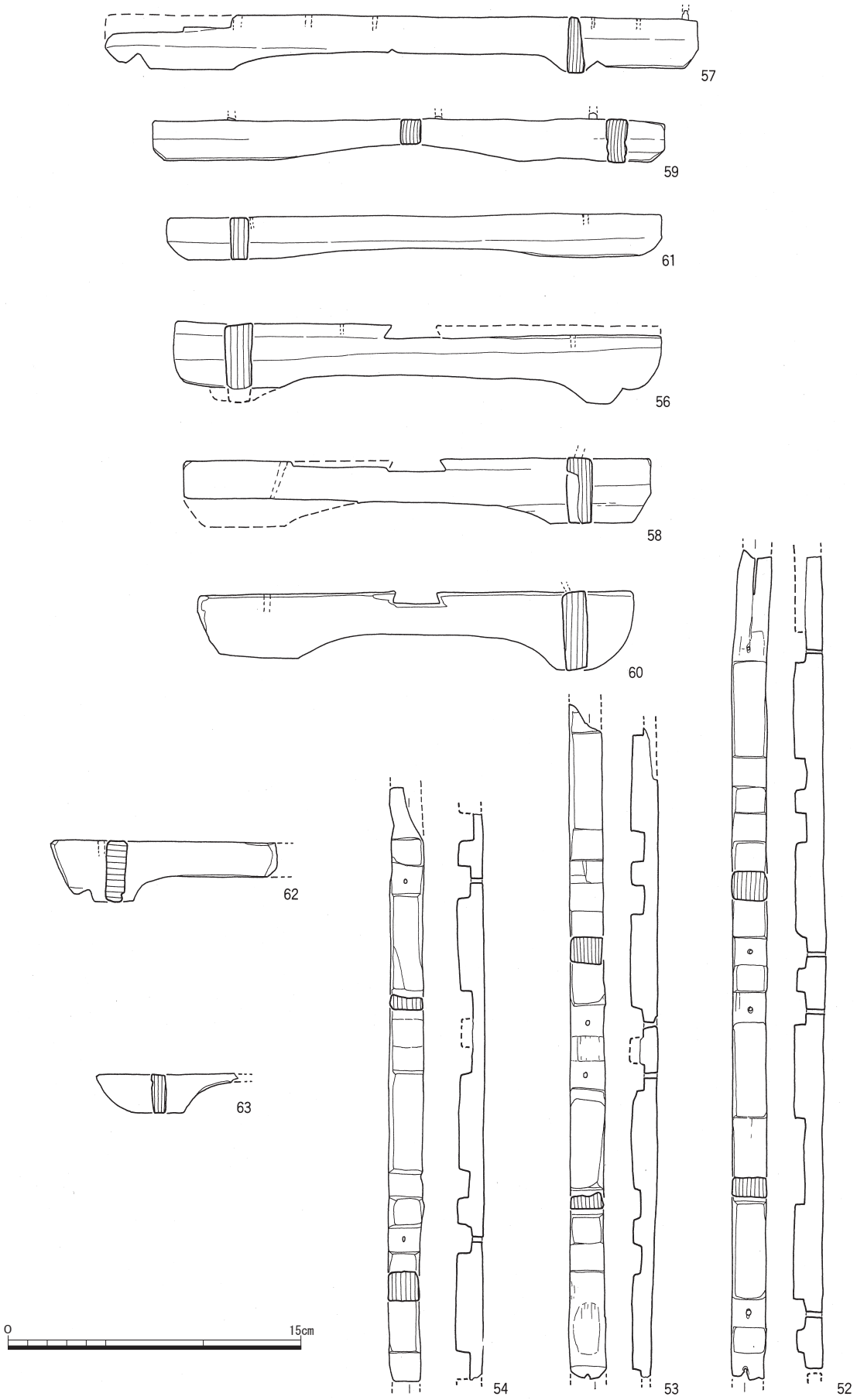


図 40　N 区出土木製品実測図 (5) (1:3)

に六箇所の切り目を入れ、樺紐を通して綴じ合わせている。大形の曲物の場合側板の内側には、曲げやすいようにケビキを入れているが、当遺跡の曲物にはケビキは入れていない。

(86) は (85) とほぼ同様の大きさで薄板を 2 重にした後綴じ合わせている。切り目は四箇所、他の 3 点は割れているため、直径は出せないが綴じ合わせ方に共通点がある。(89) は (85) と同じく、側板を 2 重にし、綴じ方も同じである。(87) の側板は他に比べやや厚く (0.3cm)、1 重で綴じ合わせている。

折敷 (90 ～ 103)　折敷は隅を落とした正方形の薄板に幅の狭い側板を縦に置き、桜皮で結び付けたもので、土器などの品物を上に乗せる。薄い板のため完形品は少なく、ほとんどが小さく割れているが、一辺の長さが計測できるものを取り出し、大きさによって分類すると、大・中・小の三種に分けることができる。大は 12.6 ～ 13.6cm で 15 点、中が 10.7 ～ 11.2cm で 2 点、小が 9.2 ～ 10.0cm で 10 点の出土である。厚さはいずれも 0.1 ～ 0.2cm の間に収まる。

側板は圧痕がみられるものがあるが、ほとんどが欠落しており、綴じた小孔が残っているだけである。綴じ孔は大が三箇所に設けるものが多い。周縁の中央に 1 対を開け、対面の両側に 1 対ずつを設ける。中と小は 2 対か 1 対の綴じ孔を開けている。側板の明瞭な圧痕を残す折敷が 6 枚ある。側板の高さは不明であるが、底板とほぼ同じ厚さの圧痕を残しているため、底板と同じ材料で幅の狭い側板を巡らし、樺紐で結び付けたものと思われる。

平安時代まで遡る折敷は底板も厚く、側板も丈夫な曲物を用いているが、当遺跡では底板側板とも非常に薄い材を用い、大きさも小形化し、非実用的で何らかの儀式で使用するもののように思える。

ix　用途不明品

(104) は板の全長の 1/3 程を木口から薄く裂き広げ、箒のように加工している。祭祀遺物と思われる。

(105) は断面が正円形で一部を太くし、丁寧に削っている。折れているが、木口以外は赤色顔料を塗布している。

(107 ～ 114)　は薄い板をさまざまな形に加工している。(107) は衣紋かけのような形状を呈し、片側に他の部材と組み合う仕口の痕跡がある。(111) は破損しているため全体の形状は不明であるが、釘穴らしき小孔が三箇所に認められ、そのうち二箇所は板材の木口に開いている。(114) には釘穴が認められる。

(115) は鉈状を呈し、一箇所に孔がある。(116) は方形の板で、四方と中心に小孔があり、釘孔と思われる。小孔は片方が大きく、他の部材に木釘で打ち付けてあったものと思われる。

(123・126・127) は方柱状の材にほぞ孔などを穿ち、他の部材と組み合う木製品である。(123・126) は側面にほぞ孔を穿ち、(123) は途中で止まるが、(126) は貫通する。

(124・125) は棒状の材から加工したもの。(124) は円柱状を半截した形状で、片方の木口近くに紐を巻き付けるような切り込みがある。(125) は棒状の材を円形に削り、両側に孔を穿つ。紐か何かを取り付けたものであろうか。

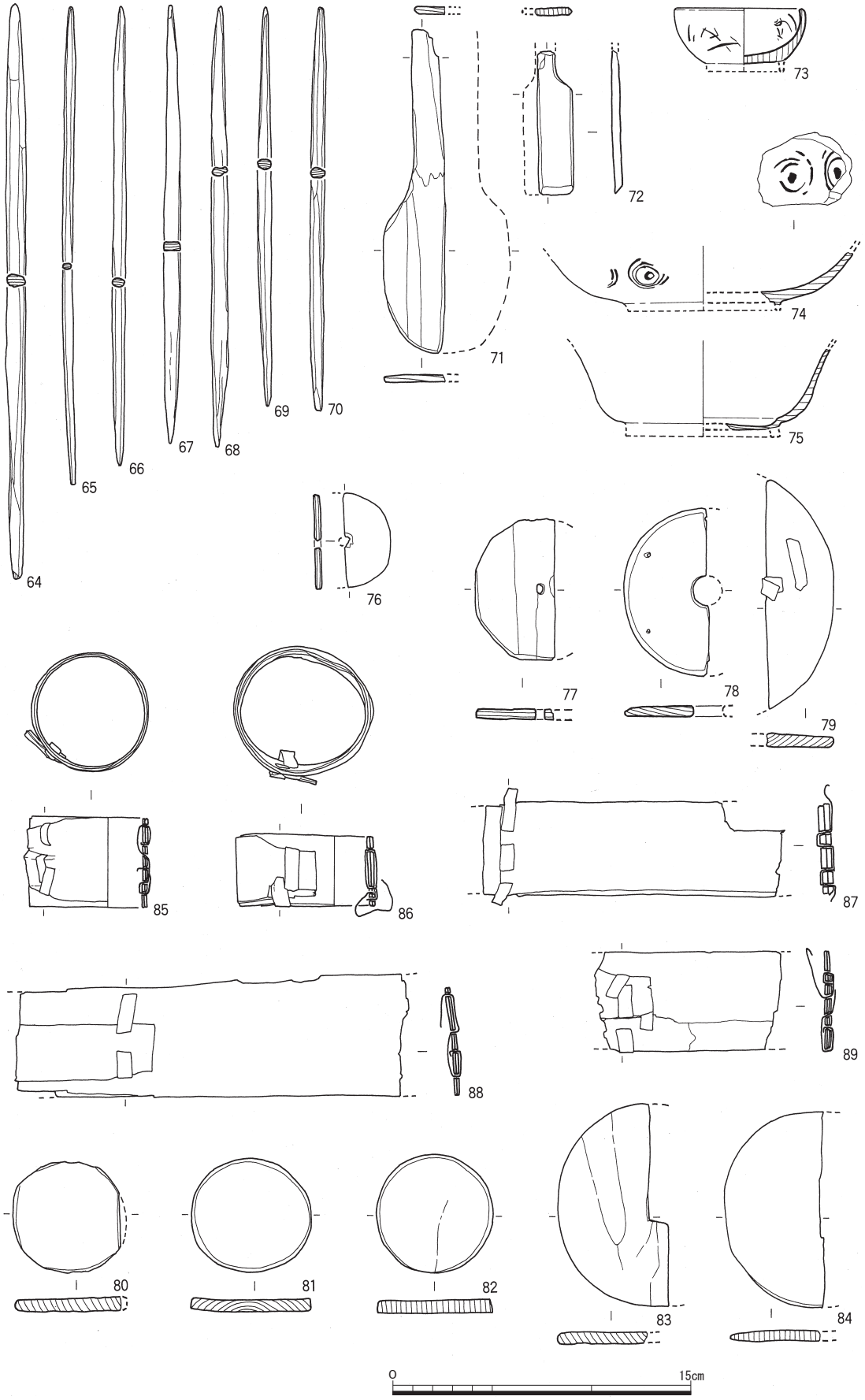


図 41　N 区出土木製品実測図 (6) (1:3)

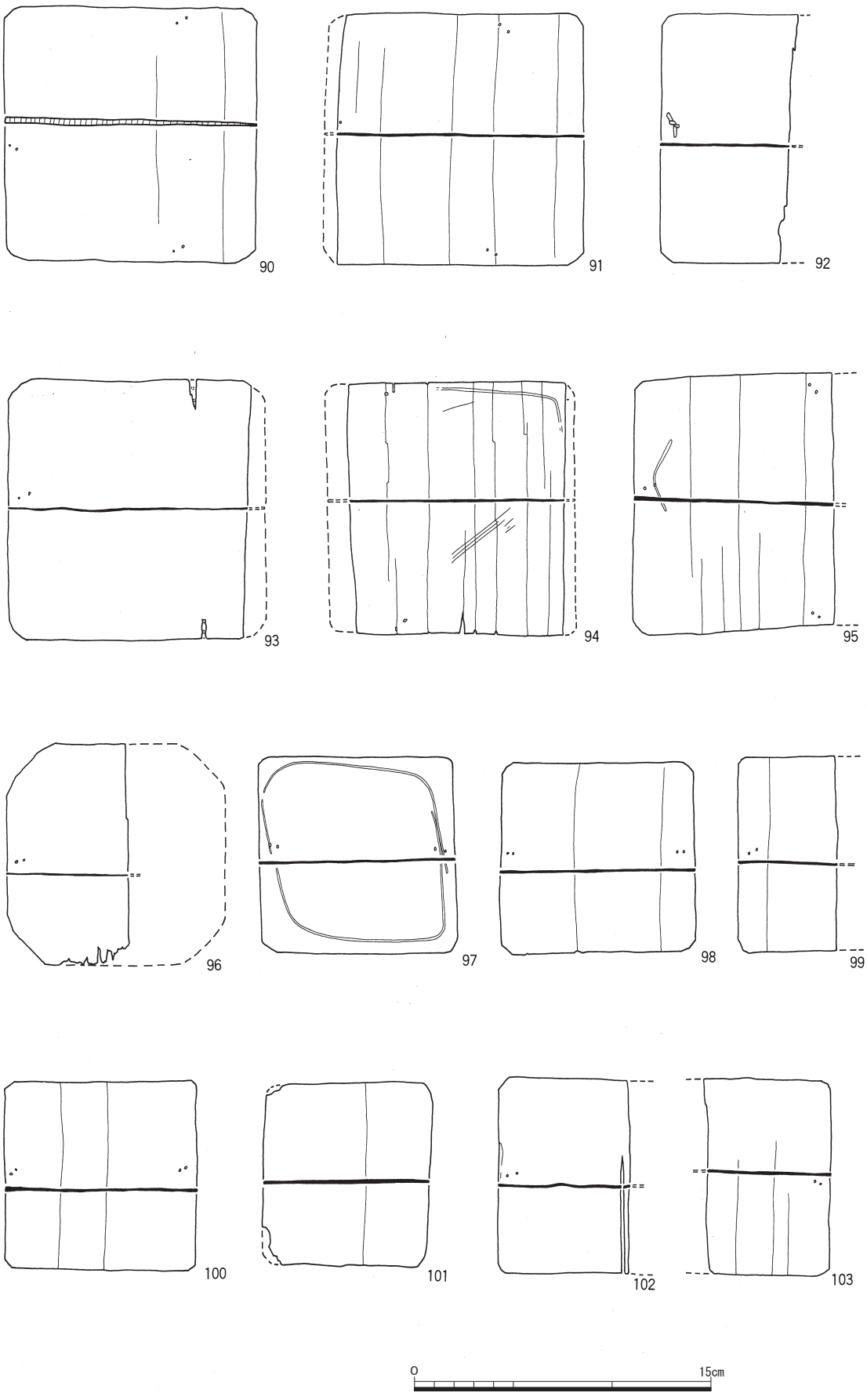


図 42　N 区出土木製品実測図 (7)(1:3)

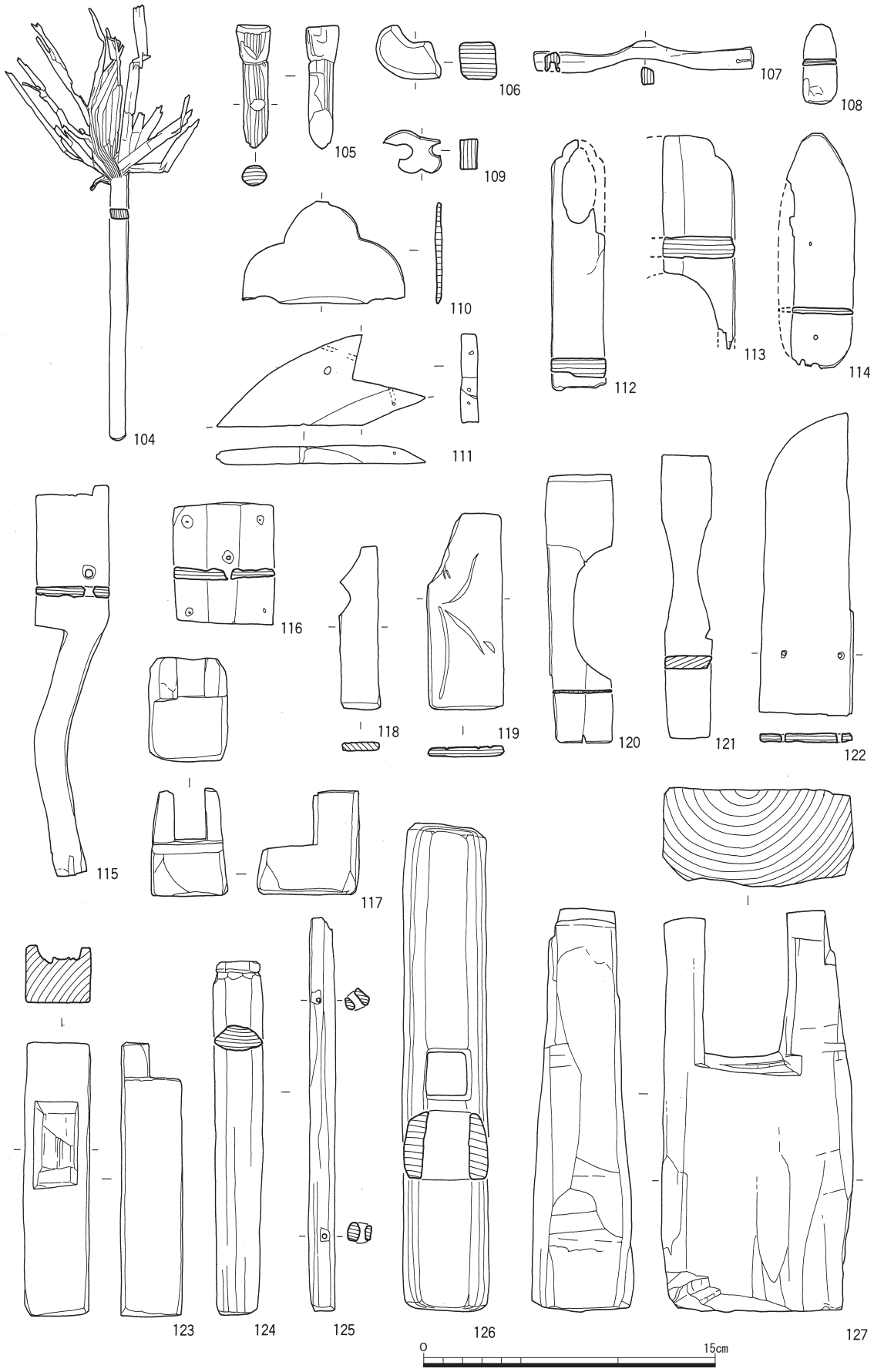


図 43　N 区出土木製品実測図 (8) (1:3)

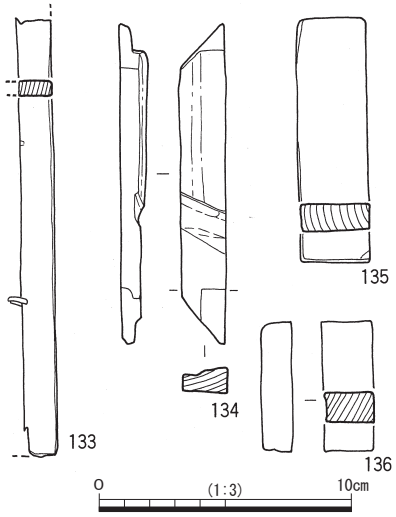


図44　N区出土漆製品実測図

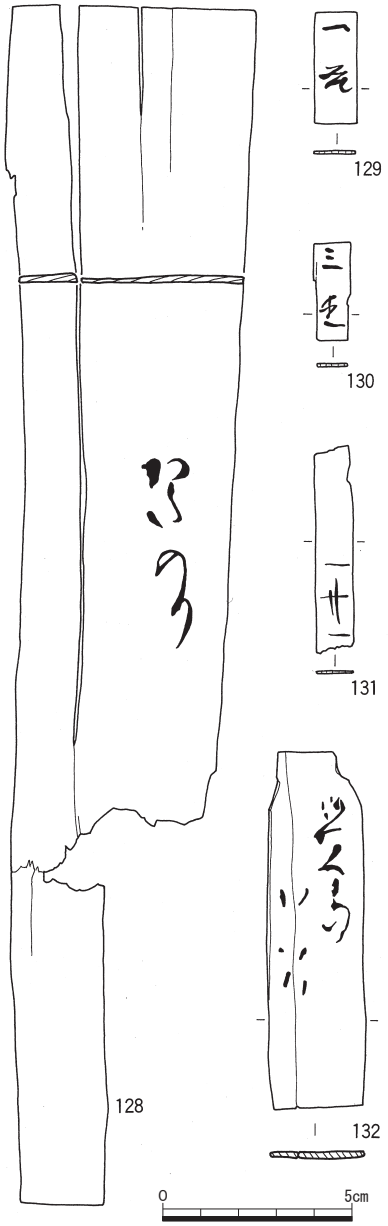


図 45　N 区出土墨書板実測図 (1:2)

x　漆製品

(133 ～ 136) はいずれも角材に黒漆を塗ったもので、他の部材と組み合う製品と思われるが、単一ではその用途は不明。(133) は樺紐で留めた痕跡が残る。(134) は端部を斜めに落とし、斜めの溝を設ける。

xi　墨書板

薄い板に墨書したものが 3 点、やや厚手の板にあるものが 2 点ある。(129・130) は大きさが類似し、(129) が「一花」、(130) が「三重」と読み取れる。類例を探すと、一乗谷朝倉氏遺跡 (『特別史跡一乗谷　朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅰ－朝倉館跡の調査－』福井県教育委員会　1979 年) では、表裏に「花」「ラ」、「春」「一」、「秋」「一」、「秋」「二」、「秋」「ウ」、「花」「叶」とそれぞれ墨書した札が出土している。この札を聞香や茶会などの席で遊戯に用いられた札、香札と推定されている。

(129・130) は裏面に墨書きがないなど一致しないが、形状と大きさが近似し、一乗谷朝倉氏遺跡と同様な用い方をしたと考えられる。

(131) は線と記号を描いたようにみえ、物差しの可能性もある。線と線の間隔はほぼ 1 寸である。(132) は上部に側面からの刳り込みが付けられ、付け札のような形状を呈しているが文字は判読しがたい。(128) はもっとも大きく何らかの部材に墨書したと思われるが、判読できない。

(2)S 区出土木製品 (図 46　写真図版 54)

S 区出土した仏頭と燈台をここに取り上げる。

(137) は仏頭で顔を欠損するが、後頭部から背中にかけての部品である。頭部には毛髪を表わし、頂部で髪を丸くまとめ、刻みの付いた髪飾りを表している。首から上は漆を塗るが、下は粗い調整のままなので、胴部に差し込むと思われる。首から下は内面を刳り込み空洞にしている。頭髪の形状より観音菩薩と思われる。

(138) は燈台の受け皿で、わずかに上方へ内湾する円盤を呈し、中央に軸の方形ほぞ孔を穿つ。黒漆を塗る。

4　その他

(1) 布製品 (写真図版 55)

N 区から布の断片が出土している (139・140)。いずれも小片のためどのような製品かは不明である。

(2) 礎石 (図 47)

花崗岩の礎石が 2 点立会調査中に出土した。(7) は花崗岩を縦 28cm、横 34cm、高さ 21cm の立方体に粗く加工した後、その上面を平らにし、正方形 (22.0 × 22.5cm) の隅を落として面取りした八角形を高さ 5cm ほど造り出したものである。面取りの幅は 3 ～ 4cm。地中に埋まる礎石の下半は未調整であるが、上部は丁寧に調整している。

(6) も (7) と同様に、花崗岩の上面を面取りした八角形を造り出したもの。縦 25cm、横 38cm、高さ 21cm、造り出し部は縦 21.5cm、横 23.3cm、面取り幅 4 ～ 5cm、高さ 3.5cm を測る。(6) は側縁部が一部欠損している。両方とも上面の造り出し部が 7 寸から 8 寸の間に収まるため、その上に乗る柱は 5 寸あるいは 6 寸と思われる。

(3) 貨銭 (図 47)

貨銭の出土は少なく、「大定通寶」「淳熙元寶」「寛永通寶」などがある。「大定通寶」と「淳熙元寶」は南宋銭で初鋳造年がいずれも 1174 年である。「大定通寶」は J 区石組み上層、「淳熙元寶」は I 区北半部第 2 層から出土した。「寛永通寶」はもっと多く、4 枚出土した。(3) は裏面に「文」、(4) は裏面に水波紋を描き、(3) が I 区北東拡張部第 1 層、(4) が I 区北半東拡張部上層から出土した。

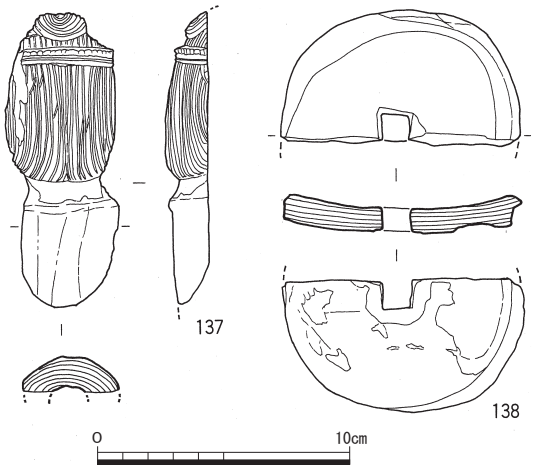


図 46　S 区出土木製品実測図 (1:3)

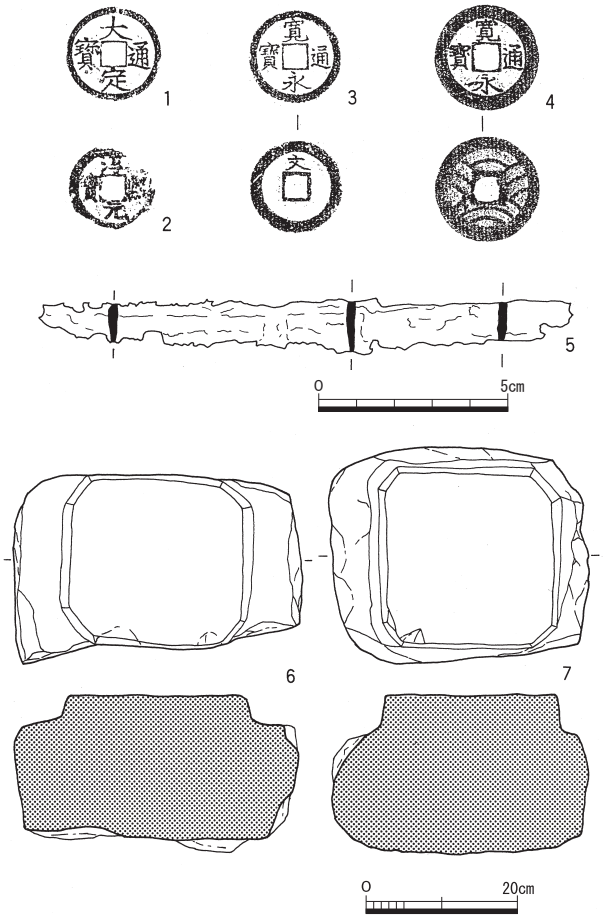


図 47　銭貨拓影図、刀子・礎石実測図 (1:2)(1:10)

(4) 刀子 (図 47)

腐食が進みほとんど原形をとどめていない。わずかに刃の部分が判る程度である。残存長は長さ 14.1cm・幅 1.5cm・厚さ 0.2cm を測る。

第4章　考　　察

1　検出遺構と造営

昭和59年（1988）度から平成6年（1994）度まで5次の発掘調査を行ったが、防災設備に伴う調査のため、幅の狭い調査区が多く、また、遺構が検出されても、多くの拝観者が往来する中での発掘調査であったため、拡張して遺構を追及することが困難な箇所も多く、遺構の性格を理解しにくいこともたびたびであった。したがって、その評価は推定部分の多いことは否めない。

西園寺北山第以前の平安時代に遡る遺構に関しては、遺物の伴う遺構がなく遺跡の性格を論ずることはできない。しかし、瓦や土器など出土遺物の分布からみると、鹿苑寺境内の東半部に少々ながら点々と出土していることが判った。したがって、神祇伯家あるいはそれ以前には境内の東部に何らかの別業のような施設があったことを予想させる。

次に、検出した遺構を文献史料に照らし合わせ、西園寺北山第・北山殿・鹿苑寺に分けて述べる。

(1) 西園寺北山第

西園寺北山第の遺構も平安時代と同じく、出土遺物から限定できる遺構は検出できなかった。ただし、遺物の分布状況や遺跡の立地からみて、西園寺の位置を類推することは可能であろう。鎌倉時代の瓦は主に0区周辺と安民沢北方の山林内より採集されている。したがって、安民沢は西園寺時代に造られた園地と考えても差し支えないであろう。安民沢は南側の堤に後世の改良がみられるものの、東北方向からの水の取り入れ口に小さいながらも滝組を設け、なだらかな汀を持ち、中島や景石の配置など平安時代の浄土式庭園の様相を色濃く残している。また安民沢西方に人工的に開いたと思われる平坦地がみられ、さらに安民沢北方の杉林内にも、人工的な土塁や平坦地と観察できる地形が広がり、建物群が展開していたことは間違いないであろう。

鎌倉時代の土器がわずかながら0区の調査で出土し、0区とB区に広がる平坦地も安民沢の造成と同時に行われたのではなかろうか。J区で検出した石組み遺構は、安民沢から水を引き滝組として西園寺時代に造られた可能性がある。

文献史料をみると、『増鏡』[註1]には次のように西園寺北山第の様子が記されており、平安時代後期に栄華を誇った藤原道長の法成寺を凌ぐほどの規模であったらしい。

> 本堂は西園寺、本尊の如来まことに妙なる御姿、生身もかくやと、いつくしうあらはされ給へり。又、善積院は薬師、功徳蔵院は地蔵菩薩にてをはす。池のほとりに妙音堂、滝のもとには不動尊。この不動は、津の国より生身の明王、蓑笠うち奉りて、さし歩みてをはしたりき。その蓑笠は宝蔵にこめて、卅三年に一度出ださるとぞうけたまはる。石橋の上には五大堂。成就心院といふは愛染王の座さまさぬ秘法とり行なはせらる。供僧も紅梅の衣、袈裟数珠の絲まで、同じ色にて侍める。又、法水院、化水院、無量光院とかやとて、来迎の気色、

弥陀如来・廿五の菩薩、虚空に現じ給へる御姿も侍めり。北の寝殿にぞ大臣は住み給。

この記事によると本堂が西園寺と呼ばれ、池があってほとりに妙音堂、滝の麓に不動堂、石橋の近くに五大堂、北部に寝殿が配置されていることが判る。現在の池は金閣前面の鏡湖池とその上段に位置する安民沢の二つあり、部分的な改造は行われてはいるものの、発掘調査からみて鎌倉時代まで遡ることは間違いないであろう。妙音堂がどちらの池のほとりかは判断できないが、不動堂は唯一現存している石不動と対応するものであろうか。しかし、赤松俊秀氏は、『蔭涼軒日録』（永享十二年四月九日）に不動堂の記事がみえ、当時も石不動と呼ばれ鹿苑寺とは別な住持がいたことから、不動堂と石不動とは別物[註2]とされている。

西園寺北山第には上皇と天皇の行幸の記事[註3]が多数みられる。後深草上皇と伏見天皇が1回、後伏見上皇と花園天皇が4回、後醍醐天皇と後光厳天皇が1回ずつ行幸している。行幸記事で建物が描かれている箇所をみると、北第、南第、釣殿、無量光院、妙音堂、大御堂、法水院、成願心院、二階、寝殿、園池では池と中島が表されている。『増鏡』と比較すると、無量光院、妙音堂、法水院、寝殿が一致している。

花園天皇の行幸（『花園天皇宸記』元享二年六月十一日の条）では南第と北第があり、大きく二つの地域に分けられていたらしい。建物がどのように配されていたかは判らないが、南第は表向き（ハレ）、北第は奥向き（ケ）に用いられたようである。南第は地形の関係から現在の鏡湖池周辺の金閣、方丈、庫裏に、北第は安民沢とその北方一帯の杉林内に推定できる。北第は室町時代の足利義満には利用されなかったようで、現在樹木に覆われている。

園地については藤原定家が『明月記』[註4]で北山第へ嘉禄元年（1225）正月訪れた時の次のような記載がある。

十四日、遥漢快霽、巳時許中将相共向北山、見勝地景趣、体新仏尊容、毎事以今案被営作、毎物珍重、四十五尺曝布瀧碧、瑠璃池水、又泉石之清澄、実無比類、未時許帰慮、

ここで注目されるのは、45尺（13.6m）の瀑布滝があることである。現在は龍門瀑という高さ1.5mほどの滝があるが、中根金作氏は石不動の北側に切り立った岩盤の崖を滝跡と推定[註5]された。滝へ導く水路跡も想定されている。この滝は「滝のもとには不動尊」（『増鏡』）から現在の石不動と当時の不動堂が同じものとした考えからきたものであろう。川勝政太郎氏も北山石不動を西園寺以来の不動堂と推定[註6]されている。

これに対して、不動堂は別々の建物であるという赤松俊秀氏の推定[註7]に従って、また滝の高さが45尺あるのではなく、瀑布のような遣水と滝を合わせて長さが45尺あるとすると、現在の竜門瀑とその遣水をあわせたものとも考えられる。あるいは安民沢浚渫の際検出した木樋の方から水を引き、J区で検出した石組み遺構（滝組）へ落としていたと考え、導水路の長さも含めて『明月記』の45尺の滝と想定することもできる。今回その痕跡は確認できなかったが、B・D区で検出した室町時代の建物遺構の前身に、不動堂が建てられていたと考えられる。

(2) 北山殿

検出した室町時代の建築遺構であるが、建物は7棟を検出した。B区で2棟（建物18・建物19)、D区（建物20)・S区（建物22)・W4区（建物23)・Y区（建物24)・C区（建物47）で1棟ずつ検出した。また建物18と建物20との間に南北方向の柱列を認め、建物をつなぐ廊（廊21）と考えた。

建物18～20と廊21は柱列の方向が金閣と一致するため、現在の金閣が当時の位置そのままとして金閣と密接な関連のある建物と考えることができる。金閣北側には天鏡閣があったとされ、現在松林となっている平地に天鏡閣の建つスペースは十分確保できる。そのため電気探査によって天鏡閣の跡を調査したが、明確な建物跡は特定できなかった。

北山殿は全盛期には北御所・南御所・崇賢門院御所から成り立っていた[註8]。後小松天皇が行幸した時の『北山殿行幸記[註9]』（応永十五年三月十二日）に位置関係が述べられている。

> …俄に北山院へ行幸あり。かねてもさたなかりし事なれば、ぐぶの人々をももよほされず。御道のほどもちかければ、よう輿などまでもなくて、えんだうをしきて、四足のもんより南のいしばしをくだらせおはしまして南の御所になる。…
>
> 夜に入て又崇賢門院へも行幸あり。この御所よりさし続き、やがてみなみなれば、これもえむだうにてなる。

北御所から筵道[註10]を敷いて四脚門から南の石階を降りると南御所に着く。南御所は義満夫人日野康子の居所であった。さらに南へ続き、崇賢門院となる。崇賢門院は後光厳院の典侍で、後円融院の生母、後小松天皇の祖母にあたり、義満の生母紀良子と姉妹の関係にある。北御所が北山殿の中枢部で現在の鹿苑寺境内を占め、その南方に南御所と崇賢門院御所があったのであろう。

『北山殿行幸記』に出てくる施設は、惣門、四脚門、中門、寝殿、南殿、釣殿、小御所、常御所などであるが、これらは北御所にあった建物であろう。行幸の順路をみると

> 御道は左衛門ぢん代より北へ、一条を西へ、大宮を北へ、きた大路よりたかはしを西へ、北山どのの惣門にいたるとぞきこへし。

とあり、惣門の位置が問題となる。川上　貢氏は現在でも南方に衣笠総門町という地名が残っていることから、このあたりに惣門と北山殿の南限を推定[註11]している。衣笠総門町は現鹿苑寺の境内から南方200mに位置し、さらに400mほど東に衣笠高橋町がある。おそらくこの付近の紙屋川（天神川）に高橋が架けられていたのだろう。まさに行幸の「たかはしを西へ、北山どのの惣門にいたる」という記述に一致する。現在は東から鹿苑寺へ入るが、当時は南が正面だったのである。惣門に入ると行幸の記事からみて、南から崇賢門院、南御所、北御所の順に並んでいたのであろう。北御所の四脚門は東向きに門をかまえ、現在の進入路に踏襲されていることは考えられる。

中門、寝殿は地形的にみて、現在の方丈、書院、庫裏のある場所に推定される。寝殿は後小松天皇の行幸前と行幸後の二つあり、行幸前の寝殿について『門葉記』に指図が残され、中門廊、中門、殿上、公家座などが附属していた。具体的な復元は川上　貢氏の研究[註12]がある。寝殿の規模

は桁行 7 間梁行 5 間に推定されている。

建物の場所と移築についての記述としては、『臥雲日件録抜尤』文安五年（1448）八月十九日の記事にみえる最一検校の話がある。

> 今寺西南、有護摩堂、東有懺法堂、今為等持寺宗鏡堂者是也、懺法堂東、有紫宸殿、今為南禅院者是也、紫宸殿東、有公卿間、又謂之天上間、今為建仁方丈者是也、舎利殿北、有天鏡閣、複道相通、往来者似歩虚、閣北有泉殿、々今則廃牟、閣曾為南禅方丈閣、而去歳回禄為灰燼、可惜、又会所東北山上、有看雪亭、内安七佛薬師像、々今在法水院耳、亭則無焉、

この表現を正しい建物配置とすると、寺の西南に護摩堂、東に懺法堂、懺法堂の東に寝殿、寝殿の東に公卿の間（天上の間）、金閣に北側に廊でつながった天鏡閣があって、閣（天鏡閣）の北に泉殿があったこと、付近に会所があってその東北の山上に看雪亭があったことなどが判る。

看雪亭を現在の夕佳亭付近に推定すると、会所はその南西方向にあることになり、今調査で検出した 3 棟の建物（建物 18 ～ 20）のどれかに会所をあてはめることが可能になる。会所は連歌や闘茶など遊興を目的とした寄合の施設で、室礼を伴っていた。応永十五年（1408）の後小松天皇北山殿行幸[註13]では、奥会所が十五間で 3 月 10 日に猿楽道阿弥によって歌舞が演じられ、会所を飾っていた飾り道具のすべてと重宝以下を天皇に献上された。このことから会所は十五間あったことが判る。柱間は合わないが、庭園に隣接した建物 20 を会所に比定しておきたい。

S 区で検出された建物 22 は礎石 1 個のみで対応するものがみつからず、どういう建物かはまったく不明である。礎石には花崗岩を正方形に成形した切り石を用い、また周辺が固く締まった状態で、土間を連想させるものである。中門から中門廊に接続して多数の施設が存在するので、その一部を検出したのであろう。

中心部から離れるが、W4 区で検出し建物 23 も礎石 2 個だけで建物の様相は不明である。しかし、建物を類推する資料として東側の池から出土した多量の瓦がある。金閣周辺から出土した瓦は小型で軒瓦の占める割合が高いため、屋根の甍棟に用いる甍瓦と考えられる。それに比べ、W4 区池 28 の瓦は大型品ばかりで、また丸瓦・平瓦がほとんどであるため、間違いなく本瓦葺き用である。そうすると、具体的な建物は限定できないが、瓦を葺いた建物（御堂）が付近に存在したのだろう。

(3) 鹿苑寺

鹿苑寺になってからの注目すべきことは、N 区池 27 から出土した 2 基の修羅である。修羅は池内に埋められた後、多量の土器類と木製品を含む腐植土層で覆われていた。この土器類は大半が土師器の皿で大きいものから小さなものまで多種ある。池内の出土であるため時期幅は認められるが、現段階の土器編年で 15 世紀中頃が中心である。修羅はこの時期かあるいはそれ以前ということになる。修羅は庭園の景石や大きな建築部材を運搬するために使用する道具であるから、造営あるいは修理・解体の時に用いたことは間違いない。15 世紀の史料をみると、応永二十六年（1419）に北山院（日野康子）の逝去[註14]後、『臥雲日件録抜尤』文安五年（1448）八月十九日の記

事によると、実年代は判らないが建物の移築が行われている。応仁元年（1467）の応仁の乱で堂宇が破壊[註15]され、荒れ果てていたらしい。しかしこの時に修羅を使用することは考えられないので、出土の修羅は15世紀中頃以前に建物移築の際、用いられたのであろう。おそらく景石も運び出されたと思われる。使用後池内に2基並べて池内に沈められたのであろう。大阪府藤井寺市三ツ塚古墳の修羅も古墳の堀から出土し、当遺跡と同様に大小の2基である。この修羅は粘土層内に保存していたとされている。

これまでの修羅の発見例は昭和53年（1978）に藤井寺市三ツ塚古墳[註16]で古墳時代後期の修羅が2基、昭和59年（1984）に京都府福知山市石本遺跡[註17]で古墳時代後期の修羅形木製品が1基、昭和63年（1988）に福島県岩瀬郡長沼町南古館遺跡[註18]で中世の修羅が1基出土している。いずれも頭部には修羅を引くために縄を通す孔を開け、また石本遺跡のミニチュア品以外は、修羅の上に乗せた重量物を固定するために紐か縄をかける孔を体部に数箇所開けている。修羅は樹木の二股を利用し一部加工してY字形を呈する。三塚古墳の修羅には丁寧な細工がみられるものの、その基本的な形状は古墳時代から中世までまったく変化していない。また近世に入っても、慶長十二年（1607）の徳川家康の駿河城築城の様子を描いたとされる『築城図屏風』（名古屋市博物館所蔵）に大石を運搬している絵図がある。巨石に隠れ修羅の全体の様子は窺えないが、やはりY字形の修羅の上に立方体の大石を乗せ、下にはコロを敷き移動させていることが判る。胸部には補強の角材が横にはめ込まれているようである。頭部にも角材をはめ込み、それに縄を巻き付け引いている。

次に茶所にあたる第5次Y区の調査で検出した堀立柱建物24を検討してみる。掘立柱建物の全容を確認したわけではないが、石不動に隣接しているため、不動堂に関係のある遺構であることは間違いないと思われる。

北山石不動については川勝政太郎氏の研究[註19]がある。西園寺北山第の石不動は彫刻の様式から鎌倉時代初期の作として、『増鏡』にみえる不動尊とされた。室町時代から不動堂に参詣する記事がみられるが、現在の不動堂は天正年間に宇喜多秀家が再建した建物といわれ、鹿苑寺境内で今に残る最古の建物である。『洛中洛外図』の町田本（16世紀前半）と上杉本（16世紀中頃）に金閣と石不動が表現されているため、当時の建物配置を考える上で参考となる。石不動は二つとも同じような表現で描かれ、切妻造りの板葺き建物2棟がみられる。それを廊らしき板葺き建物でつないでいる。注目されるのは、左側の建物が舞台造りとなっていることである。図は中央の参道と岩の表現からみて東から描かれていることになり、調査区付近にこの舞台造り建物が位置している。しかし、調査区で検出した柱穴列が舞台造りの一部となるか、決めがたい。次に、17世紀に下がる洛中洛外図をみると、門と入母屋造りの建物が描かれていて、現在の不動堂と同じ配置である。天正年間（1573～1592）に宇喜多秀家が再建したことによって、現状の形になったのであろう。

註

1　「内野の雪」『増鏡』（日本文学大系 87）

2　赤松俊秀氏は「寺史」（『鹿苑』鹿苑寺 1955 年）で「当寺の不動堂は俗に石不動堂と呼ばれているが、寺内にありながら、本坊とは独立して、住持が別にあった。西園寺時代から寺内にある生身の不動堂とは別の存在である。」と述べられている。

3　『花園天皇宸記』（史料大成）文保三年（1319）三月二十七日条、元応元年（1319）十一月九日条、元享二年（1322）五月二十六日条、元享二年六月六日条、元享三年（1323）十一月二十六日条、元享四年（1324）二月二十一日条

4　『明月記』嘉禄元年（1225）正月十四日条

5　中根金作『京都の庭と風土』加島書店　1991 年

6　川勝政太郎「北山石不動とその信仰（上）（下）」『史跡と美術』 1959 年

7　註 2 に同じ

8　北御所・南御所と西園寺北山第の頃呼ばれていた北第・南第は一致しないと思われる。室町時代には北第を使用した痕跡が認められない。

9　『北山殿行幸記』（群書類従帝王部）応永十五年三月八日～二十八日条

10　貴人の通行などのために通路に敷く莚の道。したがって、短い距離と考えてよい。

11　『日本中世住宅の研究』墨水書房 1967 年の第三章二「北山殿」(31) で北山殿惣門の位置を推定している。

12　川上　貢「北山殿と東山殿」『金閣と銀閣』淡交社　1964 年、「義満の室町殿と北山殿」『日本中世住宅の研究』墨水書房　1967 年

13　『教言卿記』応永十五年（1408）三月十日条

14　『看聞御記』応永二十六年（1419）十一月十一日条

15　『大乗院寺社雑事記』応仁元年（1467）六月二十二日条

16　『三ツ塚古墳発掘調査概要』大阪府教育委員会　1982 年

17　『南古館Ⅰ』長沼町文化財調査報告書第 13 集　福島県岩瀬郡長沼町教育委員会　1988 年

18　「石本遺跡出土の木製遺物」『京都府埋蔵文化財情報』第 14 号　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター　1984 年

19　註 6 に同じ

2　北山殿創建平瓦・軒平瓦の製作技法

各調査区から北山殿創建期と考えられる共通の文様を持つ軒瓦（109A・B、111A、112A・B、207A ～ 209D）と、それらとセットとなる丸瓦・平瓦が大量に出土している。これらの平瓦のうち、中世平瓦の特徴を挙げれば古代にある凹面布目と凸面叩きの痕跡がなく、また近世以降の平瓦が成形過程の痕跡を綺麗に消し去るのに対し、砂が凹凸両面に付着する点にある（写真図版 37）。これを端的にいえば砂が両面にみられることを持って中世平瓦の定義にかえることができる。したがって中世平瓦の制作技法を復原する場合、何よりも中世平瓦を特徴付けるこの砂が如何なる意図で持って、如何なる政策過程で付着したのかが説明されなければならない[註1]。しかし中世に始まる制作過程を示す痕跡の消滅化は、消滅しているが故に知的興味をかり立てることなく研究の対象になり難かったのも事実である。

ところで今日の通説に従えば桶巻作りから一枚作りへ移行した古代から、近年機械化されるまで連綿とその方法を遵守してきたとしている。この通説に対しては大きな事実誤認があると思われる。というのもこの誤認とは機械化前の手工業による平瓦製作が、一枚作りではなかったという事実が民俗学的調査によって明らかにされてきたからである。本稿では、今日までほとんどかえりみられなかった中世平瓦製作技法を、このような民俗学的調査によって確定された技法から遡って推理して行く方法と、すでに解明されている古代の一枚作り技法の展開として捉える方法によってアプローチしてみたい。

なお、鹿苑寺出土丸瓦玉縁段には旭日印（図 30-304）を捺す。この印は南都系瓦を示す指標となるものである。表 3 は佐川正敏氏が作成した法隆寺丸瓦編年（『伊珂留我』法隆寺昭和資材帳調査慨報 10[註2]）との比較編年案である。それに従えばすべて 14 世紀末から 15 世紀中葉に収まる。したがってこれらの瓦群を北山殿上棟（1397 年）の瓦とすることは妥当であろう。

(1) 平瓦の制作過程

今ここに機械化前の平瓦製作過程を改めて要約すれば次のとおりである[註3]。

まずタタラ（立法体の粘土塊）を丹念に築く。一例として高さ三寸・幅一尺・長さ八尺に築き上げたならば、そのタタラを挟んだ二人がコビキと呼ばれる針金の両端を握って瓦一枚分の厚さごとに横に並行移動しながらスライスしてゆき、それを一尺ごとに縦に八等分切断する。このようにして切り取られた瓦一枚分の粘土板をアラジという。この時スライスする方向に、等間隔の横筋の針金による切断痕がアラジ両面に付着する。

このアラジをアラガタと呼ばれる凸型の成形台に積み重ねて行く。普通 4 枚、極端な地方で 8 枚ほどアラジを積み重ね型取りし、変形しないように密着した状態で、床に縦に並べて行く。その際アラガタおよびアラジが互いに接着しないように、前もってタタラ上面をナゼイタによってナデた後、フリコまたはスナと呼ばれる乾燥粘土粉を振っておき、その付着面を下にしてアラジを積み重ねる。その際凹面に残った切断痕もナゼイタで消してしまう。その後 2 ～ 3 日ばらして

干し、乾き過ぎないようコモで囲って１週間ほど半乾燥させる。以上がアラジトリといわれる型取り成形と半乾燥過程である。

次にジガワラキリといわれる調整過程に入る。平瓦の形にほぼ固まったアラジをキリカタと呼ばれる回転する凹型の調整台に移し、笏状の無文の叩き板でさらに薄くするためにアラジ凹面を叩き込み、器表を密にする。アラジの尻をキリカタの正面端に合わせ、はみ出した側面はキリカタを定規にしてカマで垂直に切り落とし、表面をナゼイタや水で濡らしたカワで撫でる。その後アラジの反りを調整し、再び約１日乾燥させる。この反り調整をタメシという。

最後にミガキといわれる仕上げを施し完全に乾燥させる。ミガキはキリカタと同じ形状のミガキダイの上にアラジを置き、コテを用いて表面を丹念にミガキ込み端部の面取りをヘラで施す。その後２・３日完全に乾燥するまで干す。アラジが完全に乾燥したものをシラジという。シラジになればダルマ釜で焼成する。これらの諸工程は専門の職人によって分業化されていた。

以上みてきたように、粘土粉を離脱剤にすることによりアラジを４枚から８枚一度に積み重ね即型取り成形・半乾燥させるこの技法は、一枚ずつ作るという意味での一枚作りとは様相を異にしている。この戦前まで行われてきた技法を私は「凸型成形台積み重ね技法」と呼ぼうと思う。近世の平瓦がこの技法によって制作された平瓦とまったく同一であることは、粘土粉が付着したまま残される平瓦凸面が、焼成後にケロイド状の肌になって残ることからも窺える。したがってこの技法はそのまま近世まで遡る技法であるといってよい。

ではさらに遡って中世の平瓦にまでこの技法を適用できるだろうか。

この問題を解く鍵は中世平瓦両面に砂が付着している点にある。軒瓦文様部に付着した砂を文字どおり離れ砂と呼び習わしてきたように、それは離脱剤として近代・近世を通じて用いられてきた粘土粉と同じ機能を持ち、またこの粘土粉を一部の地域ではスナと呼んできたことを想起すれば、中世の平瓦になぜ両面に砂が付着しているのかという疑問も氷解する。それはアラガタに積み重ねられた生のアラジが、互いに接着しないように意識的に砂を振り付けたからである。

(2) 中世平瓦製作の復原

以上の議論をふまえて､本調査平瓦の製作過程はその痕跡から次のように復原できるであろう。

まずタタラの形状は不明であるが、アラジ両面に付着した切断痕が横に並行に並ぶのではなく、古代と同じく斜めに入ることから古代とほぼ同じであったと推定できる。したがって近世のように二人ではなく一人で切断した可能性が高く、タタラも一人で切れる大きさでなければならないだろう。その切断用具は手順から一枚ずつ切り取ってからでないと、次のアラジが切れない沖縄・朝鮮・中国に分布する弓ではなく糸によるものであろう。ところでこのようにして切り取られたアラジを凸型成形台に積み重ねて行く作業は、粘土粉が離れ砂であったことと、アラジ凸面の糸切り痕をナゼイタによって消さないことを除けば民俗例の型取り成形・半乾燥過程と同じである。

中世平瓦の特徴である凹凸両面に認められる離れ砂と糸切り痕の存在は、これによって説明で

きる。さらに半乾燥後の調整過程においても、無文の叩き板と凹型調整台を同じように使用していたことが、平瓦凹面に残る無文の叩き板による痕跡と、平瓦凸面に凹型調整台を定規にして側面を垂直に切り揃える際に、台に沿ってはみ出した部分に台の圧痕が残る点からも窺える。また凹面の葺き足部は叩きとナデによって、ほとんどの糸切り痕と離れ砂が消されてしまうが、重ねて葺かれる部分には案外残っている。最後に凹面端部の面取りを施す。なお凸面広端部付近に円弧状の強い圧痕が残るが、それは凹型調整台の端に押し当ててその部分だけをさらに反らすためのタメシによるものだろう。

このように今調査平瓦に付着する痕跡は、すべて積み重ね技法によって合理的に復原できる。これを先に挙げた民俗例と比較してみれば、その違いはもっぱら桃山時代に始まる本格的な燻焼のためのミガキに関わるものといっても過言ではない。換言すればミガキ仕上げが新たな工程として付け加わっただけなのである。中世を特徴付ける離れ砂は、表面を丹念に磨くことによってピカピカに銀化発色させる燻焼にとって、排除されるべきものだったからである。したがって中世と近世を分かつ画期は、アラジの生産に限っていえばミガキのための離れ砂に代わる粘土粉の発見に限られ、そこに本質的な技術的変化があるわけではない。もしあるとすれば、近年まで存続したダルマ釜にみられるような燻焼のための焼成技術の変化やタタラの形状・切断方法の違いに求められるべきであろう。

(3) 中世軒平瓦製作の復原

古代においては、一部を除き半乾燥する前に平瓦部と瓦当部も同時に成形したと考えられている。だがしかし以上みてきたように「積み重ね技法」で製作された平瓦は半乾燥していることはいうまでもない。ではこの半乾燥した平瓦を用いて軒平瓦を製作することは可能であろうか。この問題も民俗学的アプローチによって復原することができる。今日残る手作り軒平瓦製作は半乾燥した平瓦部凸面広端縁を范が食い込む部分だけ面取りし、そこに軟らかい粘土紐を貼り付けるのである。そうすることによって范が食い込む部分は軟らかな粘土であるが故に范を打ち込むことが可能となる。北山殿軒平瓦は『法隆寺昭和資材帳 15　瓦編』1992 年において、鎌倉時代後期から室町時代末までを代表する「瓦当貼付式段顎」に分類されている。「瓦当貼付式段顎」というのは、写真図版 37 － 209D をみれば判るように、凸面広端部の顎部となる幅だけ入った部分から凹面広端縁に向かって斜めに切り取り、そこに粘土紐を貼り付ける技法を指す。そこで考えなければならないのはなぜこのような切り取りが行われたかにある。その答えはこの写真図版にあるように半乾燥後の丸瓦部を用いる軒瓦と同じように接合面に沿って瓦当部が剥離した状況で多く出土する点にある。これは古代軒平瓦にない出土状況である。この特徴を持って軒丸瓦同様、半乾燥後の平瓦部を用いて軒平瓦を製作した根拠とすることができる。異なった固さの粘土に范を打ち込むことはできない。だからこそこのような切り取りを必要としたのである。したがって、近世・近代と中世の違いは、凸面広端縁を面取り程度に留めるかそこを全面的に切り取るかという差でしかない。中世軒平瓦の切り取りは平瓦製作が古代の「一枚作り」から「積み重ね技法」

に変化した必然的結果にほかならない。

(4) 平瓦製作の変遷

ではこの技法はどのようにして古代から展開してきたのだろうか。この問題を解くことによって初めて日本の平瓦造瓦史が通史として叙述しうるものとなろう。

造瓦技法が日本に初めて伝えられた飛鳥時代は、平瓦はいわゆる樋巻作りであった。それは布を巻き付けた樋型に長細い粘土板を巻き付け、横から刻み目の入った叩き板で叩き締めて成形し半乾燥後四分割した。それが平城宮の造営が行われた奈良時代には、通説によって機械化するまで続いたとされる一枚作りが一般化する。この一枚作りは凸型成形台と粘土板の間に布を敷き、その上から凸面を刻み目または縄を巻いた叩き板で叩き締め、一枚ずつ型取り成形・半乾燥させた。したがってこれら古代平瓦には布を離脱装置とし、また叩き締めで成形する限り、必ずといってよいほど凹面に布目痕、凸面に叩き痕を有する。また回転する凹型台を用いて調整を施したことは中世以降と同じである。

この古代の技法に対し、京都では鎌倉時代の末から布目のない凹凸両面に離れ砂を付着させる小型の熨斗瓦が出土するようになる。ここにいう「凸型成形台積み重ね技法」の初現である[註4]。これらの熨斗瓦は南都産を示す旭日印を捺す。ただしこの熨斗瓦群には凸面に縄目あるいは格子目叩きを持つものも混在し、また同じ印を捺す東福寺出土大型平瓦も、格子目叩きのあるものと鹿苑寺同様のないものとに大別できる。しかしそれらはいずれも凹凸両面に離れ砂が付着する[註5]。したがってこれら凸面の叩き痕跡は古代の伝統に習って凸型成形台に積み重ねる際に叩き締めたの

図 48　臨川寺出土平瓦

ではなかろうか。

この想定を証拠立てるものに鹿苑寺創建時より少し遡る臨川寺創建（1333年）の瓦群がある。この瓦群は鹿苑寺創建時軒瓦・甍瓦と同范であり同じ旭日印を捺す。この平瓦製作技法については、すでに石井　望氏が一枚作りによって復原[註6]を試みているが、しかし凹面の撫で消しのために肉眼では観察し難いにもかかわらず、この平瓦群の凹面に凸面の陽刻された格子目が、砂の詰まった状態で陰刻プリントされている。この格子目がネガ・ポジの関係にあることは、アラジが軟らかい段階で積み重ねられたことを示す。臨川寺平瓦群は凹面に布目を持つものと離れ砂だけのものとに分類でき、されに東福寺平瓦同様凸面に格子叩き目を持つものとないものに分類できる。その中でも絶対量の少ない布目を持つものはそこに離れ砂が付着せず凸面にだけみられる。

このことはアラガタには古代同様布を敷くが、その上にアラジを積み重ねる時には凸面に離れ砂を振り付けたのではなかろうか。W4区池28出土の平瓦も6千片中10片ほど布目を認めたが、それもそうして付着した可能性が高いと考える。とはいえ南北朝の戦乱を経た義満の時代には、凸面の叩き締めは完全に消滅するといえるだろう。

この古代から中世への平瓦製造技法の移行に際して注目すべきは、中世の技法を成立さす条件がすでに古代の瓦工によって一枚作りの中で獲得されていたということである。その条件とは一枚作りに用いられた凸型成形台と凹型調整台、そして離脱剤としての離れ砂のことである。離れ砂は古代において、瓦当范の離脱剤としてまたは粘土が叩き板に付着し難いよう意識的に利用されてきた。異なるのは中世では砂を（アラジを積み重ねる際の）離脱剤に転用したことと、叩き締めの機能変化、即ち成形過程で行っていた成形のための凸面の叩き締めを中世では調整として凹面の叩き締めに変えたということに過ぎない。けだし瓦作りは型取り成形以外の何ものでもなく、調整や仕上げは半乾燥後にのみ施せるという窯業の基本にあるからである。そういう意味からすれば古代の技法は中世の積み重ね技法に止揚されて近年まで生き続けてきたといえるだろう。

古代における樋巻作りから一枚作りへの転換が、大型平瓦を生産するには樋巻では労力がかかりすぎ、技術的に一般化するのに不適当であったとすれば、それは一度に4枚作れるというメリットを犠牲にした進化であった。このデメリットを補うために誰にでもできる一枚作りのメリットを基礎に編み出されたのが、中世に始まる積み重ね技法だったといい得る。その進化に伴って製作工程はもっぱら調整台の数に、したがって調整を行う瓦職人の人数だけに限界をみいだす。積み重ね技法によって、同一期間内に4倍から8倍のアラジが生産されるからである。今や瓦職人は成形段階の叩き締めを省くことによって、多量に生産された固定化したアラジの調整に専念するだけでよい。この量産化への移行は凹面における製作痕の消滅化の始まりであると同時に、近世に始まる仕上げ過程の独立化への前提でもある。江戸時代には成立していた同一の作業場で分解され細分化された工程に職人を配分し固定化してしまう瓦生産が何時まで遡るのかは判らない。しかしその技術的基礎は中世を持って始まるといってよい。単純且つ量産化に道を開いたこの技法は機械化されるまで大きな技術変化をもたらさなかった。中世以降の平瓦の歴史は他の商

品の歴史がそうであるように、商品価値を高めるために如何にして表面を美しく仕上げるかという点に瓦職人の意識と技を集中してきた歴史であったといってよい。

註

1　拙稿「平瓦製作における中世の技術革新について第1部・第2部」(『研究紀要1・3』京都市埋蔵文化研究所　1994年・1996年)は本稿を元にしてより詳細に展開したものである。

2　佐川正敏『伊珂留我』法隆寺昭和資材帳調査慨報10　法隆寺昭和資材帳編纂所　1987年

3　a中村　伸『瓦』相模書房　1949年・『栃木市史・民俗編』栃木市史編纂室　1979年、ここで　　は乾燥粘土粉をスナと呼んでいる。

b伊野一郎「だるま窯の時代　昔の瓦づくり」『瓦 日本の町並みを造るもの』INAX 1986年

c印南敏秀「京瓦の技法と用具」『京都府埋蔵文化財論集第1集』京都府埋蔵文化財センター　1987年

d近藤康司『谷川瓦調査報告1』大阪府岬町教育委員会　1992年

e山川一年「瀬戸の瓦」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』愛知県瀬戸市歴史民俗資料館　1993年

f石川裕子「埼玉のかわら」『埼玉県民俗工芸調査報告書　第4集』埼玉県民俗文化センター　1986年

gその他に『日本民俗大系14　技術と民俗』小学館1986年の「菊間瓦」「岩見瓦」も参照。

4　上原真人「平瓦製作技法の変遷・近世造瓦技術成立の前提」(『今里幾次先生古希記念播磨　考古学論集』1990年)はこのような平瓦を「凸形台一枚作り」によるものとする。および註(1)のp86。

5　長谷川行孝『東福寺防災施設工事　発掘調査報告書』東福寺　1990年　註(1)第1部p87ではこの瓦群を東福寺創建(1236年)としたが、それより新しく伽藍創建(1319年)より古いとしなければならない。

6　石井　望『臨川寺旧境内遺跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所　1978年

3　木製祭祀具について

木製品は修羅に供伴して出土したものが大半を占め、容器類から部材・服飾具に至るまでさまざまな種類のものが多量にまとまって出土した。その中に少数ではあるが人形・斎串・舟形・刀形・陽物形という祭祀に関連したと思われる遺物がみつかり、他の木製品と同様15世紀後半のものと推定された。

これらの祭祀具について、他遺跡出土の木製祭祀遺物を参考にしながら鹿苑寺出土祭祀具としての時代的特徴を考察して行きたい。

(1)　木製祭祀具

祭祀具と思われる木製品は人形4点、斎串11点、舟形2点、陽物形2点、刀形11点、剣形5点、刀子の鞘7点であった。鞘とセットになる刀子はみあたらず、刀形も完形品は2点であった。陽物形は1点のみ片端が斎串のように鋭角に切り落とされている8があり、それが祭祀時の形状か加工途中のものかは不明であるが、前者ならば斎串のように用いられた可能性も考えられる。

ここでは祭祀具の形態変遷の中でも、比較的時代の特徴が判りやすい木製の人形、斎串、舟形を取り上げ、それぞれ鹿苑寺出土の場合をみて行きたい。まず時代によって祭祀具の形状推移の概略を述べ、その後に鹿苑寺出土品を対応させて行くこととする。

人形は人の持つ穢を負わせるために用いられたものである。古代から近世までの遺跡でたびたびみられるもので、立体像よりも板状のものが数の割合は多く、また板状のものには正面向きと横向き人形がある。

板状人形に関して概略してみる。古墳時代から平安時代までの総体的特徴としてはまず正面向きと横向きとがあること、ほとんどは正面向きで頭部と手・脚部を意識して作った全身像であること、顔を墨で描いていたものが多いことなどである。

具体的特徴としては、他に6世紀後半から7世紀前半のもので、脚部を三角形に尖らせた墨書なしの正面向き人形が、静岡県神明原・元宮川遺跡[註1]から出土しているが数は少ない。

また、長岡京[註2]では髪・顔を墨書きした有脚正面向き人形が出土しているが、一方、脚部を有する横向き人形[註3]も現れ、下って鳥羽離宮跡[註4]からも同形が出土する。この形状はしばらく続いたようで、13世紀のものが大阪府の水走遺跡[註5]より出土している。平安時代前期でもおおよそ前時代を踏襲し、墨書有脚正面人形が出土例[註6]の大半を占める。

平安時代後期になると横向き人形が主流を占めるようになり、上述した鳥羽離宮から有脚横向き人形が多く出土する。

他に変わった形状だが、13世紀前期のものとして、一見頭部のみ加工した横向き寸胴型に、下方の木目を板状のまま前後に裂いて脚状に二分割した人形が、神奈川県蔵屋敷東遺跡[註7]、鳥羽離宮跡第59次[註8]からほとんど同時代のものとして出土する。この形態は広島県草戸千軒町遺跡[註9]からも15世紀の遺物として多数出土している。しかしそれ以降の出土例はないようである。また初

見は明確ではないが、おおよそ平安時代後期と思われる頭部切り込み加工横向き寸胴型人形は、この形状もずっと後まで踏襲され、16 世紀前後のものが福井県一乗谷朝倉氏遺跡[註10]から出土している。

これらの板状人形に関して全体的に共通していることは、正面向きの人形の頭部の場合、墨書の有無にかかわらず表現されているものが長岡京を除き毛髪か帽子か不明なのに対し、横向き人形は時代の別なくほとんど烏帽子を着用した状態に切り込み加工し表現されているということ、さらに目鼻の墨書が少なくなり時代を下るに従い脚部などが省略され、首より下が寸胴型になって行くことである。

次に立体像についてであるが、棒状の木片に烏帽子着用の頭部を掘り刻みながら手足を表現しない寸胴のものが、すでに藤原京期[註11]からみられる。以降、板状人形よりも出土例は少ないのにもかかわらず、古代から中世を通じ特異な形状変化はみられない。タイプとしては上述したもの以外に、着衣の全身像、面取りした大きなマッチ棒状の大きなもの（丸い頭部を有した寸胴型）が代表的なものである。これらのタイプは近世のもので江戸時代初期の御土居の堀[註12]からも出土しているが祭祀関係のものかは不明である。

さて鹿苑寺出土の人形に目をむけるとしよう。こちらでは立体像・板状どちらも出土していて共に烏帽子姿である。さらに頭部のみ丁寧に加工して首下部は立体像・板状どちらも寸胴型になっている。中でも板状人形は、前述したような平安時代後期に出現し、以後鎌倉・室町時代を通じ 16 世紀まで続いた人形の流れを組むものといえよう。また立体像の方も同形のものが、草戸千軒町遺跡から 14 世紀の遺物として出土しており、時代のみならず形状の分布範囲の広さをも示唆していると思われる。

注目したいのは図 37(4) のやや平たい立体像である。首より下方は面取りする位で、特に加工を施したものではないようであるが、下方最先端の破損部をよく観察すると、下方を一度すぼめた形に刃物を入れておいて、そこからさらに細く棒状に加工しようとした痕跡が認められる。その棒状の始まりの部分から欠損しているため、本来の長さは不明であるがおそらく何かに突き刺して使用されたのであろう。外観は異なるものの、この下方先端を尖らすという細工形状に類似した立体像が、神奈川県鶴岡八幡宮境内[註13]から 2 点出土しており（13 世紀半ばから 14 世紀初めのものと、14 世紀半ばから 15 世紀半ばのもの）、また時代を遡って平安京右京八条二坊[註14]からも 9 世紀後半の遺物として 1 点出土している。その間の時代の出土例はまだない。

次に斎串をみて行きたい。斎串は人形や刀形などの他の一連の祭祀具と共に出土する場合もあり、同時に使用されることもあったようである。これには祀りの場に穢や災厄が入るのを阻止する働きがあり、結界を意味するものと考えられている。

斎串の形状の推移については、6 世紀から 7 世紀にかけて現れるのは板状のものの両端を鋭角に切り落としたもの（平行四辺形や台形を細長くしたような形状）、同じく両端を圭頭状にして細長くしたもの、一方の端を圭頭状にして他方を両側面から細く尖らせたものがある。奈良国立文化財研究所編の『木器集成図録』では、それぞれ A 型式・B 型式・C 型式と分類している。こ

の3型式は古墳時代から平安時代へと続くが、9世紀前半になると新たにB型式に側面からV字形の切り込みを数個入れた卒塔婆のような形状（C型式の一つに分類されている）や、C型式に手を入れたいわゆる削りかけと呼ばれる、上部に細かい櫛状の切り込みを多数入れた形状のものが登場し、意識して細工をするようになったことが判る。このような削りかけが平安時代前期の遺構から数多く出土[註15]している。

鎌倉時代になると13世紀の遺物として、圭頭部の下方二箇所か三箇所に両側面からV字形の切り込みを入れた斎串が水走遺跡、福島県の古館遺跡[註16]・平安京右京六条一坊[註17]などより出土している。室町時代から戦国時代以降の斎串は、残念ながら出土例がみあたらない。以上の形態的変遷をふまえ鹿苑寺出土の斎串をみてみたい。

まず平安時代前期のような削りかけは出土していないが、その前段階であるA型式が34に、B型式37・40に、C型式が41・44に相当するといえよう。また35・36は箸状斎串と何らかの関係があるのかもしれない。34・37・40に類似したものが古墳時代の遺物として神明原・元宮川遺跡から多量に出土しており、34の形状のものは長岡京からも出土し、44の形状のものは藤原宮や上述の平安京からも出土する。特に34に関して言及すると、既述中に片方を鋭角に切り落とした陽物形1点があることに触れたが、これは、祭祀法が具体的に同一であったのか否か明確でないが、同時期の斎串の形状をまねて作られた可能性も考えられる。

今回出土の斎串を室町時代の一資料として観察すれば、その特徴として全体的に粗雑な作りではないが、手の込んだ細工はほとんど施してないといってよいこと、形状に関しては元のシンプルな形に近づいてきたことなどが挙げられよう。ただし形が多様すぎて、形状のみでは室町時代に比定することは困難である。

舟形に言及したい。乗り物・流す物としての機能からこれを模して作られた舟形は祭祀においては穢を負った人形を他界へ運び出す、消し去る役目を持っていた。形状についておおよその時代ごとの特徴をみてみたい。

古墳時代から平安時代後期の12世紀にかけての舟形の形状は、船首・船尾共にほぼ同形で、その形が尖っているものと方形の二通りあること、内側の刳り貫きは船首近くをやや広く残していること、船首か船底には垂直方向に穿孔を有するものが多い、などである。これはずっと後代[註18]まで続く。

鎌倉時代になると形状の尖りにやや丸みを帯びたものが現れ、以降船首や船尾に丸いものと尖ったもの両方の形状のものが並存[註19]する。14世紀では船尾が完全に方形になるといえよう。例えば神奈川県千葉地遺跡[註20]では14世紀中期のものとして上述の船首両タイプが出土している。さらに草戸千軒町遺跡でもこの船首両タイプのものが14世紀前半の遺物として出土するが、15世紀後半の時点では、丸い船首と方形の船尾を持つ形状が受け継がれていたことが遺物から判る。もっとも、船首の尖った方形船尾の舟形が16世紀の遺物として一乗谷朝倉氏遺跡より出土しており、このタイプも存続していることは確かである。

注目したいのは、草戸千軒町遺跡では舟形の大部分が船尾側に舵取り付け用と思われる加工痕

を残すことである。すなわち船尾外側底部を段状に切り落としたもの（13 世紀のものが初見）と、さらにその段状部分にU字形の切り込みを入れたもの（14 世紀前半のものが初見）がある。この加工法はしばらく踏襲されたようで、同類の加工痕を持つ舟形が上記の一乗谷朝倉氏遺跡から16 世紀のものとして出土している。（正確にはU字形ではなくやや方形の切り込み）。また形状はやや違うが船尾の舵用加工痕と思われるものは、鶴岡八幡宮境内出土の船形（14 世紀半ばから15 世紀半ば）にもみることができ、そこでは船尾の表面を上から一段低くなるように加工を施しているのが認められている。以上のことから船形の舵取り付け状加工が始まる上限は、13 世紀半ば頃に比定できるのかもしれない。

では鹿苑寺出土の舟形に着目したい。ここでは2点出土していてどちらも船尾は方形である。船首の形状の1点は先を尖らせたもの、他の1点は先に丸みのあるもので、後者は外面に何度も刃物で削った痕が明確で舟の周囲に丸みを付けようと加工した様子が窺え、稚拙ではあるが丁寧な作りといえよう。しかし（10）に認められた穿孔が何のためのものなのか（例えば舟形を串などの先端に取り付けるために開けられたものなのかどうか）不明である。

これらのことから今回出土の舟形は、前述した千葉地遺跡出土の二形状の舟形に類似していて、14 世紀中期以降の形態であることが理解できる。しかし問題は、この千葉地遺跡出土の舟形の中に舵用の段を有するものがあることである。そうすると千葉地遺跡の舟形と草戸千軒町遺跡の舟形が、形状の上では鹿苑寺出土の舟形よりも近く、続く 16 世紀の一乗谷朝倉氏遺跡へと一連の流れを構成するものと思われ、舵用段の加工がない鹿苑寺出土の舟形を時代的形態から捉えることがむつかしくなる。ただこの時点で考えられることは鹿苑寺出土の舟形は、理由は判らないがほぼ近い時期だと考えられていた草戸千軒町遺跡の舟形よりも、さらには千葉地遺跡（遺跡の年代は 13 世紀中期から 14 世紀中期）から出土した室町幕府の舟形よりも、より鎌倉時代に近い遺物形態を保持してきたと思われるのである。

（2）小結

鹿苑寺出土遺物は室町時代中期の資料である。その中の木製祭祀具を観察しながら室町時代としての特徴を確認したかったが特にみつけることはできなかった。しかしながら、今回出土の木製祭祀具そのものの性格や意味については多少明確になりつつあると思われる。

人形に関しては、全体的に平安時代後期の形態を受け継ぎながらも鎌倉時代に多く現れた下方先端部分を棒状に尖らす加工法（厳密には9世紀後半に1点だけ出土するが以後 13 世紀中期まで出土例がない）を取り入れていることが判る。

斎串に関しては実は何も判っていない。時期のほぼ重なる、例えば草戸千軒町遺跡や一乗谷朝倉氏遺跡からの斎串出土が一切ないため比較検討できず、時代の特徴はほとんど不明である。形状のみに注目すると、時代を一気に遡り平安京以前からのものに類似品を見いださざるをえない。苦しい解釈をすれば、平安時代にみられたさまざまな形状の斎串をその最盛期として、後 13 世紀より手の込んだ細工加工は減少に向かい、15 世紀中期に至ってはよりシンプルで草創期の形

にもっとも近い斎串になって行ったのではないか。さらに推定だが、この時期が斎串の終末期とは考えられないだろうか。

舟形に関しては前述したように、ほぼ同時代の他遺跡出土遺物よりもやや古い形態を残したものと考えられる。

祭祀具の三者について述べてきたが、改めて他遺跡と比べると斎串は別として、鹿苑寺出土の人形は鶴岡八幡宮境内出土のものと、舟形は千葉地遺跡出土のものと非常に類似していることが判った。実は鶴岡八幡宮と千葉地遺跡はどちらも鎌倉に所在する。出土遺物も前者は 13 世紀中期から 15 世紀中期のもの（各時代の遺構からそれぞれ出土）、後者は 14 世紀中期のものでほぼ重なる。そして鹿苑寺出土木製品はこれらの時期に近いものである。室町時代も後半に入っているが、当時の鹿苑寺においては祭祀関係、ことに木製祭祀具に関する限り鎌倉時代からの形態をずっと守ってきたといえるのではないだろうか。

応永年間、『兼宣公記』や『迎陽記』など当時の記述から、北山殿において、武家の祈祷としての廻り祈祷や、五壇法などさまざまな密教行事が毎月行われ、同時に天曹地府祭などの陰陽道祭祀も修されたことが知られている。これは義満期、国家的祈祷が幕府によって執り行われていたということである。またすでに、鎌倉幕府においても、いろいろな名目で密教行事や陰陽道祭があったことは『吾妻鏡』[註21]にもみられることである。いわゆる鎌倉幕府における行事が、習慣となって室町幕府にも受け継がれて行くのは想像に難くない。

木製品が検出されたのは義満が亡くなって久しい時期であるが、義満以後も鹿苑寺において何らかの祭祀が行われた可能性は否めないし、今回出土した祭祀関連遺物も、そのような祭祀に関係しただろうことは十分に考えられることである。

また鹿苑寺では出土してはいないが、この時代の他遺跡では呪符の出土[註22]がよくみられる。これまで古代の呪術資料に比べて中世のそれは出土例が少なかった。水野正好氏によると「中世はおびただしく呪札が用いられた時代。まじないの札の誕生[註23]」があった。さらに人形の中世初頭の資料が少ないことに対し金子裕之氏は「その理由の一つに呪符の流行がある。模造品から呪符への転換は、観念の多様化と共に漢字の呪詛への期待感があるのであろう[註24]。」と述べ、両氏ともに中世における呪符の台頭と重要性を指摘している。中世の呪術資料をみる場合、呪符の影響を考えることも留意しておきたい。

註

1　a『大谷川Ⅰ～Ⅳ』（財）静岡県埋蔵文化財研究所調査報告第 5・11・13・20 集　1984 年～ 1989 年
　b『大谷川（稲妻地区）』（財）静岡県埋蔵文化財研究所調査報告第 12 集　1988 年
2　『古人のいのり－特別展図録－』京都市考古資料館　1992 年
3　「長岡京跡左京三条二坊第二次発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概要』京都府教育委員会 1976 年
4　註 (2) に同じ。
5　『中世の呪術資料』第 4 回中世遺跡研究集会　広島県草戸千軒町遺跡調査研究所　1984 年

6　平安京右京八条二坊二町や平安京左京四条一坊などで出土。

a「平安京右京八条二坊」『昭和 60 年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1988 年

b「平安京左京四条一坊」『平成 4 年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995 年

7　註 (5) に同じ。

8　「第 59 次発掘調査」『鳥羽離宮調査概要』昭和 55 年度　京都市埋蔵文化財調査センター 1981 年

9　註 (5) に同じ。

10　註 (5) に同じ。

11　『木器集成図録　近畿古代編』奈良国立文化財研究所　1985 年

12　「平安京左京九条二坊」『平成 3 年京都市埋蔵文化財調査概要』(財）京都市埋蔵文化財研究所　1995 年

13　『研修道場用地発掘調査報告書（鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書）』鎌倉市鶴岡八幡宮　1983 年

14　「平安京右京八条二坊」『昭和 60 年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財）京都市埋蔵文化財研究所 1988 年

15　平安京右京八条二坊二町・平安京左京九条二坊十三町などで出土。

a「平安京右京八条二坊」『平成 5 年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996 年

b「平安京左京九条二坊」『昭和 59 年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1987 年

16　註 5 に同じ。

17　『平安京右京六条一坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 11 冊　（財）京都市埋蔵文化財研究所 1992 年

18　神明原遺跡、本宮川遺跡、平安京左京九条二坊、平安京四条一坊など。

19　鳥羽離宮跡第 59 次など。

20　註 5 に同じ。

21　『吾妻鏡』建保元年 (1213) 四月二十八日条には、和田一族調伏のため密教では大般若経転読・金剛童子法が、陰陽道では天曹地府祭・属星祭が修せられたとある。

22　草戸千軒町遺跡・一乗谷朝倉氏遺跡・千葉地遺跡など。

23　水野正好「招福・除災－その考古学－」『国立歴史民族博物館研究報告　第 7 集』1985 年

24　金子裕之「平城京と祭場」『国立歴史民族博物館研究報告　第 7 集』1985 年

4　まとめ

鹿苑寺（金閣寺）境内は特別史跡・特別名勝に指定され、また西園寺公経の西園寺北山第、足利義満の北山殿が造営された由緒ある地で、今回初めて、防災・防犯工事に伴って、発掘調査の機会が得られたのである。西園寺北山第および義満の北山殿は、園池を中心として御所、御堂が整然と建ち並ぶ様子が文献資料で明らかであった。現在の鹿苑寺ではその様子は園池以外窺うことはできないが、今回の調査でその一端でも明らかにする手がかりが得られるのではと期待された。

検出した主な遺構には、建物、池、溝などがあり、境内全域にわたって遺構・遺物を検出したが、西園寺北山第の時期に相当する建物は明確にできず、室町期に属する建物である。金閣周辺の調査で検出した建物には礎石が残されていた。自然の河原石も利用されていたが、その中には花崗岩を丁寧に加工した切り石の礎石があり、その礎石の上に立つ柱を推定することができる。正方形の角を落として八角形にした柱座は1辺が22～23cmを測り、柱の大きさは5寸角あるいは6寸角を面取りした柱であろう。これは金閣の柱の大きさともほぼ一致し、細い柱を用いた建物であった。S区建物22でも同じような礎石を用いているため、大半の建物が金閣に近い柱を持った建物とみてよいだろう。

園地に関しては、埋もれていた石組みや景石を検出することができた。西園寺北山第の頃に作られたと思われる安民沢の滝組、景石、木樋がみつかったが、鏡湖池周辺の調査では、室町期の庭園の様子を明らかにすることはできなかった。ただし、当時の鏡湖池南東部の遺構面は現在の地表面より40～50cmは低いため、現在の池の水位より低くなることは間違いない。『明月記』の記述にある45尺の滝が問題となるが、明確な結論を出すことはできなかった。中根金作氏のいわれる不動堂の裏にある滝にしても、導水路や滝壺などを発掘調査しなければ確定はできない。

今調査で出土した修羅は、古墳時代から中世まで基本的な形状はほとんど変化していないことを証明した。大阪府藤井寺市三ツ塚遺跡の修羅は保存処理を施し、大阪府立近つ飛鳥博物館に展示されている。今調査出土の修羅は、現地でウレタン樹脂を吹き付けて密閉し、鹿苑寺境内において仮置きした。その後7年経過したが、鹿苑寺の協力を得て平成8年（1996）12月から保存処理を行うことになった。また、平成8年4月1日には京都市の有形美術工芸品として文化財に指定された。保存処理は三ツ塚遺跡の修羅と同様にPEG処理法を用い、処理期間が6～7年かかる予定であるが、その後公開されることになろう。

鹿苑寺出土の瓦は大半が文様や技法から北山殿所用瓦とみて間違いなく、室町時代の瓦編年にとって良好な資料といえる。W4区の瓦以外の金閣周辺で出土した瓦は、小型瓦ばかりであり、文様の付く瓦に対して丸瓦・平瓦の比率が少なく、桧皮葺あるいはコケラ葺の屋根に使用された棟瓦と考えられる。また礎石から推定される建物も華奢で瓦葺き建物とは考え難い。

修羅と同時に出土した木製品には実用品ではなく祭祀品と考えられるものがある。北山殿では文献史料から、さまざまな祭祀が行われていることが判る。修法や祈祷が数度行われ、義満の修

法を今谷　明氏は国王の祈祷とされた。北山殿の祈祷が 14 世紀から 15 世紀にかけて行われたもので、今調査の祭祀遺物は 15 世紀中頃の土器と供伴しているため、時期的には合わない。出土品がどのような祭祀に用いられたものか、明確にはできないが、当地で行われた祭祀の具体的な遺物といえる。今後の祭祀遺物の研究には有効な資料である。

隔蓂記（表 6）は、江戸時代初期の鹿苑寺の住持で、相国寺第 95 世住持でもあった鳳林承章（1593 ～ 1668）が残した日記で、寛永十二年（1635）から寛文八年（1668）のものである。

仏事以外に毎月鹿苑寺では、俳諧や連歌、狂句の会、詩歌会、物語の講義をはじめ、狂言、立花、口切茶事が催されていて、さながらサロンの風を呈していたと思われる。そのため交友関係も広く、公家、武家、僧侶、町衆の実名が多く登場する。承章自信、生家が観修寺家であり後水尾上皇とも縁続きだったため、上皇の御所にもよく参内し共に芸能を楽しんでいる。

この時代はいわゆる寛永文化盛んな頃で、本阿弥光甫、千　宗旦・古筆了佐、金森宗和らに代表される上層町衆と承章は親交があり、また板倉重宗・烏丸光弘の名も幾度か出てくる。江戸の狩野探幽と大徳寺の玉舟宗璠の二人とは特に親しかったらしく、彼らは鹿苑寺をたびたび訪れていて、時折、手紙や贈り物も届けている。当時の一流の文化人との交遊が窺えて興味深い。

民俗行事として注目したいのは、毎年 7 月 16 日に行われる鹿苑寺山上での万灯篭と石不動前での梵魯念仏である。慶安三年（1650）の同日、山上の大文字に点火される記事や、承応三年（1654）の同日、山上で諸方の送り火をみるとの記述があり、現在の山々の送り火行事が「万灯篭」と呼ばれ、この頃すでに大文字の送り火があったことが判る。また同日の梵魯念仏は太鼓も使われており、正保二年（1645）では鹿才念仏とも記されていて、太鼓や鉦を使った今の踊念仏の形ができあがっていたと思われる。

日記という主観の形態でありながら、文学、芸能、作庭、民俗行事から茶道具に至るまで幅広く事細かに記述され、次代の元禄文化へと続くその過渡期に位置する文化史料として隔蓂記は貴重なものとなっている。

付章　電気探査（1993 年度）

奈良国立文化財研究所　西村　康

1　測定の方法

電気探査 2 極法

4 本（C1、C2、P1、P2）の電極の内電流電極の 1（C1）と電位電極の 1（P1）を半無限大の距離に固定しておき、後の 2（C2、P2）が、対象区内を移動して、側転後との電位を測る方法である。

この時探っている深さは、移動電極の間隔とほぼ等しいとみなされ、もし、1m の間隔であれば、直径を 1m とした半円球状の三次元の領域となる。したがって、電極間隔が広いほど深い層位までの土の性質を探ったことになるが、それだけ幅広い範囲の土を平均したものとなるので、結果としては漠然としたものとなる。しかし、電極の間隔が 50cm のように狭い場合には地表面のわずかな変化の影響を受けやすく、安定した測点ができない恐れがある点に注意する必要がある。

2　測点地点

今回測定した地点は四箇所ある。便宜的に北から順に［A 測定区］［B 測定区］［C 測定区］［D 測定区］と呼称することにする。

［A 測定区］　朱印所の南西に設定した測定区で、南側は小さな池の範囲も含む。設定した範囲は南北 30m、東西 14m だが、南側の池部分と南北方向園路では測定できていない。

［B 測定区］　前回（1989 年）の測定範囲の内に 30m × 30m の広さを設定して、再測を試みた部分。

［C 測定区］　金閣の北と東側に及ぶ測定区。範囲は東西 30m、南北 19m だがこれの南と西にはそれぞれ鏡湖池と金閣があるため測定できていない。

［D 測定区］　拝観入り口の西で、生け垣によって限られた本道の南部分。東西の 20m、南北 30m に設定した範囲の北東部では、門とそれから南へのびる築地があるため測定できていない。

3　測定結果

結果を表示する測定図（図 49）では、寒色が比抵抗の低い部分、暖色は抵抗が高いことを表している。いずれの図においても外郭線状の目盛りは 1m 間隔である。

［A 測定区］　ここでの探査目的は、北側から派生した溝などの導水施設が存在する可能性があるので、それを探ることにあった。移動電極間隔は 1m である。

探査結果をみると、測定区の西側には比抵抗の高い部分が二箇所あることに気が付く。これの内、北側のものは地点が丘陵斜面裾にあたっていることから、多分、地山の浅いことが反映されたものと考えられる。一方、南にみられるものでは、幅 1m 程度で東西方向に直線的にのびる構

造を示すので、築地など何らかの人工的な施設がある可能性が高いと推定できる。

当初目的とした導水施設は、本測定区内に存在するとは思われない。なお、測定区の東側で南北方向に連なる比抵抗の低い幅狭い範囲は、現在の溝が影響して現れたものである。

［B 測定区］　前回の測定では、築地かと思われるような直線的な構造が存在することに気が付いたのでそれを再確認することと、それ以外の遺構についての情報収集が目的であった。移動電極間隔 0.5m による測定。

ここでは、大まかにいえば西から東へ向かって比抵抗が徐々に低くなって行くことと、その変化が漸移的であることである。すなわち、人工的と思われるような顕著な比抵抗分布変化や形態を示す部分はみられない。また、放水銃位置の他には現代の建築物である排水暗渠なども、的確には指摘できない。

しかしながら、建物基壇など何らかの人工的構造物が存在するとすれば、それは西側の比抵抗が高い部分にあたると想像できるので、その範囲を詳細に検討することが必要であろう。本測定区については、さらにデータ処理を試みた後に、前回の測定結果などを参考にして所見を述べることにしたい。

［C 測定区］　ここでは金閣の周辺において、鏡湖池の本来の範囲や形態を探るのが目的であった。移動電極間隔 0.5m による測定。

金閣の東側では非常に比抵抗が低く、やや北側にも広がっているようにみえる。東側が池であったことはほぼ間違いないだろう。北側では南北方向に埋設してある避雷針か、それを埋設した際に掘削した溝が影響していて、正確な判断はできないものの、池であった可能性は低いようである。なお、避雷針の西と金閣東南の池際にあるやや比抵抗の高い部分は、両者ともに水際にある景石の影響である。

ここで注意されるのは、測定区の北辺に近い位置で東西方向に連続するようにみえる、比抵抗の高い範囲である。必ずしも直線上の構造とはいえないが、もしかすると幅 1m 程度の築地状の遺構を考えることができるかも知れない。

これが東側で途切れている箇所は、測定時に観察したところでは、ちょうど末広がりになる白砂の路上部分にあたっていたので、それが影響した可能性が大きい。

西半部で避雷針埋設によって二分されたようにみえる範囲に注目すると、もっとも比抵抗の高い箇所の東西間隔が約 7m ばかりと読み取れるが、その中心が金閣に対してどのような位置関係となるのかを、検討しておいた方がよいであろう。

［D 測定区］　拝観入口から金閣へ至る南北方向の園路部分で、発掘調査により東西方向の溝が検出されていたので、その溝の東側延伸部分を探るのが目的であった。移動電極間隔 1.5m による測定。

ここでは、溝と考えられる比抵抗の低い範囲は、西北から東南方向へ分布していて、幅は約 3 ～ 4m 程度あるようにみえる。しかし、測定時の所見によればこの範囲は、ちょうど防火用施設を埋設した部分にあたっているので、遺構ではないと判断される。

しかし、もし本測定区内で溝遺構が存在するとすれば、この比抵抗が低い範囲以外にはないであろう。幅広いことから、遺構と防火用水路とが重複している可能性も一応検討しておく必要はあろう。また、園路で検出した溝との位置関係の点検も、最初に必要であろう。

他に注意される点としては、測定区南側に分布するやや比抵抗の高い範囲である。三箇所に分割できるか一体のものであるかは不明だが、一部に直線的な形態を示すので、何らかの人工的な構造物である可能性がある。それを否定するには、より狭い電極間隔による測定が有効かもしれない。すなわち、浅い層位を目標とした測定である。

なお、以上に述べた所見は、測定時に得た断片的な知識を基にしたものであるので、今まで鹿苑寺の調査に従事された諸氏の遺構理解に係わる情報を基礎として見直せば、新たな測定結果の判読ができるものと考える。地図上に測定位置が正確に記入され、現代の導水、放水銃、消火栓さらには建造物が明示されれば、測定結果から読み取るべき情報かどうかの取捨選択が可能となる。その段階での再検討が必要であることを付記しておきたい。

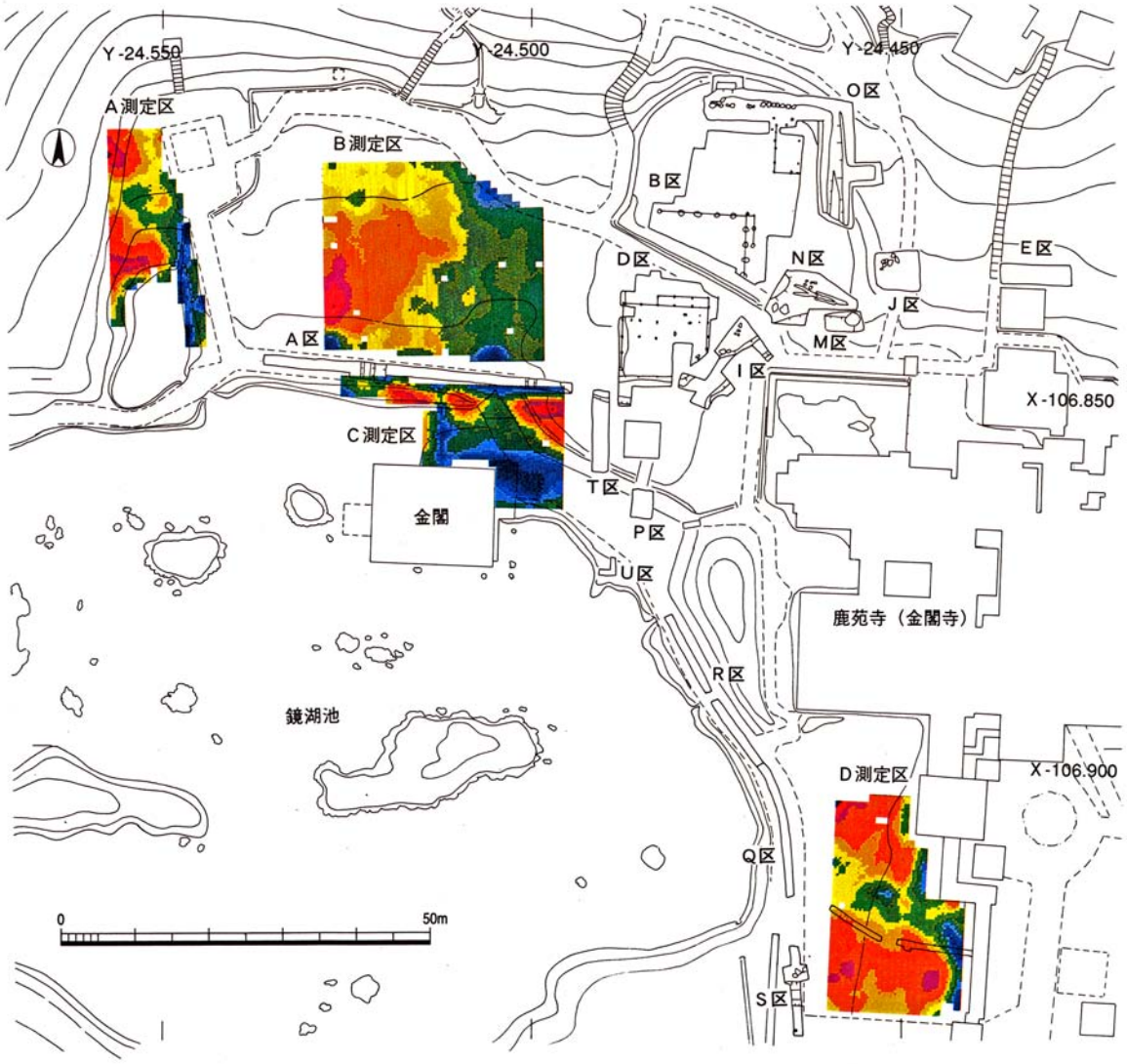


図 49　電気探査コンタ図（Log　Scale：測定値を自然対数におきなおしたもの）(1:1,000)

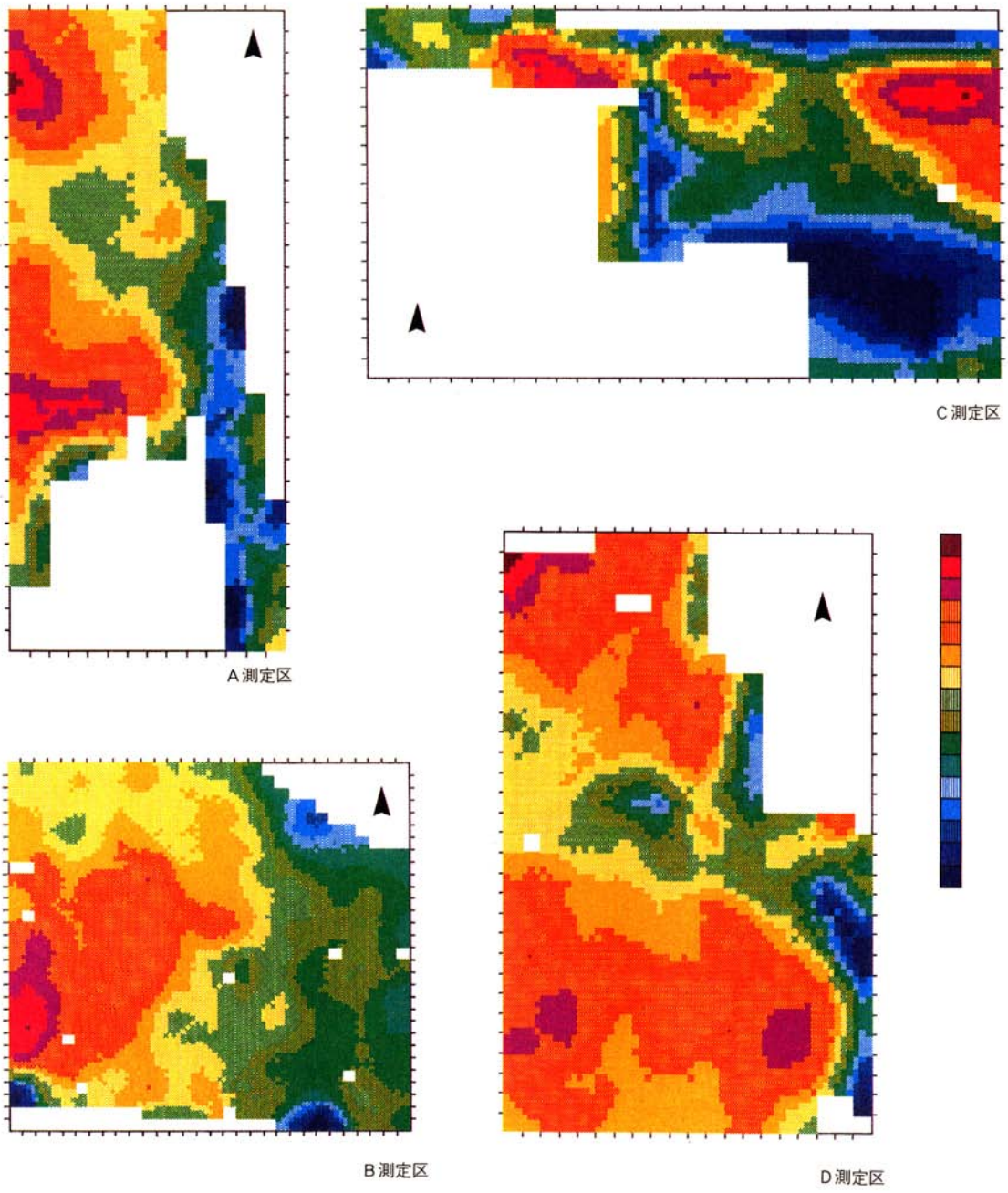


図 50　電気探査データ図

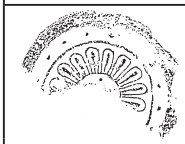
軒丸瓦	型式番号	文様	直径	中房径	中区径	蓮子数	珠文数	瓦当厚	個体数	出土地点（調査区）
	101	単弁十六弁蓮華文				1+6	16		1	L
	102	蓮華文						2.2	1	Q
	103	単弁蓮華文							2	I・S
	104A	宝相華文							1	L
	104B	宝相華文			7.0			2.2	2	F・O
	105A	複弁蓮華文		3.0	6.5				1	O
	105B	複弁蓮華文	10.0						1	D
	106	複弁蓮華文	10.0	2.8	5.9			1.5	2	O・Q
	107A	三巴文（右巻）			6.5		24？	2.5	2	B・J
	107B	三巴文（左巻）						2.1	1	立会
	108A	三巴文（左巻）	12.2		6.5		12	3.0	3	C
	108B	三巴文（右巻）							1	H
	109A	三巴文（左巻）	14.3		7.8		24	3.0	9	A・C・E・N・O・W
	109B	三巴文（左巻）	14.6		8.0				1	C
	109C	三巴文（右巻）							1	N
	110	三巴文（右巻）	10.1		5.8			1.5	1	J

表 2　軒瓦計測表 (1)

軒丸瓦	型式番号	文様	直径	中房径	中区径	蓮子数	珠文数	瓦当厚	個体数	出土地点（調査区）
	111A	三巴文（左巻）	12.5		6.7		19	2.3	20	B・C・D・I・K・N・O・R・V
	111B	三巴文（左巻）	13.0		7.0		24	2.1	8	A・B・D・N・Q・S
	111C	三巴文（左巻）							1	立会
	112A	三巴文（左巻）	10.8		6.1			2.0	13	D・E・I・J・K・O・S・W
	112B	三巴文（左巻）	10.5		8.2			2.0	3	A・O
	113	三巴文（左巻）							1	L
	114	三巴文（右巻）	10.2					1.5	2	立会

軒平瓦	型式番号	文様	上弦	下弦	厚さ	顎形態	瓦当厚	外区文様	個体数	出土地点（調査区）
	201A	均整唐草文			7.5		2.0	珠文24	1	立会
	201B	均整唐草文			7.3		2.5	珠文	1	I
	202	均整唐草文						珠文	1	L
	203A	均整唐草文			5.0		3.2		2	F・I
	203B	唐草文							1	F
	204	唐草文	20.0	19.0	3.8				3	F・N
	205	唐草文			4.1		1.7		4	F・S・V
	206	唐草文							1	I

表 2　軒瓦計測表 (2)

軒平瓦	型式番号	文様	上弦	下弦	厚さ	顎形態	瓦当厚	外区文様	個体数	出土地点（調査区）
	207A	菊花唐草文	24.1	23.4	4.7		2.0		9	B・C・O・S
	207B	菊花唐草文							1	W
	208A	菊花唐草文	18.5	18.4	2.8				31	B・C・D・I・K・N・O・V
	208B	菊花唐草文			3.2		1.7		11	B・D
	208C	菊花唐草文			3.2		1.5		6	A・I・K
	208D	菊花唐草文					0.8		1	A
	209A	菊花唐草文	15.7	15.7	3.4		1.2		29	B・D・I・N・Q・V
	209B	菊花唐草文	15.0	15.0	2.1		1.7		2	A・N
	209C	菊花唐草文			2.6		1.7		2	D・R
	209D	菊花唐草文					1.5		1	D
	210	菊花唐草文					1.7		1	I
	211A	剣頭文			3.1	折曲	1.5		1	V
	211B	剣頭文			3.5	折曲	1.3		1	立会
	211C	剣頭文			3.7	折曲	1.5		1	O
	211D	剣頭文			3.7	折曲			2	D
	211E	剣頭文			3.1	折曲	1.7		2	B・L

表 2　軒瓦計測表 (3)

軒平瓦	型式番号	文様	上弦	下弦	厚さ	顎形態	瓦当厚	外区文様	個体数	出土地点（調査区）
	211F	剣頭文				折曲			1	W4
	212A	剣頭文			2.3	折曲	1.3		3	B・J・N
	212B	剣頭文			2.6	折曲	1.0		3	J
	212C	剣頭文			2.0	折曲	1.4		2	K
	213	剣頭文			2.5	折曲	1.6		3	F・W
	214	花菱文			5.5	包込	2.0		2	B・J
	215	幾何学文			3.9		1.5		2	B・N
	216	水波文			3.0		1.3		3	J・N

表 2　軒瓦計測表 (4)

番号	工程の特徴	形　態　・　手　法	該 当 期 間
1	丸瓦用粘土板の切断法	痕跡が斜めに入り、湾曲した円弧を描く。糸切によるとされるが、鉄線の可能性も残る。	17 世紀初頭まで続く。
2	丸瓦凹面の布目痕跡	布目は縦糸と横糸が 3 ㎝あたり 30 本から 40 本。	
3	丸瓦凹面の吊り紐痕跡	紐を山の部分で一回転させてループ状にする (C)。	(C) は 15 世紀前葉から中葉まで。
4	丸瓦凸面の縄タタキ痕	狭端部付近にわずかにみられるが、広端部はすべて磨き消されている。	15 世紀後半まで。
5	丸瓦凹面の内叩き痕	楕円形の内叩き痕を認めるものが数片ある。	15 世紀中葉から 19 世紀まで。
6-1	丸瓦各部の面取り	両側縁・凹面側の面取り幅約 2.5 ㎝。	15 世紀
6-2		広端縁の凹面側の面取り (B)、面取り幅 6 ～ 8 ㎝。	15 世紀
6-3		広端縁の凹面側の面取り (A)、(B) の上からさらに 0.1 ～ 0.3 ㎝の面取り。	14 世紀中葉以降。
6-4		玉縁部側縁の凸面側の面取り、胴部狭端までおよぶ (B)。	15 世紀前葉から。
6-5		玉縁部側面の凹面側の面取り (B)、3 ㎝削り取る。	通時的にみられる。
6-6		玉縁部側面の凹面側の面取り (A)(B) の上から測縁だけを 0.2 ㎝ほど施す。	15 世紀から始まる。
6-7		玉縁部端面凸面側の面取り、全てにみられる。	15 世紀前葉から始まる。
7	釘穴	胴部に焼成以前にあけられた釘穴が数片ある。細い針金穴はない。	近世まで釘穴はある。
8	ハナレ砂	すべてハナレ砂使用。	12 世紀から 16 世紀まで。
9	瓦当と丸瓦の接合法	瓦当裏面の丸瓦接合位置は軽く指ナデするだけのもの (B)。	14 世紀中葉から 17 世紀まで。
10	瓦当部の調整	瓦当外縁は未調整。瓦当裏面は横方向主体のナデで全体を平坦にし、顎が角張る (B)。	12 世紀末から 15 世紀まで。
11	軒丸瓦の側面接合部の側面観	丸瓦側面に粘土を加え、丸瓦側面が滑らかなカーブで瓦当裏面につながるもの (B)。	15 世紀前半の後出から。
12	軒丸瓦の側面接合部の下面観	丸瓦先端と瓦当裏面の間に粘土を加えてバチ型にする。	14 世紀から始まる。
13	いぶし焼き	瓦に炭素を吸着させ黒色化。	室町以降。
14	法量	大型丸瓦全長 30 ㎝、胴部長 25 ㎝。中型丸瓦全長 25 ㎝、胴部長 21.5 ㎝。小型丸瓦全長 22㎝。	

表 3　軒丸瓦・丸瓦の技法

番号	分類	種類	樹種	長さ単位cm	幅単位cm	高さ単位cm	番号	分類	種類	樹種	長さ単位cm	幅単位cm	高さ単位cm
1	運搬具	修羅	クリ	350	140	32～45	24	祭祀具	剣形	スギ	10.2	1.9	0.2
2	運搬具	修羅	ケヤキ	470	130	20～35	25	祭祀具	剣形	スギ	20.8	4.8	0.6
3	祭祀具	人形	スギ	12.4	1.5	1.5	26	祭祀具	剣形	スギ	19.5	3.9	0.7
4	祭祀具	人形	スギ	8.8	1.4	0.8	27	祭祀具	鞘	ヒノキ	17.2	2.1	0.8
5	祭祀具	人形	ヒノキ	13.4	2.1	0.2	28	祭祀具	鞘	スギ	19.6	2.5	1.2
6	祭祀具	人形	ヒノキ	7.1	1.7	0.2	29	祭祀具	鞘	スギ	16.6	2.3	0.9
7	祭祀具	陽物形	スギ	11.8	1.6	0.7	30	祭祀具	鞘	スギ	14.0	1.9	0.9
8	祭祀具	陽物形	ヒノキ	10.5	2.1	0.2	31	祭祀具	鞘	スギ	13.2	1.7	0.7
9	祭祀具	舟形	ヒノキ	6.5	1.8	0.7	32	祭祀具	鞘	ヒノキ	9.3	1.6	0.5
10	祭祀具	舟形	ヒノキ	10.5	2.6	1.4	33	祭祀具	鞘	ヒノキ	11.7	2.1	1.2
11	祭祀具	刀形	スギ	55.7	3.2	0.5	34	祭祀具	斎串	コウヤマキ	9.5	1.1	0.2
12	祭祀具	刀形	スギ	29.7	2.7	0.6	35	祭祀具	斎串	スギ	12.2	1.1	0.9
13	祭祀具	刀形	スギ	36.6	2.3	0.7	36	祭祀具	斎串	スギ	10.7	1.1	0.9
14	祭祀具	刀形	ヒノキ	31.3	2.5	1.3	37	祭祀具	斎串	スギ	13.1	0.9	0.2
15	祭祀具	刀形	スギ	26.4	4.2	0.9	38	祭祀具	斎串	スギ	17.7	1.1	0.2
16	祭祀具	刀形	スギ	22.6	3.7	1.2	39	祭祀具	斎串	スギ	22.8	0.9	0.6
17	祭祀具	刀形	スギ	25.2	2.5	0.7	40	祭祀具	斎串	スギ	23.0	0.8	0.6
18	祭祀具	刀形	スギ	10.0	2.0	0.5	41	祭祀具	斎串	スギ	16.7	1.2	0.6
19	祭祀具	刀形	スギ	15.5	2.2	0.8	42	祭祀具	斎串	スギ	14.3	1.8	0.6
20	祭祀具	刀形	スギ	17.2	1.2	0.6	43	祭祀具	斎串	スギ	15.9	1.7	0.9
21	祭祀具	刀形	スギ	17.7	1.6	0.4	44	祭祀具	斎串	スギ	12.8	3.0	0.2
22	祭祀具	剣形	スギ	10.6	2.4	0.4	45	祭祀具	琴柱形	コウヤマキ	8.0	3.6	0.4
23	祭祀具	剣形	ヒノキ	10.2	1.9	0.2	46	祭祀具	鳴鏑	ヒノキ	φ3.5	2.0	

表4　木製品観察表（1）

番号	分類	種類	樹種	長さ単位cm	幅単位cm	高さ単位cm	番号	分類	種類	樹種	長さ単位cm	幅単位cm	高さ単位cm
47	祭祀具	糸巻き	スギ	14.7	1.0	1.3	70	食事具	箸	スギ	20.6	0.7	0.5
48	祭祀具	傘（轆轤）	ミズキ？	φ2.5	4.8		71	食事具	杓子形	スギ	16.3	5.7	0.4
49	遊戯具	木球	カキ	φ5.1	6.1		72	食事具	匙形	スギ	7.2	2.5	0.4
50	服飾具	下駄	ヒノキ	22.3	10.4	5.3	73	容器	漆器椀	サクラ	φ6.7		
51	農具	木錘	スギ	12.3	3.0	2.2	74	容器	漆器椀	シオジ			
52	部材	格子桟	ヒノキ	42.2	1.7	1.5	75	容器	漆器椀	カエデ	φ13	4.1	
53	部材	格子桟	ヒノキ	34.6	1.7	1.5	76	容器	蓋	スギ	φ4.8	0.3	
54	部材	格子桟	ヒノキ	30.3	1.7	1.6	77	容器	蓋	スギ	φ7.0	0.5	
55	部材	支脚	ヒノキ	8.3	2.5	3.0	78	容器	蓋	ヒノキ	φ8.5	0.6	
56	部材	台脚	アスナロ？	25.3	1.7	3.3	79	容器	蓋	ヒノキ	13.5	0.6	
57	部材	台脚	スギ	30.5	1.0	2.9	80	容器	曲物底	スギ	φ5.6	0.7	
58	部材	台脚	スギ	24.1	1.4	3.3	81	容器	曲物底	スギ	φ6.0	0.6	
59	部材	台脚	スギ	26.5	1.2	2.1	82	容器	曲物底	スギ	φ6.0	0.6	
60	部材	台脚	スギ	22.5	1.3	4.1	83	容器	曲物底	ヒノキ	φ10.1	0.6	
61	部材	台脚	スギ	25.7	1.0	2.1	84	容器	曲物底	ヒノキ	φ9.9	0.5	
62	部材	台脚	ヒノキ	11.6	1.2	3.2	85	容器	曲物	スギ	φ6.0	4.5	
63	部材	支脚	ヒノキ	7.3	1.0	2.0	86	容器	曲物	スギ	φ7.0	0.6	
64	食事具	箸	スギ	28.8	1.0	0.6	87	容器	曲物	スギ	15.2	4.7	
65	食事具	箸	スギ	24.4	0.6	0.4	88	容器	曲物	スギ	19.6	6.7	0.3
66	食事具	箸	スギ	23.2	0.7	0.4	89	容器	曲物	スギ	9.6	5.2	0.3
67	食事具	箸	スギ	22.1	0.9	0.4	90	容器	折敷	スギ	12.9	12.9	0.2
68	食事具	箸	スギ	22.2	0.7	0.5	91	容器	折敷	スギ	12.8	12.6	0.1
69	食事具	箸	スギ	20.2	0.7	0.5	92	容器	折敷	スギ	12.6	6.5	0.1

表４　木製品観察表（2）

番号	分類	種類	樹種	長さ単位cm	幅単位cm	高さ単位cm	番号	分類	種類	樹種	長さ単位cm	幅単位cm	高さ単位cm
93	容器	折敷	スギ	13.1	12.0	0.1	116	用途不明		スギ	6.2	5.3	0.6
94	容器	折敷	スギ	12.7	11.0	0.1	117	用途不明		ヒノキ	5.1	4.1	5.5
95	容器	折敷	スギ	12.9	10.2	0.2	118	用途不明		スギ	8.4	1.9	0.4
96	容器	折敷	ヒノキ	11.2	6.2	0.1	119	用途不明		スギ	10.1	3.9	0.6
97	容器	折敷	スギ	9.9	10.0	0.1	120	用途不明		ヒノキ	13.8	3.5	0.1
98	容器	折敷	スギ	9.6	9.8	0.1	121	用途不明		ヒノキ	14.5	3.5	0.7
99	容器	折敷	スギ	9.9	5.0	0.1	122	用途不明		スギ	15.7	4.7	0.4
100	容器	折敷	スギ	9.7	9.4	0.1	123	用途不明		スギ	14.0	3.2	2.9
101	容器	折敷	ヒノキ	9.1	8.5	0.2	124	用途不明		ヒノキ	18.2	2.5	1.2
102	容器	折敷	スギ	9.9	6.7	0.1	125	用途不明		スギ	20.4	φ1.2	
103	容器	折敷	スギ	9.7	6.3	0.1	126	用途不明		スギ	25.2	4.3	3.7
104	用途不明		ヒノキ	22.0	1.0	0.5	127	用途不明		ヒノキ	20.5	9.9	5.2
105	用途不明		ヒノキ	5.3	φ1.7～	1.2	128	墨書板		スギ	47.9	9.7	0.4
106	用途不明		ヒノキ	3.3	1.9	1.9	129	墨書板		スギ	4.5	1.7	0.1
107	用途不明		コウヤマキ	11.2	1.1	0.8	130	墨書板		ヒノキ	3.9	1.5	0.2
108	用途不明		ヒノキ	4.1	1.8	0.3	131	墨書板		ヒノキ	8.0	1.5	0.2
109	用途不明		スギ	3.1	2.2	0.9	132	墨書板		ヒノキ	14.2	3.8	0.4
110	用途不明		スギ	8.4	5.2	0.3	133	用途不明	漆製品	ヒノキ	7.2	1.8	1.0
111	用途不明		スギ	11.0	4.5	0.9	134	用途不明	漆製品	ヒノキ	5.1	2.0	1.3
112	用途不明		アスナロ	12.7	2.8	1.0	135	用途不明	漆製品	アスナロ	17.3	1.3	0.6
113	用途不明		スギ	11.0	3.7	1.1	136	用途不明	漆製品	ヒノキ	12.6	1.8	1.1
114	用途不明		ヒノキ	12.2	3.2	0.3	137	仏頭		ヒノキ	11.6		2.7
115	用途不明		スギ	20.2	4.8	0.7	138	雑具	燈台		φ9.5	1.5	

表4　木製品観察表 (3)

年　　号	西暦	行　　事	文　　献
応永４年４月16日	1397	北山第寝殿立柱上棟	『足利官位記』『在盛卿記』
応永５年４月22日	1398	安鎮法	『門葉記』『尊道親王行状』
12月20日		泰山府君祭	『迎陽記』
12月21日		東方清流祭	『迎陽記』
応永６年４月８日	1399	東方清流祭	『迎陽記』
４月14日～22日		大法華経法	『迎陽記』
４月19日～26日		法華懺法	『迎陽記』
５月12日～19日		大六字法、泰山府君祭	『迎陽記』
６月23日～７月１日		五壇法、三萬六千神祭	『迎陽記』
７月20日～26日		大北斗法、天曹地府祭	『迎陽記』
８月19日～25日		無名大法	『迎陽記』『華頂要略』
９月22日～29日		金剛童子法、泰山府君祭	『迎陽記』
応永７年２月16日～22日	1400	七佛薬師法	『兼宣公記』
３月９日～15日		泰山府君祭	『広橋家記録』
３月９日～15日		祈祷	『吉田家日次記』
４月27日（結願日）		大法	『兼敦朝臣記』
６月１日～８日		五壇法	『柳原家記録』『五壇法記』
７月４日		五壇法（関東の静謐祈る）	『柳原家記録』『尊道親王行状』
応永８年正月24日（結願日）	1401	閻魔天供	『諸祭文故実抄』『続史愚抄』
正月24日（結願日）		尊星王法	『迎陽記』『続史愚抄』
閏正月17日～24日		不動法	『迎陽記』
閏正月17日～24日		泰山府君祭	『続史愚抄』
２月３日		法華懺法	『吉田家日次記』
２月18日～24日		七佛薬師法	『迎陽記』『吉田家日次記』
３月２日		後加持、不動息災法	『永助法親王記』
３月３日		東方清流祭、北斗	『迎陽記』
３月10日		大般若法、泰山府君祭	『迎陽記』
５月21日～28日		如法経会	『教言卿記』『門葉記』
６月23日～７月１日		五壇法	『五壇法記』『五大成』『迎陽記』
７月24日～８月１日		如法尊勝法	『迎陽記』『門主傳』
７月24日～８月１日		泰山府君祭	『迎陽記』
８月３日～10日		熾盛光法	『迎陽記』
９月３日～10日		金剛童子法、天曹地府祭	『迎陽記』
12月１日		北山第惣社に神楽（以下神楽）	『御神楽雑記』
応永９年正月16日	1402	廻祈祷	『兼宣公記』
正月22日～28日		御修法、天曹地府祭	『兼宣公記』
正月24日		地蔵講	『兼宣公記』
２月17日		彗星御祈	『兼宣公記』
５月18日（結願日）		大法	『吉田家日次記』
６月９日～15日		五壇法	『五壇法記』
９月８日		如法尊勝法	『門主傳』

表５　北山殿で行われた宗教行事（1）

年　　号	西暦	行　　事	文　　献
12月 1 日		神楽	『御神楽雑記』『吉田家日次記』
2日～6日		法華八講	『兼宣公記』『大乗院日記目録』『興福寺略年代記』
応永10年正月17日	1403	廻祈祷	『永助法親王記』
正月19日		後加持、惣社に大般若経転読	『永助法親王記』
2 月 3 日		大覚寺宮（道寛法親王）御加持（北山第中門造作の為）	『兼宣公記』
2 月 4 日		北斗法	『兼宣公記』
2 月 5 日		中門造作立柱	『兼宣公記』
2 月19日～25日		七仏薬師法	『兼宣公記』『吉田家日次記』
4 月13日		東方清流祭	『諸祭文故実抄』
6 月 5 日		五壇法	『兼宣公記』『五壇法記』
10月 8 日～14日		八字文殊法、天曹地府祭	『兼宣公記』
12月 1 日		神楽	『御神楽雑記』『吉田家日次記』
12月 2 日～ 6 日		法華八講（義詮の命日の為）	『吉田家日次記』
応永11年正月16日～23日	1404	尊星王法、天曹地府祭	『兼宣公記』
2 月18日～24日		金剛童子法、泰山府君祭	『兼宣公記』
3 月10日		大般若法、泰山府君祭	『兼宣公記』
4 月 3 日		立柱の儀（相国寺大塔を北山に建てんとして）	『教言卿記』『大乗院日記目録』『興福寺年代記』『東寺百合文書』
4 月19日～25日		文殊八字法、泰山府君祭	『兼宣公記』
5 月16日～22日		仁王経法	『兼宣公記』
5 月19日		泰山府君祭	『兼宣公記』
5 月13日～20日		五壇法、三万六千神祭	『兼宣公記』
5 月19日～26日		一字金輪法、天曹地府祭	『兼宣公記』
5 月15日～21日		大六字法、泰山府君祭	『兼宣公記』
5 月14日		尊勝法、天曹地府祭	『兼宣公記』
10月13日～20日		法華法、三万六千神祭	『兼宣公記』
11月13日～20日		不動法、天曹地府祭	『兼宣公記』
12月 1 日		神楽	『御神楽雑記』
12月 6 日		法華八講（義詮追薦の為）	『寺院細々引付』
応永12年 6 月 9 日～15日	1405	五壇法	『五大成』『五壇法記』
7 月 4 日～11日		泰山府君祭	『兼宣公記』『教言卿記』
7 月 4 日～11日		一字金輪法	『兼宣公記』
11月 8 日		如法不動法	『教言卿記』
12月 1 日		神楽	『御神楽雑記』
12月 1 日～ 6 日		法華八講	『教言卿記』『続史愚抄』『北山殿御八講参仕記』
応永13年正月16日～23日	1406	尊星王法	『兼宣公記』『教言卿記』『砂厳記』
正月16日～22日		天曹地府祭	『兼宣公記』『教言卿記』『砂厳記』
正月28日		不動法	『真言諸寺院記』
3 月 8 日		北山殿北御所寝殿立柱上棟	『教言卿記』『荒歴』
6 月19日～26日		八字文殊法、五壇法	『教言卿記』『五大成』『五壇法記』

表 5　北山殿で行われた宗教行事 (2)

年　　号	西暦	行　　事	文　　献
7 月 5 日～ 12日		御修法	『教言卿記』
12月 1 日		神楽	『御神楽雑記』
応永14年正月16日～ 23日	1407	尊星王法	『教言卿記』
3 月20日～ 26日		御修法	『教言卿記』
6 月15日～ 21日		北山第新造の寝殿に安鎮法	『応永 14 年暦日記』
6 月21日		三萬六千神祭	『諸祭文故実抄』
6 月21日～ 27日		五壇法	『五大成』『教言卿記』『五壇法記』
12月 1 日		神楽	『御神楽雑記』
12月 3 日～ 7 日		法華八講	『教言卿記』
応永15年正月16日～ 23日	1408	尊星王法	『教言卿記』
5 月 3 日		神楽（義満、病気平癒を祈る）	『御神楽雑記』
5 月 6 日		義満死亡	『教言卿記』『萬山編年精要』
6 月26日		義持、祈祷を行う（これより以降主催者は義持）	
10月12日		亥子の祝	『教言卿記』
11月 2 日～ 9 日		祈祷	『教言卿記』
11月25日～晦日		五壇法	『教言卿記』『五壇法記』
12月 1 日		神楽	『御神楽雑記』
12月 2 日～ 6 日		法華八講（祖父義詮冥福の為）	『教言卿記』
12月20日		泰山府君祭（於北御所）	
応永16年正月23日～ 28日	1409	修法（祈祷）	『教言卿記』
3 月16日		祈祷、大般若法	『教言卿記』
3 月20日		泰山府君祭	『教言卿記』
3 月24日		五壇護摩（於馬場御所）	『臥雲日件録』
5 月 2 日～ 6 日		法華八講（義満一周忌の為）	『教言卿記』
12月 1 日		神楽	『御神楽雑記』
応永17年 5 月 6 日	1410	如法経十種供養（義満三周忌の為）	『満済准后日記』
12月 1 日		神楽	『御神楽雑記』
応永18年12月 1 日	1411	神楽	『御神楽雑記』
応永19年 8 月29日	1412	称光天皇践祚	
12月 1 日		神楽	『御神楽雑記』
応永20年12月 1 日	1413	神楽	『御神楽雑記』
応永21年12月 1 日	1414	神楽	『御神楽雑記』
応永22年12月 1 日	1415	神楽	『御神楽雑記』
応永23年正月 9 日	1416	七重塔炎上	『看聞御記』
12月 1 日		神楽	『御神楽雑記』

表 5　北山殿で行われた宗教行事 (3)

年　号	西 暦	記　事
寛永13年 4 月28日	1636	鹿苑寺書院新築成る
8 月16日		仙洞（後水尾上皇）より諫早椿の寄木拝領す
10月11日		三條西実條鹿苑寺を訪れ金閣にて遊興す
寛永14年 4 月 4 日	1637	人足 30 人により瀧の石を置き直す
4 月11日		北山林中において海石川石を掘り出し蓮池を修理
5 月25日		狩野守信（探幽）より書状と押絵贈られる
8 月15日		細川三斎（忠興）公北山見物、鹿苑寺に遊ぶ
9 月15日		近衛信尋・金森宗和ら鹿苑寺に来る
10月15日		庭の嶋の松の笠を結ぶ
寛永15年 2 月13日	1638	小谷宗治を呼び練柿の接木 4 ～ 5 本、門前で行う
7 月17日		田中宗因・宗貞と薄茶を点ず
7 月27日		菩提瀧見物の来客あり
9 月23日		高尾より川石を運ばせる
寛永16年 3 月11日	1639	久圓、椿花二種を持参す
4 月 2 日		庭石を芝山宣豊に贈る
5 月13日		門前より真竹を移植する
8 月 7 日		海石を黒砂糖でもって継ぐ
9 月 2 日		躑躅・木舜・椿を相国よりとりよせ花壇へ栽す
9 月 6 日		池の掃除と普請
9 月10日		鹿苑寺で連歌の会
9 月11日		町椿を久圓にもらい花壇へ
9 月18日		中島の松を手入れする、久圓からの夏菊を栽す　書院の炉畳を敷き直す
9 月29日		五葉舟松の手入れ
11月 1 日		山上にて下草真松を刈る
11月13日		千宗旦を招き振舞と点茶
閏11月28日		海石の盆石を漆で接ぐ、盆石を買い蘆山と名づく
寛永17年正月19日	1640	石不動で青梨・桜を接木す
2 月 2 日		金森宗和来寺
2 月 3 日		草花の種を播く
2 月 5 日		秋菊を栽す、他所より菊四種来てこれも栽す
2 月18日		松作りの久栄を近江にやりて五葉松を掘らしむ
3 月15日		久栄ら三人を膳所にやりて五葉の株松を堀らしむ
5 月 8 日		千宗旦来寺
5 月20日		泉水に海石を置く
6 月26日		人足 13 人で池の掃除
8 月 9 日		五葉松入舟・海石を栽す
9 月26日		金閣前の池掃除
寛永18年 2 月19日	1641	山上より大株の松を堀り取寄せ植える
3 月 8 日		寺池に蓮を植栽す（北の小池に二本、閣前の池に八本）
2 月21日		狩野探幽ら来寺
5 月 8 日		千宗旦、宗左来寺
6 月26日		石不動を開帳す
9 月22日		蘆山と号す盆石を久栄に預く
12月30日		鹿苑寺上台所普請のため柱一本立て棟木を上げる
寛永19年正月 5 日	1642	鹿苑寺上台所普請
2 月25日		鹿苑寺上台所立柱
3 月15日		鹿苑寺上台所竣工
3 月24日		鹿苑寺方丈柱の根継を申付ける
4 月21日		畳屋来たりて上台所の畳刺し合わす
6 月16日		北条氏重に盆石を貸す
7 月11日		久栄来たりて海石の盆山を漆で修繕す

表 6　隔蓂記年表（1）

年　号	西 暦	記　事
10月19日		岡松に笠を結び石橋の五葉松の笠を直す
11月 6 日		板倉重宗ら金閣見物に来寺
12月16日		久栄来たり中島の男松の笠を直す（松を手入れす）
12月17日		久栄来たり舟の五葉松の笠を結ぶ
12月18日		久栄来たり黒舟の五葉松の笠を取懸る　節分
寛永20年 2 月 8 日	1643	久栄来たり五葉松の舟の土を除く
4 月15日		久栄、海石を漆にて継ぐ
5 月 2 日		梅林能圓月次連歌、紫小屋の修理と風呂釜の塗り直し
5 月 3 日		仙洞より紅葉傘を拝領す
7 月 5 日		久栄、海石の盆山石を堀り漆で之を継ぐ
12月20日		石工を呼び海石を切らしむ
12月21日		久栄見立の五葉松小木三本買う
寛永21年 2 月16日	1644	金閣の修理始まる
3 月10日		五葉松を求む
4 月20日		千宗旦・古筆了佐らを招く
7 月 3 日		門前の百姓共呼び閣の前の池の掃除、人足 60 人余
7 月16日		山上で万灯篭見物
8 月11日		鹿苑寺庭園の一部を改造す（作庭の梅木堀除く、立石共除く）
9 月13日		書院の樹木を植え替え
正保 2 年正月 1 日	1645	門前の大工・百姓ら参賀
正月22日		因幡より細川梅の接木来る
正月23日		因幡へ諫早椿の寄木などを送る
9 月23日		久栄を呼び五葉松を直す
10月12日		人足 15 ～ 6 人で石不動の庭を改造す
11月19日		玉舟宗璠来寺
正保 3 年 2 月 9 日	1646	久栄、瀧石之松を撓める
7 月25日		門前の人々、雨降りの礼の踊りを鹿苑寺山内でも踊る
8 月11日～ 12日		金閣前の池普請と掃除、池より多くの泥土取り上げる
9 月10日		庭石を置く
9 月22日		柚木を植える
12月24日		鹿苑寺茶屋の傍らに寮を建てる
正保 4 年正月 1 日	1647	嘉祥祝いの呪詛の達磨法（諸神・諸仏の祈祷）を行ず
3 月 4 日		人に頼まれ古筆了佐に古今集の鑑定を依頼する
5 月17日		久栄を呼び五葉舟松を直す
5 月17日		千重之躑躅（五月也）壹本買う
5 月17日		門前の百姓を呼び書院前庭並びに不動の上山の樹枝を洗はしむ
7 月23日		門前百姓の雨乞、色々衣服を飾り飛ぶ。不動前にて雨請踊り
8 月 6 日		金閣前の池掃除　百姓 91 人出る
8 月10日		本阿弥光甫来寺
9 月17日		久栄を呼び五葉大株松を移植す
10月 3 日		方丈の庭に岡松を植える
11月15日		圓照寺大通文智尼公鹿苑寺観音像に金子を寄進す
正保 5 年 2 月11日	1648	人足 10 人で金閣の通路を作る
2 月20日		鹿苑寺寮の普請を始める
2 月20日		河内より炭焼の六右衛門来て炭竈据えて黒炭を焼く
3 月10日		金閣前の池に蓮を植える
4 月 5 日		池田光政、金閣見物に来寺
慶安元年 8 月29日	1648	鹿苑寺の掃除　人足 74 人（他所からの加勢人を含む）
9 月14日		鹿苑寺林中の松木五本を普請用材として伐採す
9 月17日		金森宗和・桑山一玄ら来寺
11月10日		鹿苑寺馬場林中の普請（植木など）

表 6　隔蓂記年表 (2)

年　号	西 暦	記　事
慶安２年正月18日		金閣修理工事始まる（6 月 1 日に落成）
正月25日		金閣の撓みを矢をもって直す
２月８日		金閣屋根を葺き始める
２月22日		金閣の銅樋完成
２月22日		金閣の柱を新しく取替える
３月15日		金閣の風鐸８個新鋳せらる
４月16日		相国寺大通院へ鹿苑寺から古壊瓦を運ぶ
５月22日		金閣上層に銅樋を架設す
６月２日		飾屋五左衛門来たりて金閣の義満像の厨子の唐戸に金物を打つ
６月６日		山本友我老の者来たりて金閣の小壁を彩色す
６月８日		金閣二層に銅樋を架設す
６月８日		山本友我法橋、来寺して金閣の作業を見る
６月11日		金閣の彩色終了
６月16日		金閣の掃除、洗拭
12月25日		餅搗　鹿苑寺井戸を掘る
慶安３年４月24日	1650	書院庭に飛石を据え芝を植える
４月25日		立花を催す
６月22日		金閣前池の白蓮開花す
６月25日		千宗旦招き茶湯を催す、宗旦に承章の茶杓を珠光作と鑑定してもらう
６月27日		仙洞より肥前国雲仙躑躅を拝領
７月16日		山上に登り万灯篭見物、山上大文字に点火す、石不動において梵魯念仏あり
７月24日		狂言師小泉惣兵衛、弟子と共に来寺し演じる
８月８日		玉舟宗璠らを招き詩歌会を催す
９月12日		鹿苑寺で詩歌会（玉舟翁・能圓など）
慶安４年２月23日	1651	菊苗を植える
４月４日		千葉四季の躑躅接木を求める
４月12日		風車躑躅二本買わしめる
４月24日		蓮台法印に躑躅を贈る
７月28日		万葉躑躅二本・曙一本贈られる
８月21日		薩摩躑躅贈られる
９月26日		人足 10 人呼び閣の池の抜草、水を落す
10月１日		本阿弥光興ら来寺
10月１日		板倉重宗・酒井忠清・吉良義冬ら金閣見物のため来寺
10月５日		白躑躅大木一本もらう
10月21日		シャグマ（赤熊）躑躅の接木を贈られる
10月23日		鹿苑寺門前の畳石を修理す
11月11日		冬至の行事
12月５日		鹿苑寺山内に白炭焼竈を作る
慶安５年２月12日	1652	玉舟宗璠らと狂句連句の会
３月９日		仙洞（後水尾法皇）より菊苗五色拝領し植える
３月21日		江戸躑躅を人に遣る
４月４日		聖護院道晃法親王門主より白牡丹一輪給う
４月16日		仙洞に花と根がついた風車躑躅進上す
４月24日		俳諧師らと俳諧・狂句の会
４月25日		仙洞に根のついた紅七重花一本を献上す
６月15日		玉舟宗璠から鵜鳥贈られ池に放つ
６月22日		鹿苑寺俳諧連歌会
８月26日		冬青樹所望され三本を掘る
９月４日		金森宗和に有平糖と紅木瓜の花を贈る
10月３日		久栄を呼び松を撓む
10月８日		金森宗和に筒竹七本送り花筒製作を依頼す

表６　隔蓂記年表（3）

年　号	西 暦	記　事
10月15日		金森宗和より花入れ筒二丁届く
承応２年正月20日	1653	河内の炭焼六右衛門に申付け鹿苑寺山中にて白炭を焼く
３月20日		草花屋の庄左衛門を呼び躑躅の寄せ接ぎを頼む
３月26日		仙洞より拝領の菊苗を植える
４月４日		鹿苑寺作庭の手洗水所の石、据え直す
７月８日		良仁親王に赤熊躑躅の接木進上す
８月16日		水仙を栽す
９月10日		左官を呼び雪隠壁の上塗りをする
承応３年２月20日	1654	梅モドキ三本を人に贈る
２月25日		鹿苑寺の方丈の屋根を葺きかえる
３月11日		瓦師来たりて方丈屋根葺きかえ終る
４月13日		千宗旦より筒之舟花入を贈られる
４月21日		院に参じ後水尾法皇に五夜起・櫻棘・良香花を献上す
４月28日		仙洞より拝領の御舟修理後に初めて乗る
12月27日		石川丈山より歳暮の品届く
明暦元年２月16日	1655	頼まれていた『漁村夕照』図の賛、清書し渡す
２月19日		大工を呼び台所の大釜の竈を修理させる
２月20日		花屋を呼び青櫻を接木
２月27日		金閣の本尊阿弥陀・両脇の観音勢至・台座とも大仏師左京法眼のところで修理させる
３月５日		連歌と俳諧催す
３月６日		畳屋に茶堂の畳面を替えることを申付ける
３月15日		千宗旦・宗左・宗守来寺
４月６日		金閣の本尊三尊の修理終りとりにやる
８月14日		炎焼した門前百姓50人程に松木５本を与える
10月３日		狩野探幽来寺
明暦２年正月15日	1656	早朝、赤豆粥を喫す
２月24日		金森宗和より自作の花入筒贈られる
明暦３年７月16日	1657	門前の者共、石不動において梵論念仏を行う
11月26日		晴雲軒より大黒天像鹿苑寺に移す
万治元年４月２日	1658	仙洞より白牡丹、紫色珍花などを拝領す
６月20日		仙洞へ鹿苑寺から猿楽の能のための橋懸之松５本を切り進上す
８月23日		人足20人で鏡湖池の掃除
10月11日		仙洞より亥子餅拝領す
10月12日		仙洞より椿の枝と干柿拝領す
万治２年９月10日	1659	木作りの左兵衛を呼び蘭・松・躑躅の移植を依頼す
12月28日		山本友我より池田炭を贈られる
万治３年３月７日	1660	躑躅を移植
３月９日		鞠懸の松２本を掘り人に贈る
３月11日		河内の勝三郎来たりて白蓮30を植える
８月20日		夜中より暴風雨、金閣の戌亥の角破損し、林中・山上の松数千本吹き倒さる
万治４年４月５日	1661	金閣風損の修理普請始まる
４月11日		金閣風損の工事終り屋根を葺く
４月19日		金閣の銅樋修理す
寛文元年６月12日	1661	鹿苑寺連歌の月次会、この日より始行す
６月19日		越前より幸若五兵衛来たり鹿苑寺で舞う
９月28日		鹿苑寺御幸の準備
９月29日		後水尾法皇御幸、金閣・瀧・茶屋を見る　石不動を経て書院へ、金閣で飲酒
寛文２年５月27日	1662	高橋破損の石垣を修理す
７月16日		鹿苑寺山頂で万灯篭
８月18日		鹿苑寺客殿と方丈の修理工事
寛文３年正月15日	1663	大工七左衛門を呼び鹿苑寺上台所の修理模様替え申付ける

表６　隔蓂記年表（4）

年　号	西 暦	記　事
3 月13日		鹿苑寺山上の松木を売却
4 月 3 日		後西上皇より白八重躑躅を拝領す
6 月18日		人足 10 人で鹿苑寺庭池の草刈り行う
7 月14日		鹿苑寺精霊祭
7 月16日		山上で万灯篭
7 月16日		石不動で門前の百姓共梵魯の太鼓
7 月18日		鹿苑寺で雨乞
9 月 5 日		金閣の前池の掃除・草取り
9 月 8 日		門前百姓ら池の草取りを行う
寛文 4 年 3 月23日	1664	門前の百姓 20 人で庭の真砂を運ぶ
6 月 5 日		杜若の根を不動より堀寄せ法皇に献上す
7 月16日		山上で万灯篭　不動で梵魯の太鼓
9 月10日		金閣前の池、掃除と草刈
寛文 5 年 4 月28日	1665	庭前の岡松を直す
11月20日		後水尾法皇より冬咲牡丹・白椿・山茶花などを拝領す
寛文 6 年 2 月24日	1666	河内から来たる藕根（蓮の根）10 本を金閣前池南方に植栽す
4 月13日		鹿苑寺茶屋の風景をよくするため周囲の群木の枝を切る
4 月15日		近衛基熙金閣見物
寛文 7 年 4 月 6 日	1667	本阿弥光甫来訪
10月17日		大工をやり六所宮の宮を鹿苑寺鎮守境内に移す

表 6　隔蓂記年表 (5)